
いつかあの場所で

丹羽遊星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつかあの場所で

【Nコード】

N4114S

【作者名】

丹羽遊星

【あらすじ】

王弟キイルは、お忍びで訪れた保養地で貴族の娘アズノエルと出会う。

それから六年、十八となったキイルは、王子のいない兄王の後継者として立太子されることとなったが、それに伴い、他国の姫を妃に娶るよう迫られる。

キイルはアズノエルを妻とすべく、別の者を王太子に仕立て上げようと画策するが……。

『鈍色の空を溶かして』 過去編。

夢現

午後の陽気は、気だるさと和やかさを織り交ぜている。

定例軍議のために離宮へと向かっていたキイルは、柱廊から望むことのできる庭園へと目を馳せた。そこに彼の心を留め置くものなどなにもない。ただなんとなく、そこから動く気になれなかったのだ。

時折、心を攫っていく虚無……。それは突然舞い降りてきて、いつの間にか過ぎ去っていき、身体中の感覚が塞がれていくような心地を彼に与える。

「いい日和でございますね」

軍議の開始時刻は既に過ぎているというのに、ロベルトはキイルを急かしはしなかった。

キイルが曖昧に相槌を打つと、ロベルトはぽつりぽつりとなにかを話し始めた。彼の言葉にはどこか泡沫うたかたの響きが伴っていたが、それを現うつの世界へと引き戻したのは、涼やかでありながらも雄々しい声であった。

「王弟殿下、ここにいらっしゃったのですか」

背後に立つ長身の男は、アシュレイ・グレンヴィル少将であった。国内屈指の伯爵家の当主であるアシュレイは、彼自身の才腕も相まって、若干二十八ながら少将の階級にまで登りつめている。

「……軍議が始まるのだったな」

遠くを見つめていたキイルは、一呼吸をおいてから言葉を返した。

「はい。皆、アイオーン離宮の“赤の間”に集まっております」

「わかっている」

そう口にしながら、キイルは身を翻した。少しの間をおいて、ロベルトとアシュレイもその後が続いた。

三人は無言のまま離宮への柱廊を進んでいった。途中、中庭の前を通りかかったとき、甲高い声が噴水の近くから響く。

視線を声のほうへ緩慢に向けると、そこには数人の子供の姿がうかがえた。

アシュレイが穏やかな声で呟く。

「ああ、王太子殿下がおられるんですね」

「王太子、か。私はあの王子をそうにお呼びしたくはないのだが」

ロベルトが苦々しげに応えた。日ごろ嫌味らしい言葉など口にすることのない男が、この件に限っては必ず悪態を吐く。

キイルはいつものことだとロベルトを咎めることはせず、じっと子供たちの様子を見つめていた。そこには王太子ミカヤのほか、それよりもやや年少に見える少年と少女が、煌めく水飛沫の間を歩き交っている。

「今日は、貴族の子弟らが来ているのか？」

キイルの問いに、子らのはしゃぐ様子を眺めていたアシュレイが、微笑みながらうなずく。

「お恥ずかしながら私の娘でございます。その隣におられるのがクラウス卿の御子息で、幼いながらしっかりした御子でいらっしゃいますよ」

アシュレイの言葉を聞いたキイルは、わずかに眉をひそめた。なんら他意はないはずのアシュレイの言葉を、キイルは不快に感じてしまった。

あれからもう十年近く経つが、キイルの前でかの一件について話す者はいない。裏へと回れば好き勝手な噂がはこびっているが、キイルは噂などに耳を傾けるつもりもなく、なにを言われようとかまいはしなかった。変に気を遣われるのもまっぴらで、心は頑なに他者の介入を拒み、同情や理解など求めてはいなかった。

……だというのに、あの子の姿を目にしまったからだろうか。心は情けないほど乱れていた。自身の心の弱さを突きつけられたようで、その動揺を隠すだけで精一杯であった。ふとした瞬間に、胸を深く衝くような想いが揺り起こされてしまう。どれほど忘れたふりをしていても、所詮は押し殺していたにすぎないのだと知る。

ロベルトの物言いたげな視線が、キイルの胸をざわつかせた。その視線に耐えかねたように、キイルはもう一度、噴水のほうへ視線を投げる。

あの少年の顔をはつきりと捉えることはできないが、遠目からで

も懐かしい面影を垣間見ることができた。

今、胸の奥に燦るこの想いが愛しさと呼んでいいものなのか、キイルにはわからなかった。

あの当時のことを知る者は多い。だが真実を知る者は少ない。キイル自身、訳のわからぬうちに物事が動いていったのだ。

ただ一つはつきりしているのは、望みの半分は叶ったが、その望みのためにもっとも守りたかったものを失ったということだった……。

柔らかな風が吹く。

キイルは庭園から目をそらし、柱廊を再び歩き始めた。

追憶 湖畔の少女 (1)

想いは、いつも過去へと駆け上る。

きつと私たちは、実を結ぶことのない徒花あたばなであったのだろう。あのとき、お前に手渡した切り花のように……。

十

「キイル殿下、もうすぐ母君の別邸にお着きになりますよ」

デデュー公ミシエルの呼びかけに、キイルは閉じかけていた目を大きく見開いた。

ゴースティン王国首都エクシールより馬車を走らせること二日、キイルはセヴァンス郡オファンへと到着した。王都とセヴァンスは隣り合っており、馬を早く走らせれば一日で辿り着くことも可能である。キイルがセヴァンスへと出かける際は、昼過ぎに宮殿を出てその途中に王家が所有する屋敷で一夜を明かし、翌日の昼にかけて母の住むオファンへと向かうことが恒例となっている。

そんな二日間の移動は、広大な宮殿から出ることないキイルにとつてたいそうな娯楽であった。窓を開けて馬車を走らせることさえ、王都ではありえない。窮屈な宮廷から抜け出すことへの解放感も相まって、目で見る景色だけでなく、肌で感じる空気までもが彼を楽

しませていた。

キイルが五歳のとき、王太后である母はエクシール宮殿を去り、セヴァンスのオフアンにある別邸へと移り住んだ。それから七年が経つ今も、キイルは年に二度ほど母のご機嫌伺いとオフアンを訪れるようになっていた。

その別邸は母の生家であるハーシェリオン家が所有する屋敷の一つで、それほど敷地は大きくないものの、すべてにおいて母好みの趣向が凝らされた空間であった。王宮とは違い、絢爛とした金の装飾や色とりどりの壁画はなく、物々しい胸像は置かれていない。壁も家具も白や淡い色彩を基調としたもので揃えられ、ゆったりとくつろぐことができる造りになっていた。元々はこの屋敷も煌びやかな装飾に囲まれていたそうだが、母が移り住んでから大幅に改装されていったという。

馬車から降り立ったキイルは、左右に立ち並ぶ使用人たちの間を抜け、白亜の階段の前に立つ人物に目を馳せた。そこには青磁色セラドンのドレスを身にまとう母キャサリーゼの姿がある。キャサリーゼが顔を綻ばせて出迎えると、キイルは足早に母のもとへ歩み寄った。

「母上、お久しゅうございます」

「ええ、本当にお久しぶりねキイル。あなたからの手紙が届いてから、今日が待ち遠しくて仕方なかったのよ」

キャサリーゼは息子との抱擁を交わした後、キイルの背後に控えるミシエルに微笑を投げかけた。ミシエルは胸に手を当て、深く頭を下げる。

「王太后陛下、本当にお変わりなく安心いたしました」

「ミシエル、そんなに改まらないでちょうだい。ここは王宮ではないのだから」

デデュー公ミシエルは、キャサリーゼの九歳年下の実弟である。ハーシェリオン家当主であるミシエルはキイルの強力な後ろ盾でもあるが、比較的年の近い叔父であるため、キイルにとっては良き相談相手であった。

三人は応接間に入り、猫足の円卓の席に着いた。給仕の者が香り高いお茶を入れ、卓へと運んでいる最中、キイルは思い出したようにキャサリーゼに切り出す。

「母上、兄上からお手紙を預かってきているのです」

「まあ、陛下から？」

キイルは封蝋が押された封筒を取り出し、キャサリーゼの前に差し差した。それを手に取ったキャサリーゼはほうつと息を吐いた。

「なんだか陛下にはお気を遣わせてばかりで申し訳ないわね。私は自分の勝手でこの屋敷に住まおうと考えただけですのに」
わたくし

今年三十二になるキャサリーゼは、十二年前、義理の息子である第一王子アルトゥーヴィジェの王位継承により王太后となった。

キャサリーゼは先王の二度目の妃であったが、彼女が王妃の位にあったのは十八で王家に嫁ぎ、王が流行り病で急死するまでのわずか二年の間である。親子ほど年の離れた夫には自分より年上の継子があり、さらにその継子に妃も子もいるとくれば、なんのために自分が王妃にと望まれたのかと虚しく思うのも当然であったろう。

そのせいか、キャサリーゼはキイルの前で父王について語ることはほとんどなかった。あるとすれば、長じるにつれ亡き夫の面差しを色濃く宿すようになった息子に、為政者としての父の素晴らしさを説き聞かせることぐらいであった。

波打つ赤い髪に、少し緑がかった碧眼……。

王宮に飾られた若かりし日の父の肖像は、キイルととてもよく似ていた。

「兄上は、なにも母上を責めておられるわけではありませんよ。母上のことを心配なさって私にその手紙を託されただけなのですから。近ごろ、お身体の調子はよろしいのですか？」

「ええ。無理をしなければ、どうということはないわ」

華奢な茶器を唇から離し、キャサリーゼは微笑んだ。

国内屈指の貴族で、かつてのゴースティン王家でもあるハーシェリオン家の生まれであるキャサリーゼは、息子のキイルの目から見ても華やかな美しさを持つ女性であったが、煌びやかな宮殿を離れ、自然に囲まれたセヴァンスに住むことを選んだことから、彼女はその容貌ほど華美なものを好む気質ではなかったのだろう。それならば、今彼女がやっと手に入れた平穏は壊してはならぬものだといキイルは思う。

「ところでキイル、あなたはいつまでセヴァンスに滞在するおつもり？ もう十二におなりなのですから、あまり我儘を通すものではありませんよ」

「母上こそ、エクシユール宮へ一度くらいはお戻りになるつもりはないのですか？ 叔父上は、母上にお戻りいただきたいようですよ」

「あらミシエル、あなたはキイルに私を説得させるおつもりなの？」

キャサリーゼがミシエルに悪戯っぽく笑ってみせると、ミシエルは慌てたように繕う。

「なにも私は姉上に無理強いをするつもりはございません。ギルベイド家の権勢はこびる宮廷に姉上を止め置きたくはありませんからね。……私が気にしておりますのは、殿下の後見の問題にございます」

ギルベイド家とは兄王の外戚であるが、ハーシェリオン家とともに国内外にその名を馳せる大貴族である。この二つの家は元を辿れば同一族であるにもかかわらず、いずれもがかつてのゴースティン王家の支流に当たる家で、王朝を築き上げた家柄であることから、オトウール朝が興つて五百年が経つ今もなお対立関係にある。

それゆえ、ギルベイド家出身の王妃を母に持つ王が、ハーシェリオン家出身の王太后を追放した、と宮廷では噂されている。王と王太后はなんら対立関係になく、いい加減な噂にすぎないのだが、王が国政に対して自らの権力を振るうことができず、外戚の言いなりになっているのは事実である。ミシエルは今の宮廷の有り様がキイルにとって好ましくないと考えており、王太后としてキャサリーゼに宮廷に留まつてほしいと考えていた。

「キイル、あなたには苦勞をかけてしまっているのでしょうかね」

細い眉を下げ、息子の身を案じる母に、キイルは明るく否定する。

「その心配には及びませんよ。兄上は私のことを弟というよりはまるでご自分の子であるかのような扱いですし、姪の王女方も私の姉のような振舞いをされる。不当な扱いなど受けてはおりません」

「陛下はあなたのこと、お亡くなりになった王子様の代わりのように思っておいでなのでしょうね」

兄王は王太子時代にレイリア王太子妃との間に双子の王女を儲けていた。レイリア妃はその翌年再び身籠ったが、不幸なことに死産となり、折悪しくそれが男児であったという。不幸は重なるものでその数日後、レイリア妃も亡くなった。兄王の嘆きは並々ならぬものであったと伝え聞く。

「陛下はまだレイリア様をお忘れになれないでいらっしゃるのだわ。あれからもう十二年が経ちますけれど、決して後添いを娶ろうとはされませんもの」

「ですが姉上、それは良いことはありませんか。今のままですとキイル殿下より上位の王位継承権者が現れることはないでしょう。そうなれば殿下は正式に立太子され、次期ゴースティン王となられるのですから」

キイルが誕生してからほどなく、父であるゴースティン王が崩御した。第一王子のアルト・ヴィジェが二十三で王位を継いだことにより、キイルは生後わずか二か月で王位継承権第一位の王子となった。しかしその地位は、兄王に王子が生まれれば失われるという不安定なものでもあった。実際その可能性が高く、周囲の者もキイルに王位継承者としての期待をかけてなどいなかった。

しかしその状況は、再婚を頑なに拒む兄王の態度により大きく変わりつつある。周囲の思惑は年々肥大しており、キイルに重く圧しかかりつつあったが、それはキャサリーゼも同様であった。

たとえ後添いであっても、王の妃ともなれば己の子を王位につけたがるものであるが、静かな生活を望むキャサリーゼには、幼い息

子を権力闘争に巻き込むことをよしとしなかった。そもそも、ハーシェリオン家がギルベイド家に対抗するかのように先王の妃を輩出させたことを、キャサリーゼ自身が快く思っていないのだ。

「母上、今後私は自由のきかぬ身になるかもしれませんが。だから今のうちに羽を伸ばしておきたいと考えておりますゆえ、早くエクシユール宮へ戻れなどとおっしゃらないでください」

母の心中を察しているキイルが冗談めかして告げると、キャサリーゼはその想いを受け取るように提案する。

「それなら明日にでも少し遠出をしてきたらいかが？ オファンも美しいけれど、アルティスには叶わないわ」

「母上はいつもそうおっしゃいますね」

「あなたはセヴァンスに来てこの屋敷にばかりいるからわからないのよ」

「私がこの屋敷にばかりいるのは、ここが一番自由になれる場所だからですよ。私が外を出歩くととなると、近衛の者たちがぞろぞろ付いて来るでしょう？ それが煩わしいのです」

キイルが苦々しく告げると、キャサリーゼは複雑そうに微笑を返した。

母が王妃として過ごした二年間がどのようなものだったのか、キイルには知る由もない。だがキイル自身、宮廷は息苦しいものだと感じることもある。宮廷のしきたりというものは、いちいち回りとどく、少々のことにも二重三重の手間がかかるため、よほど自分の手で事を進めたいと思うことがしばしばである。生まれてこの方ず

つと王宮で暮らしているキイルでさえそう思うのだから、他家から嫁いできた母はなおのことであつただろう。

キイルはちらりと窓のほうを見やる。

ほんの二日前、キイルは自室の部屋から外を眺めていた。それは入れ替わり立ち替わりやつてくる教師たちの目を盗んでのことだつた。

遠出は煩わしいと口にしつつも、母が美しいと頻りに口にする場所に興味がないわけではなく、温かな光あふれる外の世界にほのかな憧れを抱いていた。

追憶 湖畔の少女 (2)

翌日、キイルは朝の十時過ぎにハーシェリオンの屋敷を発ち、アルティスへと向かった。予定ではキャサリーゼも伴っていくはずであったが、昨晚から頭痛が続き、気分がすぐれないということで、キイルはミシエルと二人でハーシェリオン家の馬車へと乗り込んだ。

王都からの旅と同様に、キイルの乗る四頭立て馬車は近衛騎兵たちの行列に取り囲まれている。アルティス訪問はキイルにとってお忍びの遊山であり、彼の素姓を隠す必要があるため、近衛騎兵は従僕に扮している。ただし、大型の馬車に十を超える馬が追走している様は、遠目に見ても大仰な一行であった。

そんな周囲の状況に目を馳せたキイルは、万事がこの調子だなと、そつと苦笑した。

麗らかな春の日差し中をゆるやかに馬車が駆けていくと、目の前には幅の広い石橋が現れた。その川を隔てた先にあるのがアルティスで、周囲の風景は石橋を渡ってから大きく変わっていった。

王都は青銅色の屋根に象牙色の外壁を持つ屋敷が主で、それらが見事なまでに整然と並んでいる。多くの貴族たちが保養に訪れるオファンは自然の多い王都といった風であるが、アルティスには自然が多いことに加えて、家の建て方がまるで異なっていた。岩肌が剥き出しになった崖には、煉瓦色レンガの屋根をした家々が密集して立ち並んでいる。オファンとそれほど距離が離れていないにもかかわらず、アルティスはどこか周囲と隔絶された空気を持つ町で、比較できるほど多くの風景を知らないキイルでさえ異質と感ずるほどであった。

「まるで異国にきたようでございますよう?」

ずっと窓の外を見つめているキイルに、ミシエルは可笑しそうに声をかけた。ミシエルは幾度もアルティスを訪れているため、この地の歴史や文化に詳しく、アルティスの中心へ到着するまでの間に様々なことをキイルに聞かせた。

ゴースティン王国を含め、このアレシス大陸のほぼ全域においてに信仰されているのは、ルドリア神を唯一最高神に据えるルドリア教である。かつて、ルドリア教の司祭たちが王よりも強い権勢を誇った時代があり、その司祭の中でもっとも強い権威を振るったドートリツシュ一族の当主は、次第に>教皇<と呼ばれるようになっていった。

教皇による王権への介入は何百年もの間続いたが、三百年ほど前にゴースティン王と教皇の対立が起こり、内乱の末、ルドリア教会において教皇位が廃止された。王権のもとに下ったドートリツシュ家は、ゴースティン王国内の一貴族となったが、教皇の流れを汲む直系子孫たちは>教皇一族<と呼ばれ、世俗権力も教会権力も有しないものの、依然として強い畏敬を集める存在であり続けている。

「ああ、そろそろ見えてまいりましたよ」

ミシエルが示す方向には、高い崖の上にそびえ立つ城があった。遠目では判然としないが、白亜の城はなにやら教会堂のような荘厳さをまとっている。

このセヴァンスの地は、かつて教皇領の一つであった。三百年前に一旦王領となった後、ドートリツシュ家の当主へと下賜され、教皇一族がひっそりと暮らすようになった。一族が暮らす城は、かつて教皇の夏の離宮と呼ばれたアルティス城である。城主はエルディスという三十そこその若い男で、同族内から妻を娶り、一女を儲

けたが、既に奥方は亡くなっているという。

城のほうへ馬車が進むにつれて、周囲の風景がまた少し変わってくる。見晴らしの良い丘陵地には、見たこともない白い花が一面に咲き乱れていた。

「あの花は？」

「シューゼランでございます。春と秋、一年に二度咲くという珍しいという花です……」

ミシエルの説明を聞きながらキイルは少しだけ窓から身を乗り出す。シューゼランの敷き詰められた丘の向こうには、遠くの山の麓まで広がる湖があった。

「では、あの湖は？」

「エルド湖でございます」

湖面に光が乱反射し、きらきらと輝いている。アルティスには叶わない、と告げる母の言葉を思い出し、キイルの口元に笑みが浮かんだ。

「止めてくれ。少し一人で歩きたい」

馬車が止まり、恭しく扉が開けられる。馬車を降り立つとともに、あまり遠くへ行かないようにとミシエルが念を押す。そんな呼びかけを受け流しつつ、キイルは草地の上を歩き、湖のほうへと進んでいった。

歩くたびに伸びた草が脚に絡みつく。エクシール宮の庭園は芝

が均一の長さに刈り取られ、歩行を妨げなどしない。植木も庭師の手によって幾何学模様に刈られている。計算し尽くされたその配置は、バルコニーから見渡せば圧巻の風景であるが、どこか無機質にも感じられる。母の住む別邸にしても、一見、自然のままが残されているようだが、あえて自然の風景を人工的に作り出したものである。今、目の前に広がる手つかずの自然は、何人も踏み荒らすことが許されないような荘厳さが感じられた。

前方には大きな榎の木があり、それより先はゆるやかな下り斜面になって、シューゼランの咲く湖畔が広がっている。さらに歩みを進めたキイルが榎の大木を回り込むと、湖に向かって立っている少女の後ろ姿があった。

「ベルチエ、あなたにしては早かったのね」

そう口にしながら少女が振り返った。

いきなり声をかけられキイルは面食らったが、それ以上に少女は驚いていて、小さな手の中から白い花が零れ落ちていった。

少女は紅潮した頬を両手で押さえて、必死に言葉を紡ぐ。

「ご、ごめんなさい。私^{わたくし}ったら、人違いをしてしまって……！」

キイルと年のころは同じぐらいだろうか。

淡い青地に細かなフリルのあしらわれたドレスを身にまとった少女は、腰のあたりまで届く長い亜麻色の髪をそよ風になびかせている。

「こんなところで、なにをしている？」

「久しぶりに外を出歩いてみたかっただけなの。……でも、早く戻

らないといけないのだわ」

キイルは崖の上の城を指差し、少女に問う。

「お前の帰る場所とは、あの城か？」

「ええっ！」

先ほどから少女は驚いた顔ばかりをキイルに見せている。白い肌が紅く染まり、本気で動揺しているようだった。

「ど、どうしておわかりになったの？」

どうしてもなにも、身につけているものを見れば一目瞭然だった。たとえ粗末な衣装であつたとしても、身のこなしや言葉遣いで村娘でないことはわかる。

（なにより、この顔……）

ドートリツシュー一族は、王都エクシールに住む本家をはじめ、国内のいくつかの領地に分家が暮らしているが、そのいずれの者たちもよく似た容貌をしているという。それは血族間による婚姻が多いため、一千年以上続く家系にもかかわらず、それほど血族が拡散していない。

本家の人間は宮廷に出入りしているため目にする機会も多いが、教皇の一族はアルティス城から出ることは滅多になく、外界とは切り離された存在と認識されている。先ほどミシエルからその話を聞いていたため、このようなところであの一族の者と見えること^{まみ}になるなど、キイルは思っていなかった。

「ねえ」

呼びかけられ、キイルがはっと顔を上げると、少女のにこやかな微笑があった。エルド湖と同じ色彩の翡翠の瞳と、それを縁取るけぶるような睫毛が美しい。

「あなた、どこからいらしたの？」

「……オファンだ」

「本当はエクシールからでしょう？ オファンにいられている貴族様のご子息なのね」

当たりかしら、と言って、少女はくすくすと笑う。

「私の母がオファンで暮らしている。叔父は母にエクシールに戻ってもらいたいようだが、母にはその気がないらしい」

「あなたは、お母様に戻っていただきたくないの？」

「苦労されることが目に見えているのでな」

キイルが苦笑まじりに呟くと、少女は小さく相槌を打ち、エルド湖へと視線を投げた。

微妙な沈黙に居心地の悪さを感じ、キイルは少女の横顔を見やる。

「……あのね、お父様がもうすぐお亡くなりになるの」

少女が突然呟いたものは、なにやらおかしい言葉だった。聞き間違っているのかとキイルは耳を疑ったが、少女の暗く沈んだ顔を

見ていると間違いではないようだった。

“お父様”というのはアルティス城主エルティス卿のことだろう。エルティスが病気であるとの話は既に聞き及んでいたが、もうすぐ亡くなるというのはどうということなのか。

「お父様、ずっとご病気でいらしたのだけれど、ここ数日、お父様から感じる魔力の波動がとても弱まってしまっているの」

少女は腰をかがめ、足元に散らばったシューゼランの花を一輪拾い上げる。

「この花、お父様とお母様の思い出の花なの。小さくてささやかな香りしかないけれど、一番好きな花だってお父様はおっしゃっていたわ」

「あの城の庭に、この花は咲いていないのか？」

「もちろん咲いているわ。でも、ここに咲いているものでなくてはダメなの」

細い弧を描いた眉を寄せ、少女は悲しげに笑む。

「この湖からはね、強い魔力の波動を感じるの。安らかで、穏やかな気持ちにさせてくれるような、そんな波動……。お父様、今とても苦しまれているの。だからこの湖畔に咲いているシューゼランをお届けしたいと思ってここに來たの」

キイルは少女にかけ言葉が見つからず、視線を足元に落とした。少女の手から零れた白い花。病床の父を想い、その手ずから摘み取ったものだったのだ。

「……手伝おう」

キイルは瞬きを繰り返す少女をまっすぐに見つめる。

「私が驚かせてしまったせいで、せっかく摘んだものを駄目にしてしまったのだろうか？」

そう告げるとともに、キイルは少し腰をかがめ、足元に咲く花を摘み始めた。五本ほど摘み取ったとき、それを鼻へと近づける。

王宮に咲く花は大輪で、色が濃く、香りも強いものが多い。丹念に生育された花の園は美しく、あたりに芳香を漂わせているが、どこが大仰でもある。

この花の涼やかな甘い香りは、ささやかでありながら深く胸に染みわたるような心地がした。

キイルの左手にはこれ以上持ち切れないほどの花束ができていた。片手いっぱいシューゼランを、はにかむ少女に手渡そうとしたとき、背後から高い声が聞こえた。

「姫様！」

少女よりもやや年少に見える少年が、息を切らせて走ってくるのが見えた。あまりに急いでいるせいか、草に足を取られ、幾度か転びそうになっている。少年が走ってきた方向に視線を馳せると、そこには赤茶色の二頭立て馬車が止まっていた。遠目にも豪華な馬車で、あの城から出されたものとわかる。

「あれがベルチェか？　ずいぶんと小さな下僕がいるのだな」

キイルがからかうように告げると、少女は走るベルチエを微笑ま
しげに見つめながら呟く。

「あの子、私の弟なのよ」

そう言われて注視してみれば、顔立ちも、髪や瞳の色も少女と同
じものだった。しかし従僕のような簡素な衣装を身につけており、
姉であるはずのこの少女を“姫様”と呼んだ。

少女のもとへ辿り着いたベルチエは、荒い息を呑み込みながら主
人をたしなめる。

「姫様、お一人で出歩かれないください。皆、どれほど心配いた
しましたことか！」

「ごめんなさいね、ベルチエ。すぐに戻るつもりだったのよ」

「それにしても、どうやってこんなところまで来られたのですか！」

「いつも城に出入りしている馬車があるでしょう？　ちょうど街に
戻っていくところだったから、それに乗せてもらったのよ」

少女は謝罪しながらベルチエの乱れた髪や服を直してやっていた。
弟を労わる少女の素振りには、姪の王女たちの姿をキイルに思い起こ
させた。

ベルチエに急かされ、馬車へ向かおうとしていた少女が振り返り、
キイルに向かって小さく手を振る。零れんばかりの小さな白い花弁
が、少女の手の中でひそやかに揺れていた。

「これ、ありがとう」

キイルはそれに応えようとしたが、少女は微笑みを残したまま優雅に身を翻した。馬車へと乗り込んでいくその姿を、じっと眺めていた。

十

「アズノエル様とおっしゃるのですよ」

馬車に戻った途端、ミシエルが満面の笑みで告げた。キイルは思わず眉をひそめたが、ミシエルは気にすることなく少女の素姓を告げる。

「アズノエル」リネージェ・ディラ・ドートリツシュ……。ご城主エルデイス卿のたった一人の姫君でいらっしゃいます」

「弟がいるようだったか？」

「たしかに、あの少年もエルデイス卿の御子でしょうが、母君が平民の出であるとかで、ドートリツシュの姓を与えられていないというところでございます。なんでも、亡き奥方の意向で城に引き取られたとか……。エルデイス卿は御子にドートリツシュの籍をお与えになろうとなさったそうですが、一族の者の強い反対により、使用人として城でお暮らしのようです」

貴族は貴族同士、平民は平民同士でしか婚姻は許されない。また、王族も基本的に王族同士で婚姻を結ぶのが通例であり、父王が国内

の貴族であるギルベイド家とハーシェリオン家から妃を娶ったのは、両家がかつてのゴースティン王家という歴史と権威のある家柄であるからに他ならない。

貴族同士であっても、大貴族による下級貴族への蔑視は並々ならぬものがあり、家格の釣り合わない者同士の婚姻は難しい。貴族の嫡男が身分違いの恋人を囲い、その私生児を引き取る例は稀にあるが、ドートリツシュのような気位の高い一族にそのような醜聞があることは、少々意外なことであった。

キイルが馬車の駆けていった方向に目をやると、城門へと向かっていく赤茶の馬車をわずかに望むことができた。

あの城から見下ろすアルティスの風景は、さぞ素晴らしいことだろう。

馬車に乗り込んだキイルは、近衛騎兵に囲まれながらアルティスを後にした。

追憶　　白い花の約束　　（１）

「そういえば、リリアーナ様のご結婚されるそうよ。キイル、あなたは知っています？」

夕食の席で、キャサリーゼがキイルにそう切り出した。

リリアーナとは兄王の第一王女で、カレニーナという双子の妹がいる。現在、キイルよりも三つ年上の十五歳であるが、容姿も性格も年齢以上に大人びた姫であった。

「たしか、リオールの王太子とでしたか？　話は聞いていましたが、あれは決定事項だったのですか？」

「陛下からいただいたお手紙にそう書かれていたの。けれど、あまり陛下は乗り気ではないご様子だわ。隣国とはいえ、よほどのことがない限りお会いになることもできませんものね」

一度他国に嫁いだ王女が祖国の地を踏むなどまずありえない。だからこそ兄王は、本来であれば外交の駒である二人の娘たちを他国に嫁がせることに難色を示していた。

ゴースティンはアレイシス大陸においてケーニヒスと肩を並べる大国であり、その王女が嫁ぎ先で粗略に扱われるなどまず考えられないが、軋轢の生じている国に嫁ぐとなればそうもいかない。

その点、リオールはゴースティンにとって属国に近い友好国である。服飾や食事等の文化はゴースティンの影響を色濃く受けており、宮廷における公用語もゴースティン語を用いている。リオールから

嫁いだレイリア妃は宮廷作法の細かさにこそ苦勞させられたものの、ゴースティン王家に温かく迎え入れられたという。若くして亡くなったが、夫からは熱烈に愛されて、幸せな結婚であつたことだろう。

「レオンハルト王子はレイリア妃の甥で、リリアーナの従兄ですから、理想の結婚相手だと思いますよ。隣国で大国とはいえ、ケーニヒスの王子に嫁がせるよりはよいと兄上も考えられてのことでは？」

「そうね……。陛下は王女様方のことは本当に可愛がつておいでだし、辛い思いなど決してさせたくはないとお考えなのでしょうね。ただ、リリアーナ様が嫁がれたらカレニーナ様はお寂しくなられるわね。とても仲の良い姉妹でらっしゃるもの」

双子の王女たちは快活で朗らかで、ドレスや髪飾り、靴に至るまでお揃いのものを身につけ、時折入れ替わつては廷臣たちをからかっている。そんな年上の姪たちはキイルにとって姉のようであり、姪たちとともに過ごすにつれて兄のことを父のように思うようにもなっていた。ただし、周囲の者の話によれば、父と兄は正反対の氣質をしていたらしいが。

「ところでキイル、オフアンはどうでしたの？」

キイルはスープを掬っていた手を止め、微笑をキャサリーゼに向ける。

「母上のおっしゃる通り、美しいところでしたよ。たしかにオフアンとは雰囲気がつたく違いますね」

「以前ね、アルティス城に伺つたことがあるのよ。エルデイス卿と奥方のアディリート様のお招きで」

「奥方は五年ほど前に亡くなられたのでは？」

「ええ。だからそれよりもっと前、私がセヴァンス郡に移ってきてすぐのことよ。ご夫妻は静かなお暮らしでしたけど、お幸せそうでしたわ。あなたと同じ年の姫がいらしてね、とても可愛らしかったわ」

それが、今日エルド湖畔で会ったあの少女だ。

いきなりこのような話をするなど、ミシエルがキャサリーゼになにか話したのではないだろうか、キイルは怪しんだ。

キャサリーゼは不自然に黙り込んだキイルを気にかけることなく、話を続ける。

「オトウール王家とドートリツシュ家の間には過去の確執があるでしょう？　ですからお会いするまで教皇一族の方々には底の知れない恐ろしさを感じていたのだけれど、ご夫妻はとても優しく、とても感激しましたわ」

「たしか、今から八代前のゴースティン王が時の教皇エルジェ三世を弑したために、“教皇の呪い”がゴースティンに降りかかったのでしたか？」

どこか愉快気に告げるキイルに、キャサリーゼは口に運ぼうとしたグラスを置き、咎めるように眉を寄せる。

「呪いだなんて、あなたまでそんなこと……」

「もちろん、私はそのようなもの信じておりません。ですが、叔父上はあの偶然を少々本気にしておられるようですね」

オトウール朝第八代国王の時代、長きにわたり王権に介入し続けた教会権力を排除するため、ゴースティン軍は教皇宮を包囲した。国軍と教皇軍は膠着状態が続いていたが、王の放った刺客がエルジエ三世の首を上げ、ゴースティン王が教皇領であつたエクシユールの支配権を手にするに至つたのである。

その内乱の直後、各地で信徒らの暴動が発生し、国中が乱れていたところ、天罰のように起こつた飢饉と疫病の蔓延により何万人もの死者を出し、暴動制圧のために軍を率いていた王太子までもが流行り病に倒れた……。

これらの畳みかけるように降りかかった災いは、密かに“教皇の呪い”と呼ばれている。

“教皇の呪い”を恐れたオトウール王家の者は、ルドリア教会を排斥するのではなく国教として定め、王権のもとで手厚く保護するようになった。王家に関わる祭事が執り行われるガルバンヌ大聖堂は、三百年前より王家が教会に多額の寄進を行い、実に百年の歳月をかけて建築されたものである。

ドートリツシュ一族に関しては、王権の支配下に置きつつも、様々な特権を付与してきた。たとえば教会の権力者として地位の保護しつつ、本家の当主に“セヴァンス侯”を叙爵し、俗人としての権力をも授けた。

現在、ドートリツシュ家の者たちにはかつて王家を意のままに操つていたところのような権柄さはなく、王家に対しても従順であるが、ルドリア教信徒らにとって彼らは依然として強い畏敬の対象である。特にハーシエリオン家は“教皇の呪い”によって亡くなった王太子の妹が降嫁しているため、ドートリツシュ家に対して恐々とした思いを抱いている。一族には非常に信心深い人間が多く、聖職の道を志す者も後を絶たない。

「胸の内はわかりませんが、表向き、王家と教会は上手くやっているように思います。王家とドートリツシュの確執よりも、よほどギルベイドとハーシェリオンの確執のほうが厄介でしょう？」

宮廷における両家の確執に散々苦しめられてきたキャサリーゼは、その話はしたくないとばかりに曖昧にうなずいた。

十

まだ夜が明けぬころ、ふと夢から目覚めたキイルは寝台を抜け出した。先ほどまで見ていた夢は、王宮におけるキイルの日常がつらつらと繰り返されるものであった。決して悪夢ではなかったものの、次々に現れる教師たちや、目の前に積まれた本の山は、彼を酷く疲弊させた。

窓を開けて、バルコニーの手すりに寄りかかる。月は煌々と輝き、夜気は冷たい。手元に時計がないため時間がわからなかったが、夜明けまではまだだいぶあるように思われた。

月明かりの中、人工的に作られた自然の風景を眼下に望む。

お父様がもうすぐお亡くなりになるの。

鈴の鳴るような声とともに、淡い陰の落ちる小さな顔が思い出された。

この湖からはね、強い魔力の波動を感じるの。

魔力の波動。

聞き慣れない言葉ではあったが、キイルにとってあの少女の言葉はまったく受け入れがたいものではなかった。

この大陸には、生まれながら魔道の力を操ることのできる人間が稀に存在する。強い魔力を秘めた人間というのは血統によるものが大きいと考えられているが、国内には強い魔力を有する一族がいくつか存在しており、その筆頭がドートリツシュ家である。

教皇位廃止後、ドートリツシュ家は分家の一つに当主の座が移譲されたが、ゴースティン・ルドリア教会においては依然としてこの一族の強い力を及ぼし続けている。ルドリア教会の司祭は魔道の力を操ることが資格条件とされており、ドートリツシュを始めとした教皇時代に権勢を誇った司祭の子孫たちが教会の多数派となっている。

当然、王宮の祭事や公式礼拝を取りしきる宮廷司祭たちも魔道を操ることができ、キイルは毎日のように司祭たちの操る力を目にしている。ゴースティンの人間は幼いころから魔道の力を身近なものとして受け入れているが、他国においては魔法を扱える人間を見る機会などないのだそうだ。

ミシエルは外務官で、これまでに近隣諸国を何か国も訪問しているため、他国におけるルドリア教会の司祭たちを多く目にしている。ミシエルによれば、他国においては司祭たる資格に魔道を操れることが必要とされているわけでもなく、礼拝において魔道の力が用いられることもないらしい。そのため、ゴースティンに留学や外遊に訪れた他国の貴族たちが、教会堂において司祭の力を目にした際、その驚きは並々ならぬものだという。

おそらく、あの少女も強い魔力を秘めた者なのだろう。かの教皇

エルジェ三世はなにやら強力な魔法を操り、司祭だけでなく王侯をも従わせていたと聞くが、晩年に精神を病み、様々な奇行で教会内を混乱に陥れたことから、狂王と揶揄されることもある。

そんな狂王の血を受け継いでいるあの少女から感じたのは、どこまでも清浄で柔らかな空気だった。思い起こすだけで、風のない湖面のような安らかさに包まれていく心地がした。

その三日後。

アルティス城主エルティス・ゴートイエ・ディラ・ドートリツシユの訃報がキイルの耳に届いた。

追憶 白い花の約束 (2)

オフアンとアルティスの距離はそれほど離れていない。ハーシェリオン別邸からアルティス城までならば、馬車で一時間もかからない。そのため、エルティス卿逝去の報はオフアンにもすぐさま拡散していた。

その報を受けた二日後、キイルはキャサリーゼとともにアルティス城で行われるエルティスの葬儀に参列することになった。数日前と同じ道を馬車で駆けている道中、キイルは教皇一族の権威の凄まじさを目の当たりにすることとなった。

セヴァンスの民の嘆きは、まるでこの世の終わりかと言わんばかりである。民らはアルティス城の方角に向かって跪き、涙を流しながら鎮魂の祈りを捧げていた。

王族が他界しようとも、王都の民は泣き崩れたりなどしないだろうとキイルは思う。というのも、三代前のゴースティン王ルイスⅡヴィジエは、無用の戦を隣国に仕掛けた結果、国家財政と人的・物的資源を疲弊させ、追い打ちをかけるように民に重税を課したため、ガルバンヌ大聖堂への葬列には民衆から罵声が浴びせられたという。それを国王直属の近衛兵たちが制しなかったというのだから、宮廷においても王への不満は積もりに積もっていたということだ。

キイルは父王の死をまったく知らない。はたして、父の葬列はどうであつたのだろうかと考えているうちに、視線の先には崖の上に高くそびえ立つ城が現れた。

先日は遠くから眺め見ることにしか叶わなかったアルティス城へ、

キイルは足を踏み入れた。七百年近く前に教皇の夏の離宮として建てられたこの城は、外観も内部も壮麗な教会のようだったが、若き主を失ったことによる悲愴さが、あふれんばかりの厳かな空気の中に別の色彩を添えていた。

キイルとキャサリーゼは案内されるままに、城内にある礼拝堂へと向かった。重々しい円柱群の身廊を二人は進み、中央よりやや後ろの席に着く。

アルティス城主エルデイスは、教皇の末裔というだけで、教会権力は一切有していない。王太后と先王の王子が一貴族の葬儀になど訪れるべきではないのだが、敬虔なルドリア教徒であるキャサリーゼたつての願いにより、この私的な訪問が決行された。そのため、二人は王族としての身分を隠す必要があった。

葬儀の参列者は、セヴァンスに住まう貴族や豪商たちのほか、国内各地で暮らすドートリツシュ一族の者たちであった。分家の者は遠方に住んでいるが、今日の葬儀に参列しているということは、エルデイスが危篤状態であることが事前に一族の耳に入っていたのだろう。先日ミシエルから聞き及んでいた通り、祭壇の近くにいる十数人の血族たちは、皆一様に亜麻色の髪を持ち、似たような顔立ちをしている。加えて、強い魔力を秘めているせいか、独特の空気をその身にまとっていた。

壮年の司祭が棺の安置された祭壇へと進む。彼はドートリツシュ本家の当主ユリウスで、ルドリア教会の最高位たる主教の地位にもある。ユリウスの後ろに控えている黒衣の司祭は、その嫡子クラウスである。

通常、聖職者に婚姻は認められていない。貞潔の誓いも立てるため、子をなすことも許されない。しかし、ドートリツシュ一族の司祭にはその血統維持のために婚姻の可能が特例として認められてい

る。

ユリウスは一族の当主だけがまとうことの許された紫の天鷲絨ヒヨードのローブをまとい、紫水晶の埋め込まれた聖杖を手に使っていた。

祭壇の前に立ち、祈りの言葉が唱えられると、眩い光が聖杖から放たれる。

王宮の礼拝堂で見えるものと同じ、神聖なる淡い光。神の祝福と信徒らの祈りをつなぐこの光は、決して何人をも傷つけはしない。何年も病床にあったエルデイスの臨終は凄まじい苦しみようであったという。死は、やっと彼に与えられた安息であったことだろう。

アズノエルは祭壇にもっとも近い席に着いている。あの夢げだった少女が、少し俯き加減ながらも毅然と立ち、事の成り行きをじっと見守っていた。今日だけは特別に許されているのか、ベルチェはアズノエルの隣に並び、両手を強く組み合わせて祈りを捧げていた。

身廊に落ちる陽光は虹色を帯びていた。高窓にはドートリツシュの紋章である獅子と薔薇を描いたステンドグラスがはめ込まれている。獅子も薔薇も、王家を凌駕する権力を失くしたこの一族には不釣り合いなものであったが、紋章を通して降り注ぐ光は、聖なる力を有する彼らに相応しい荘厳な輝きを放っていた。

葬儀の後、キャサリーゼはユリウスのもとに向かった。ユリウスは先王とキャサリーゼの結婚式を、そして先王の葬儀を執り行った司祭でもあり、王太后であるキャサリーゼはなにかと積もる話もあるのだろう。

その間、キイルは静まり返った城内をうろついていた。柱廊の端まで進み、城壁の外を見下ろしたとき、ゆるやかな坂道を下っていく喪服の少女が目にとまった。供の者もつけずに出歩くのが日常化

しているのだろうか、キイルが様子をつかがっていると、アズノエルは外に停めてあった簡素な馬車に乗り込んでいった。明らかにこの城の馬車ではなかった。

キイルはアズノエルの後を追いかけようと城を抜け出した。

アズノエルの行き先におおよその見当はついていて、強い魔力の波動が放たれているという、エルド湖だろう。

厩舎で鞍と鐙あぶみのついた馬を一頭借り、城門を飛び出した。エルド湖までは大まかな方向しかわからないが、城から見下ろした先に見えた湖へと己の勘だけを頼りに馬で駆け抜けた。

道なりに進んでいった丘の上から湖畔を望む。そこに黒い人影を見つけ、口元に小さな笑みが浮かんだ。

キイルは馬から降り、後ろ姿へ向かって小走りに駆けていく。その途中、かすかな声音が耳をかすめ、思わず足を止めた。

（歌……？）

水の入ったグラスを弾いたような、透き通った声だった。紡がれる言葉に耳を澄ませてみると、それがゴースティンのものではないことに気づく。おそらく、司祭たちが儀礼の際に使う古代語くであろう。ドートリツシュー族の者たちは屋敷の中では古代語くで会話をするのだと宮廷司祭より聞き及んだことがある。

突然、歌が止んだ。

キイルが息をひそめて様子をうかがっていると、眩い赤い光がアズノエルから放たれ、赤く染まりゆく天上へと一筋の光が駆け昇っていった。

（あれは、炎の魔法　　）

キイルが一步足を進めようとすると、アズノエルが振り返った。

その顔に涙の跡はない。

「意外だったな」

さらに近づき、口の端を上げる。

「てつきり、泣いているのかと思ったが？」

「もう、充分泣いてしまったから……」

か細い声でアズノエルは呟いた。

既にアディリート夫人も亡くなっている。いくら権威ある一族の娘であったとしても、両親の後ろ盾をなくせば苦勞するのは目に見えている。なにより、アルティスという閉ざされた世界の城で、一人で暮らす孤独はいかばかりであろうか。

「これからどうするつもりなんだ？ お前が次代の城主になるのか？」

アズノエルはベールをふわりと揺らすように身を翻す。

「クラウドお兄様がね、エクシユールのお屋敷で一緒に暮さないかって言ってくださっているの」

「お前に兄などいたのか？」

「本当のお兄様ではないの。……叔母様の子供で、私より七つ年上で、とっても優しくて頼りになる方よ」

アズノエルの説明を聞くまでもなく、キイルはクラウドのことを

よく知っていた。

クラウス・リーゲン・ディラ・ドートリツシュ……。ドートリツシュ本家の嫡男で、彼もまた、ルドリア教会の司祭となっている。加えて宮廷司祭でもあるクラウスは、王宮での公式礼拝を取りしきっており、キイルはほぼ毎日のようにその姿を目にしているのだ。

水鳥が音を立てて空へと飛び立っていった。西から広がりゆく赤は、空の青を徐々に橙へと染め上げていく。

「もう戻られたほうがいいわ。一緒に来られている方が心配なさるでしょう？」

アズノエルの気遣わしげな言葉に、キイルはうなずくことができなかった。

少女のやつれた頬に茜が差していく。今にも崩れそうな微笑を向けられると、とてもこのままここを立ち去ることはできなかった。思わずキイルは言い募る。

「また、会えないか……？」

髪を煽る風とともに沈黙が訪れたが、ややあって、アズノエルは小さく首を傾げながら薄らと笑みを浮かべる。

「それじゃあ、次は王都で？」

「あ、そうか。そういうことになるんだな……」

キイルのたどたどしい返答が可笑しかったのか、アズノエルはさらに笑みを深くする。

「ねえ、あなたの名前はなんておっしゃるの？」

キイルは瞬時に顔を強張らせた。言わないわけにはいけないと思いつつも、名を告げることを強くためらっていた。

オトウール王家とドートリツシュ家の何百年にもわたる確執……。アズノエルの直系の先祖であるエルジェ三世を討った子孫がキイルであるのだ。

アズノエルの薄いベールが風に舞い、まっすぐにキイルを見つめる翡翠の瞳が露わになった。

その瞳から目をそらすことができず、キイルはおもむろに口を開く。

「キイル……。キイル」ヴィジェ・ディラ・オトウール……」

アズノエルのさつと顔が曇る。黒いベールが彼女の心を表すように揺れ、翻っては、再び白い肌に影を落とした。

「王子様、だつたのね」

アズノエルが悲しそうに微笑んだために、キイルは思わず彼女と同じような顔を作ってしまったていた。

いずれわかることだった。オトウールの家名を名乗らずとも、キイルという名だけで、それが誰なのかわかる者は多い。その容貌にしても、赤い波状毛や細い鼻梁、厚めの下唇といったオトウール王家の特徴を濃く宿していて、見る者が見れば王家の成員だと一目でわかる。

手を強く握りしめると、人差し指にはめた大きな指輪が食い込み、指間に痛みが走った。その指輪には、王家の紋章である鷲が彫られている。紋章を隠すように、親指で指輪のレリーフをなぞり、深くため息を吐く。

いっそ偽名でも名乗ればよかったのだろうかと思巡していると、

アズノエルがキイルのほうへ歩を進めてきた。

柔らかな微笑に包まれた顔に、さらさらと亜麻糸のような髪がかかる。それは光に透け、きらきらと輝いていた。

「エクシール宮殿に行ったら、王子様にお会いできるのかしら？」

キイルの目が大きく見開き、何度も瞬きを繰り返した。拒絶されなかったことで緊張が解け、硬い表情がゆるゆると綻んでいく。

「ああ、クラウドとともに来ればいい」

陽が落ち始め、白い丘は赤く染まっていく。

キイルはシューゼランの花を一輪摘み取り、アズノエルの前に差し出した。

そつと、白い小さな手が伸ばされる。かすかに触れ合ったその指先に、再会の約束が立てられた。

焦燥 (1)

ゴースティン王国には、奇妙な王室法がある。

それは、現王の嫡子以外が立太子される場合、“現王に長らく王子が誕生しないこと”という条件を満たさなければならぬというものである。この王室法ができたのは百五十年ほど前のことで、その経緯は、既に立太子されていた王弟と庶出の王子との間で王位継承について争いが起きたことによる。

かの王室法に従い、王弟であるキイルは十八になろうとする今日こんにちまで筆頭王位継承権者でありながら正式に立太子されることがなかった。これまで常に不安定な地位に立たされてきたキイルであるが、外戚であるハーシェリオン家の働きかけにより、近々正式に立太子されることが決まっていた。

キイル自身は王座に執着しているわけではなく、むしろ、兄王の外戚であるギルベイド家に対抗しようとするハーシェリオンに心底辟易している面もあった。なにより、身軽な今の生活が阻害されることを不愉快にすら感じていた。

そんなときキイルの耳に飛び込んできたのが、兄王の妾の一人が身籠っているという恒例の醜聞であった。またか、と呆れを通り越して、失笑が漏れるばかりである。

アルト・ヴィジェ王は、自分の御世における妃の座はレイリアだけだと言わんばかりに、この十八年、周囲の者がどれほど勧めようと新たな妃を持つとしなかった。その代わりに数多くの妾を抱え、その妾との間に生まれた私生児は既に三十を超えるとされる。妾の子らはそのすべてが女子であるが、仮に男子であったとしても、

諸外国の王室と同様にゴースティン王家もまた庶子に王位継承権はなく、王の妾遊びがキイルの地位に影響を及ぼすことはない。

それでもキイルは兄王の妾遊びの惨状に、軽蔑するどころか怒りすら抱くようにもなっていた。優秀な閣僚たちが国政を支えているため、王が直接執政せずともさほど問題は生じない。しかし、妃との間に子をなすという王にしかできない責務まで放り投げられては堪らない。

レイリア妃のために貞節を誓うならば、頑なに妃を娶らない理由にも理解を示せたが、これでは亡き妃への裏切りもいいところだろう。それほど潔癖な質ではないキイルであっても、兄王の放蕩ぶりに苛立ちを募らせていく日々であった。

「エイルバードのいない人生だなんて、私、砂糖わたくしの入っていない砂糖菓子のようなものだと思うの」

手紙を読んでいたカレニーナがいきなりそう口にした。彼女の手にあるのは、ドレスの仕立ての合間に届けられた婚約者からの恋文である。

「聞いてらっしゃるの、キイル」

「ちゃんと聞いている。砂糖の入っていない砂糖菓子なのだろう？」

キイルがきちんとそのままを復唱すると、カレニーナは満足したように純白の便箋の上に口づけを落とした。キイルはそんなカレニーナの姿を苦笑まじりに見つめ、ため息を呑み込んだ。

姪のカレニーナが結婚することになった。相手は、グレンヴィル伯爵家の若き当主エイルバード・リオンである。

カレニーナは二十一となる年まで婚約もしておらず、王は娘に結婚させるつもりがないのかと多くの者が思っていたが、王はカレニーナの恋愛結婚をあつさりと認めた。リリアーナ王女が隣国のリオールに嫁いで五年余り経つが、王はいまだに半月に一度の割合でリリアーナ宛ての私書を送っている。リオール宮廷においてゴーステイン王の親馬鹿ぶりが嘲弄の的になっているのではないかと懸念されるほどである。

グレンヴィル家は王家に忠実で、大臣や高官、上級将校らを多数輩出している家柄である。外国の王妃となったリリアーナとは違い、今後もカレニーナは宮廷を出入りし、王と会う機会も多いことだろう。手元に置いておきたいという思いから王がエイルバードとの結婚を認めたとしたなら、それほど納得のいく理由もなかった。

年上の姪を姉のように慕っていたキイルにとって、カレニーナの幸せは喜ばしいことであつたが、一つ気がかりなことがある。

アズノエルはカレニーナの友人として宮廷に招かれ、カレニーナの開くサロンに出向いたり、小さな音楽祭に参加していた。アズノエルの奏でるハープや、透き通った声で唄い上げるアリアに、宮廷人たちは感嘆を漏らしたものだつた。

次第に、アズノエルは宮廷に顔を出す機会が増えていったが、その時間の半分ほどは、表向きカレニーナと過ごしていることになっている。つまり、キイルはカレニーナにアズノエルとの逢瀬の手引きを頼んでいたのだ。

しかし今後はカレニーナを口実に会うことが叶わなくなる。そもそも、昨今キイルが引き受けねばならない政務の数が膨大になっており、自由な時間を取ること自体、難しくもなっていた。

扉が静かに開かれる。

入室してきたアズノエルは薄紅色のタフタ生地ドレスをまとい、長い髪は高く結われ、ゆるやかに巻かれていた。

カレニーナは机上に広げられたいくつもの絹織物に手に取りながら、アズノエルに向けて顔を綻ばせる。

「アズノエル、あなたはどれがいいと思って？」

「カレニーナ様にはそちらの赤いものがお似合いですわ」

「でも、花嫁といったら白でしょう？」

「婚礼の後の祝賀パーティーでのドレスでございましょう？ お式のときだけ白いものをお召しになられればよろしいのですわ」

「それもそうね。ねえ見て、このニードルレースはとても美しいでしょう？ この生地に合わせてるのよ」

肘掛け椅子に腰かけていたキイルは、そんな二人の微笑ましいやり取りを、頬杖をついて見つめていた。

普段のカレニーナは朗らかではあるが思慮深く、むやみにはしゃぐ質ではないのだが、式が近いせいか、かつてないほどに浮かれている。そして我儘にもなっている。新たに誂えようとしているドレスにしても、祝賀パーティーで着るもののうちの一つが気に入らないといきなり言い始め、急遽別のものを仕立てることになったのだ。小鳥のさえずりのような喧騒の中、キイルの視線は、自然とアズノエル一人に向かっていく……。

先日、キイルは王太后のご機嫌伺いのため、数か月ぶりにセヴァンス郡オファンを訪れた。これはもう十年以上にわたり続いている恒例行事で、年々勝手のきかなくなるキイルにとって唯一許されている自由な時間であった。そして、先日のセヴァンス訪問にはまた別の目的があった。

オファンで一夜を明かしたキイルは、ハーシェリオン家の者を言いくるめ、数人の従僕とともにアルティスへと発った。アズノエルは頻繁に王都とセヴァンスを行き来しているが、ちょうど彼女が所用によりアルティス城に滞在していたためである。

『アルティスには、昔から花嫁にこの花を贈る風習があるそうだな』

木陰に腰を下ろしたキイルは、ふと思い出したように呟いた。

城の中庭にはシューゼランが一面に植えられているが、夏はこの花の咲く季節ではないので、青々とした草が茂っているだけである。

『幼いころ、私はなにも知らずにお前にシューゼランを贈ってしまった……。だが、もうすぐ花が咲いたら、私は改めてこの花をお前に贈りたい』

王都北のセヴァンス……。お忍びの貴族たちが集うこの地で二人が出会ったのは、今から六年近く前。彼らが十二になるやならずのころだった。

二人の親交は王都に戻ってからも続き、キイルがアズノエルとの未来を考えるようになるのに数年とかからなかった。もしかしたら、エルド湖畔で摘んだシューゼランを手渡したあとき、既にそう考えていたのかもしれないとキイルは思う。

陽は落ち始め、ちょうどあの日と同じようにあたりを赤い光が広がっていた。

遠くの空を眺めていたキイルが視線を斜めにやると、アズノエルの穏やかな笑みがそこにあった。そのまま口づけを落とそうすると、小さな赤い唇がゆったりと動く。

『私は、殿下のお妃にはなれませんわ』

アズノエルの言葉を耳にしたとき、キイルの喉からは呆けたような声が漏れた。彼女の言葉を信じるのができなかった。これまで愛しているとも伴侶にしたいとも殊更に口に出したことはなかったが、自分たちの気持ちは同じであると疑ったことはなかった。

『お前は、私の気持ちがわかっていているものと思っていたが？』

『ええ。ですから、いつかはお別れせねばならないと思っておりました』

『ふざけるな』

キイルが鋭利な声を放つても、アズノエルは穏やかな表情を崩さない。

『なぜだ？』

『私は、ドートリツシュの娘ですから』

『王家に匹敵するような権威のある家の娘であっても、王族の妃に相応しくないと？』

かつて、ゴースティン王族と臣下の貴族との婚姻は貴賤結婚として認められない時期があった。その当時であっても、ハーシェリオ

ンやギルベイドのような君主の家系や、実質的に臣下とは言いがたいドートリツシュ家は、その例外とされていた。

今ではそのような決まりは廃止されており、時代が下ることに王子が国内の貴族の娘を娶ることも容易となり、王女の降嫁先の選定もかなり柔軟になっていた。

だからこそキイルは、アズノエルとの結婚に障害があるなどと考えたこともなかったのだ。

『もし私が殿下のお妃に相応しい者ならば、周囲の者が私を妃候補に挙げていらつしやるはず……。ですが、そのようなことは決してありえないことではないでしょうか？ 私などを妃になさっても、殿下にとって有益どころか不利益にしかならないではありませんか』

アズノエルの声は重々しく、キイルの反論を制するような空気を孕んでいたが、彼女の言葉に強い反発を抱くのは止められなかった。己にとって最愛の者を娶ることのなにが不利益であるというのだろうか。

キイルは思わずアズノエルを睨みつけていたが、アズノエルはその強い視線を受け流すように柔い笑みを零す。

『今、殿下にはいくつもの縁談がございましょう？ その方々があなたに相応しい方です』

『では、お前の相手として許されるのは誰だというのだ？ 同じ一族の者か？』

『たしかに、そうすることを望んでいる者もおります。ですが、私は誰とも結婚をするつもりはございませんから』

キイルを絶句させるようなことを言っておきながら、アズノエル

は笑みを絶やさない。澄んだ声で思い出を紡ぐ。

『私、初めて殿下にお会いしたときのこと、よく思い出しますの。そしてエクシール宮殿でお会いしたときのこと……』

王都に移り住んだアズノエルは、しばしばクラウドとともにエクシール宮へと出向いてくるようになった。ある日、キイルが礼拝堂の前を通りかかった際、クラウドの傍らに彼女がいた。

クラウドを介して紹介された少女は、キイルに向けて、初めてお目にかかります、と告げた。アズノエルの悪戯っぽい目が愛らしくて、思わず顔が綻んだ。

あのときのことはキイルも忘れてなどいない。

『初めてお会いしたときからずっと、私は殿下のことをお慕い申しとおりました。ですが、結ばれることのない相手だとずっと言い聞かせてきたのです。心が期待してしまわないように、いつかあなたを諦められるようにと』

キイルはアズノエルの肩を抱いて強く引き寄せた。それ以上、痛々しい拒絶の言葉を聞きたくなかった……。

カレニーナと談笑していたアズノエルは、キイルの視線に気づいたのか、そつと目を伏せた。

机上に整然と並べられた宝飾品が、午後の陽光によりさらなる輝きを放っている。カレニーナはその一つ一つを手に取り、鏡の前で耳や首元に当てては、アズノエルの意見を聞いていた。

キイルはおもむろに立ち上がり、はしゃぐ二人のほうへと歩みを

進める。このままアズノエルをどこかへ連れ出し、曖昧な言葉の真意を聞き出したかった。

これまでキイルはアズノエルに狂おしいほどの恋情を覚えたことはない。心を共有し、共に在ることができればそれでよかったのだ。それが叶わなくなると思ったことを境に、彼女への執着は一気に増したように思えた。

無然としたまま近づくキイルに、アズノエルの驚いたように目を見開いたが、その視線もすぐにそらされる。かすかに苛立ちを覚えたキイルがアズノエルの腕を掴もうとしたまさにそのとき、再び部屋扉が開かれた。

「楽しそうだな、カレニーナ。廊下にまでお前の声が響いておったぞ」

「まあ、お父様ったら」

艶然とした笑みを湛えたアルト・ヴィジェ王がカレニーナに歩み寄った。その後方には、純白の仕着せの王直属の侍従らが控えている。

兄王は、金糸の刺繍がふんだんに施された煌びやかな長上着と、それに揃いの中衣を身につけ、長身をさらに際立たせるため、踵の高い赤い靴を履いている。オトウール王家の象徴である波打つ赤い髪は、背のあたりまで長く伸ばされ、深苔色のリボンで結わえられていた。

王とはいえ、四十ともなれば落ち着いた装いをするものだが、兄王には老いによる衰えがまったく見られず、艶めいた色香をまとう壮年の男には、軽薄なほどの華やかな意匠がよく似合った。

王とカレニーナは、アズノエルを巻き込んで談笑を始める。すぐ

近くにいるキイルは三人の話に加わらず、募る苛立ちを噛みしめていた。そのとき、まだ開かれたままの扉から、キイルの秘書官であるロベルト・ネイゲルが入室してきた。

ロベルトは王に一礼した後、恭しくキイルの前で頭を下げる。

「キイル殿下、デデュー公が先日の閣議報告をなさりたいとのことでございます。どうぞ、アイオーン離宮へお戻りを……」

キイルは思わず顔をしかめた。

ミシエルには、カレニーナのもとを訪れる際には最低でも二時間は声をかけるなど厳命していたのだ。だが、先日キイルがアルティスにお忍びで訪れていたために、処理せねばならない政務が平時よりも滞っているのは事実である。

なにより、この部屋にはカレニーナだけではなく、兄王と王の侍従がひしめいているため、アズノエルと二人きりの時間など作りようもない。最近はいつもこうなのだ。アズノエルとの静かな逢瀬を望もうにも、キイルの周囲は騒がしくなるばかりである。

鬱積を抱えながら、キイルはカレニーナの私室を後にした。

焦燥（2）

キイルが王都を離れていた間、定例の軍議が開かれていた。その議事録といくつかの報告書をロベルトより手渡されたキイルは、急ぎ目を通していく。

「また、シベリーの暴動が発生したのだな……」

キイルは忌々しいとばかりに報告書を机上に投げ置いた。

シベリーというのはゴースティン王国の西に帯状に広がる国家で、大国ケーニヒスの属国でもある。ケーニヒスはシベリーを対ゴースティン国境防衛軍として組織化しているため、ゴースティンとシベリーの間では争いが絶えない。ケーニヒスより精度の高い小銃や砲が出回るようになってからは年々やっかいな存在となっている。

キイルは苛立ちまじりに告げる。

「いつそ、奴らを潰すというの手か？」

「ですが殿下、それではケーニヒスと戦争になりかねません」

「わかっている」

国境守備を拡大すべきなのだろう。今しばらくはそれで手を打つしかない。

手っ取り早いのはシベリーの宗主国であるケーニヒスと同盟を結ぶことであるが、六十年前にゴースティンとケーニヒス間で起こった戦争以来、両国の関係は冷え切っており、同盟を望むことは難しい。ちょうどカレニーナと年の釣り合う王子がケーニヒスにはいるが、兄王はケーニヒスの王族になど決してカレニーナを嫁がせはし

ない。兄王は国益よりも私欲を優先する人間なのである。キイルとしても、あれほど幸せそうにしているカレニーナを政治の駒として使うことには抵抗があった。

ケーニヒスとの不和の根源にあるのは、不要の戦を仕掛けた三代前のルイスⅡヴィジエ王である。キイルは己の先祖ながらルイス王に恨み事を言つてやりたい気分であつた。葬列に罵声を浴びせた民衆の気持ちもよくわかるというものだ。

なにやら視線を感じてキイルが顔を上げると、そこには心底嬉しそうにキイルを見つめるロベルトの顔があつた。

「……どうしたのだ？」

「いよいよキイル殿下が王太子となられるのでございますね。あのような王室法のために殿下がこれまで肩身の狭い思いをされていたのかと思うと、まったくもって腹立たしいでございます」

キイルは曖昧な相槌を打った。

ハーシェリオン一門の者が、キイルを王座につけることをどれほど強く望んできたか、キイルは知らないわけではない。それを煩わしく思うこともあつたが、政務に関わるようになるにつれて、それが自分に与えられた当然の義務であると受け入れるようになっていた。

私情で義務を投げ出すなど恥ずべきことと思ひながらも、割り切れない想いが今の彼にはある。

「ロベルト。もし私が王になどなりたくないと言え、お前はどっする？」

薄茶の瞳を瞬かせたロベルトは、声を立てて笑い始めた。

「それは、一体なんの冗談でございますか？」

まったくもって冗談にしか聞こえないことだろう。

ロベルトはキイルが十歳のときに宛がわれた三つ年上の学友である。彼は王立学院の神童として名を馳せており、大学教授らの推薦により、大貴族の子弟たちとともに宮廷に召された。それほど良い家柄ではないものの、優れた知性と深い忠誠心を有しており、キイルにとってはもっとも信頼のおける臣下であり友人でもあった。

キイルはあえてロベルトに問う。

「ならば、私がただの王弟であれば、お前が私に仕える価値はないということか？」

「決してそのような……。私はただ殿下ほどゴースティンの王に相応しい方はいらっしゃらないと――！」

「もうよい、少しからかったただけだ」

長年の友人であるロベルトであっても、キイルの真意を図ることはできないのだ。すべてを話せば、この生真面目な男は呆れ返るに違いない。

キイルが苦笑を漏らすと、ロベルトは怪訝に眉をひそめる。

「デデュー公は、殿下が正式にアルト・ヴィジェ陛下の後継となられるよう、準備を進められておいでなのでございましょう？　なにかご不満がおりなのですか？」

「いや、それが不満というわけではなく……」

そのとき、扉の外からキイルを離宮に呼び戻した男の声が届いた。キイルが慄然としたまま入室許可を与えると、ミシエルは柔和な笑みを湛えたまま執務机の前まで歩み寄った。それと同時に口ベルトが一礼をし、執務室を退室していった。

ミシエルは執務机の上に散らばった報告書や議事録にちらと目を落とし、キイルへにこやかに笑いかける。

「お待たせいたしました。軍事の話はそれまでにしていただいて、本題に入らせていただきます」

「また、あの話が。次から次へと、よくも飽きぬことだ」

キイルはミシエルに毒づきながらも、ため息を押し殺した。

ミシエルが机上に並べられていく資料は政務に関わるものではない。目をそむけたくなるような内容の請願書の束のほうがマシだと思える代物である。もっとも、じきにキイルへ与えられる地位を考慮すれば、まったく政務と無関係とすることができない。

異質な王室法はここでも影響を及ぼしていた。

一国の王太子ともなれば、ほんの子供のころに婚約者が決まり、婚姻が可能な年齢に達すればただちに式を挙げるのが通例である。しかし王太子ではないキイルには、幾人かの婚約者候補はいたものの、正式に定められることはなかった。

アルト・ヴィジェ王が頑なに再婚を拒んでいるのは諸外国でも有名であるが、他国の外務官たちも、まさかそれが十八年も継続するとは思っていなかったことだろう。少なくとも五年ほど前までは、ゴースティン宮廷においても王はいずれ再婚するものと思われていたのだ。国王の従弟であるダラス公アンジェなど、いまだ熱心に新たな妃候補を王に勧めているほどである。アンジェは、レイリア妃

の容貌の特徴を持つ者を選び抜いては、王に引き合わせている。そのようなことをしては逆効果ではないのかとキイルには思えるが、ギルベイド家当主たるアンジェには王の継嗣がなんとしてでも必要なのだ。

ギルベイド一門の者たちが王の再婚に熱心な姿勢を貫いている以上、キイルの妃となっても王太子妃となれない可能性が依然としてある。もちろんゴースティン王族に嫁ぐということだけでも大変な誉れであり、王家の傍系一族となることを考えれば、たとえ王弟妃であつてもその地位は外交上、魅力的に映ることだろう。

それでも他国が二の足を踏んでいたのは、かつてのゴースティン王族であるギルベイド家とハーシェリオン家の宮廷闘争に巻き込まれることを懸念しているためである。何十年にもわたり続いてきたこの争いが大使を通じて諸外国の宮廷にも知れ渡っており、キイルの妃候補については正式に立太子されるまでは静観するつもりのもうだった。

しかしこの半年ほど、キイルの周囲はそれまでの静けさを覆すほどに騒がしい。

キイルが思案に耽っている間もミシエルは延々と花嫁候補についての話を続けている。

「私としましては、ファジル大公女ルイーザ様が殿下のお相手には望ましいと考えております。ファジル大公はケーニヒス王女を母君に持つ由緒正しいお血筋……。あちらのご意向としまして、殿下ならば望むべくもないとのことでした」

以前から幾度も耳にしてきた名前であつたが、まったく覚える気にならない。贈られた肖像画を目にしたこともあつたが、興味の持てない人間の顔などすぐに忘れてしまう。キイルの頭を巡るのは、

いかに叔父の勧める縁談を回避するかということだけであった。

「ファジール大公の娘、か……」

ファジール大公国はケーニヒスの構成国であるが、その領土はケーニヒス全土の三分の一を占め、大公家はケーニヒス王家の傍系一族である。ケーニヒスには年の見合う王女は分家筋を含めてもおらず、国益を最優先に考えるのならばファジール大公の娘ほど次期ゴースティン王に相応しい相手はいない。

国益につながる相手ならば、美醜も人柄も二の次となる。正しい血筋と国益がゴースティン王妃に求められている条件であり、ましてや愛や恋など歯牙にかける必要もないものである。

亡き妃を熱愛し続けた兄王の場合が異例であっただけだが、カレニーナまでも臣下と恋愛結婚を果たそうとしている今、キイルには欲が出てしまう。

「気が進まんな」

「ですが、そろそろ真剣にお考えいただきませんか。再来月には十八歳におなりなのですから」

兄王がレイリア妃と結婚したのが十九のときであった。王族に限らず貴族男子の半数程度が二十歳前後で妻を娶る。ロベルトも二年前に結婚し、今では娘が一人いる。

王族である以上、私情を優先させることは許されないが、キイルはこれまで自らの責務を放棄したり、私情を押し通したことなどない。むしろ、兄王が王の責務を放り出したがために、キイルは王弟として十代前半から政務を任されてきたのだ。それが王族として当然の役割であると甘受してきたが、ひたすら愛と欲望に生きようと

する兄を前にすれば、自分の妻となる相手を選ぶ自由ぐらい当然あつてしかるべきだと思つようになっていた。

「……叔父上、私には妃にしたいと考えている娘が既にいるのだ」

ミシエルは弾かれたようにキイルを見つめる。

「この国の貴族の娘だ。誰かはまだ言えぬが」

「それゆえに、どの縁談をお勧めしても難色を示されていたのですか……」

キイルは先ほどとは一転して、無邪気に笑つて見せる。

「そういうことだ。だからあなたに協力を頼みたい」

「しかし殿下、相手が誰か言えぬというのは、貴族といえども著しく家格が低いということでしょうか？」

「いや、むしろ王家に匹敵する家柄だ」

「まさか、ギルベイド家の娘」

「それならば、叔父上には頼まぬ。直接ダラス公にでも話すさ」

「……ドートリッシュでございますか？」

キイルが微笑を浮かべると、ミシエルの顔が曇る。

「そ、それは……ギルベイドの娘を王妃に望むよりも難しいかと」

「なぜだ？ たかが侯爵家だろう？」

「たかが侯爵家など！ あの家には王家が与えた称号など意味がありません！」

ミシエルは声を荒げた。彼の言い放った言葉には、強い私情が込められているようにキイルには感じられた。

ギルベイド家とハーシェリオン家、この二つの家にはオトウール家がゴースティン王家となつて後、王より公爵位が叙爵されているが、オトウール家よりも長い歴史と伝統を持つがゆえに、王より与えられた称号になど意味はないと両家の者は考えている。王家に従順で野心などないように見えるミシエルですら、デデュー公爵の称号よりもハーシェリオン家当主としての地位に価値があると思っているのだ。

ミシエルは咳払いを一つし、努めて冷静な声でキイルに問いかける。

「クラウド殿の従妹、アズノエル姫でございましょう？ 亡きエルデイス卿の、たった一人の姫君……」

「ああ」

「そういえば、幼いころにセヴァンスでお会いになられておりましたね。殿下は姉上のところによく行かれておりますが、もしやそのときにも……」

「ああ、オフアンへ行くついでにアルティスにも滞在したことがあ

る。だが、王太子となれば、そのような自由はきかなくなるだろう？　だから彼女のことを正式に公表したい。無論、私の妃として」

ミシエルは額に手のひらを当て、洪面を作る。

「あの者は教皇の一族ではありませんか。それも、あのエルジェ三世の直系筋……。教会権力を抑え込むどころか、増長させかねません」

「協力はできぬと？」

「恐れながら、いかに身分が釣り合おうとも、国益につながるお相手ではございません。もちろん、殿下がアズノエル姫をそれほどまで愛しておいでなら、なにも今後一切会うなとまでは申しません。ただし、ルイーザ大公女と婚姻は結んでいただいた上でのことになります」

「なにが言いたい？」

「なにも妃とせずともよいではありませんか」

「叔父上……。あなたは私に、兄上のように妾を持つと言うつもりなのか？」

ミシエルは口を噤んだままであったが、決して否定はしなかった。むしろ、子供の駄々に呆れているというような目をしていた。

「……下がれ」

ミシエルはそれ以上なにも言わず、一礼の後、身を翻した。退室

していくミシエルの背に、キイルは鋭利な声を投げつける。

「デデュー公、ここでの話、決して他言はするな」

一人になったキイルは、唇を噛みながら自問を繰り返した。

それほどに難しい相手なのか。自分だけがわかっていなかったのか。少なくとも、アズノエルは諦めているようだった。

ふと、初めてキイルが素姓を明かしたときのアズノエルの顔が思い出された。落胆したような、寂しげな微笑……。

初めてお会いしたときから、私は殿下のことをお慕い申しておりました。けれど、結ばれることのない相手だとずっと言い聞かせてきたのです。

子供のときと同じようなアズノエルの顔が過ぎり、キイルは机の上に無造作に置かれていた書類を強く握りしめていた。

焦燥 (2) (後書き)

【補足説明】

キイルは王弟であるため、王太子ではなく王太弟と呼ぶのが正確だそうです。

(立太子という言葉も立太弟となるのでしょうか?)

ですが、混乱を避けるためにあえて“王太子”という言葉で統一しています。

“東宮” “ドーファン” “ツエサレーヴィチ” のように推定相続人に共通する称号を作るという方法もありましたが、それはそれでややこしくなりそうなのでやめました。

ご了承ください。

儚い希望

「これはキイル殿下……。どうされたのですか？」

ふらりと本宮の礼拝堂を訪れたキイルを、長い黒髪くろかみの司祭が出迎えた。

ロジェ・サルファ。ルドリア教会においてドートリツシュと双壁をなすとされるサルファ家の当主である。

かつてドートリツシュの当主が>教皇<とされていた時代、サルファの一族は>大司教<の地位にある者を数多く輩出し、教皇のもととも忠実なる臣下でもあった。だからこそ、ゴースティン王はサルファ家にもドートリツシュ家に準じる特権の付与を許した。教会内においても、彼らは高位に就く者が多く、信徒からの畏敬を集める一族である。

しかし今ではドートリツシュ家とサルファ家は不和であり、このロジェとクラウドの仲も芳しいものではないという。

キイルはロジェをちらと見やり、ため息まじりに呟く。

「ドートリツシュやサルファは特殊な一族なのであるうな。聖職者でありながら、妻帯も子をなすことも許されておるのだから」

「たしかに特権とも言えるものですが、それが許されているからには義務や柵しがらみもございます。王家も、私どもと同じであると存じますか？」

「それは嫌味か？　その義務を放棄し特権に溺れているのが、この国の王ではないか」

「なにを焦っておいでなのです？」

ロジェの穏やかな声が耳にまわりついてくる。キイルはそれほど信心深いわけではないが、聖職者の持つ独特の空気に呑み込まれそうになる自分に気づいた。

ふと、本音を漏らす。

「私は、王にならねばならぬのか……？」

「アルト」ヴィジェ陛下に、王子がいらつしやいませなので、現状ではキイル殿下に王位が渡ることになりましょう。あの王室法に基づいて立太子される以上、たとえ陛下に王子がお生まれになるようなことがあっても、あなたの地位が揺らぐことはございません」

少々の慰めを期待しての問いかけだったが、ロジェはキイルに容赦なく現状を叩きつけた。

慰めなど期待するだけ無駄であったと思い直し、身を翻そうとしたキイルに、ロジェは静かに問いかける。

「殿下はご存じですか？　かの王室法をギルベイド家の者が制定した経緯について……」

「そのぐらい知っている。図々しい妾が、正嫡の王子を排斥し、己の庶出の子を王太子に据えたからだろう」

キイルが苦々しく吐き捨てると、ロジェは微笑を返す。

「今の状況は、そのときと似ておりますね」

「なんだと？」

「もし、アルト＝ヴィジエ陛下に男子がお産まれになれば、殿下を取り巻く状況は変わるかもしれないということでございます。それがたとえ妾の子であつたとしても……」

なるほど、と得心しながらも、キイルの胸の底からは暗い感情が沸き上がる。

「そのようなもの……奇跡、というよりも絶望に近いな。信じてみるだけ、強い落胆を味わうだけではないか。第一、そなたも知っているだろう？ 兄上に女子しか生まれないのは、次から次へと捨てられていく妾たちの呪いであると噂されていることを。どうせ、今度生まれるという妾の子もまた女だろう」

「いずれにしても、あなたは王となるべきお方でございます。様々なことにお迷いになるのは結構です。しかしながら、最終的に選ばれる道は決して間違つてはなりません。……それは許されぬことです」

キイルは眉を寄せた。一体、誰がそれを許さぬというのだと、抑えがたい苛立ちに火が灯った。

薄笑みを湛えたままの司祭に一瞥をくれ、キイルはそのまま礼拝堂を後にした。

かの王室法の一文が制定された経緯は、今から五代前の王の御世

に遡る。

オトゥール朝第十一代国王リシャルには他国から迎えた妃がいたが、十人生まれた子のうち九人は王女で、たった一人の王子も夭折していた。妃は度重なる出産により病がちとなっており、さらなる子は望めないことから、王の異母弟リュシャンが王太子とされていた。

そんな中、王は多くの妾をはべらせ、幾人かの私生児を儲けるに至っていた。特に、男子を産んでいたギルベイド分家の娘は、妾でありながらまるで妃のごとく振舞っていた。王は、妾とその子イーヴを王宮に住まわせ、周囲の反対を押し切ってイーヴを認知までしていた。妃が亡くなってから、その妾はイーヴを王子として扱うよう周囲に強要するようにもなっていた。

その数年後に王は病で崩御したが、王が臨終の際にその妾を後添いとすることに決め、宮廷司祭の立会いのもと婚姻証明書にまで署名していた。それにより、その妾は過去に遡って亡き王の妃となり、庶子イーヴには王子の身分が与えられることとなった。

それでもなお、王弟リュシャンが王位に就くのが筋であったが、結果として王位が渡ったのは五歳にもならないイーヴで、リュシャンは立太子されていたにもかかわらず廃位された。

その背景にはいくつかの要因があった。

まず、王弟の母后はケーニヒスに取り込まれた小国の王女で、ゴースティンと母后の祖国はケーニヒスとの絡みで関係が悪化していたことである。加えてリュシャンが病弱であることも相まって、彼の立場は非常に弱いものとなっていた。さらに、当時の閣僚や高官の多くがギルベイド家に連なる大貴族で占められ、一門の権勢はかつてないほどに強まっており、後ろ盾の弱い王弟を表立って庇える者がいなかったのだ。

とはいえ、あまりに品位を欠くこの王位継承問題は、廷臣はおろか民の反発をも招いた。王の寵を笠に着て、好き勝手に振舞い、贅沢三昧を繰り返したその妾の評判もまた地に落ちていた。

それゆえ、ひとまず場を収めようとして制定されたのがあの王室法であった。

元より、王弟と第一王子の間で王位継承に関する争いが起こりやすいついという歴史もあり、“現王に長らく王子が誕生しない”限り、王弟を正式に王太子と扱うことはできなくなった。そして、一度正式に立太子された王子は、後に上位の王位継承権が現れてもその地位は覆されないということも同時に規定された。

もつとも、道理を曲げてまで即位させられた幼王イーヴはわずか十歳で崩御し、廃太子と呼ばれたリュシヤンがその跡を継いで第十三代国王となった。つまり、キイルにはギルベイドの血脈は流れていない。そして現在、あの王室法はギルベイド家の者たちの首を絞めることになっていた。

十

翌日、キイルは側近に依頼していた報告書に目を通していたが、読み終わるとともにその書類を机上に放った。

ロジェ・サルファの言うように、たしかに状況は似ている。妾の子であったとしても、その妾を兄王の妃にさえすれば、その子が自動的に王太子となるのだ。

しかしたった一つだけ、まったく異なることがある。それは決定

的な差異であると言ってもいい。

王の妾アイリーン・オルストン。

兄王と接する機会があるということは、せめて高位の官職に就いている貴族の娘だろうとキイルは考えていたが、それはまったくの逆であつた。

いかんせん家格が低すぎる。それは下級貴族の中にあつてもなお下位に当たるような家の娘であつた。名を聞いたとき、すぐに気づくべきであつたのだらう。キイルは、オルストンという家名を一度として耳にしたことはなかつたのだから。

アルト＝ヴィジェ王は以前、とある男爵夫人を妾にしていた。アイリーン・オルストンとは、その男爵夫人の侍女で、兄は妾の侍女に手を出したということになる。改めて、兄の女性の好みの広範囲さには驚かされるばかりであつた。

妾の地位が著しく低いことは問題である。これでは、たとえ男子が誕生したとしても、その母を新たな王妃に据えるという計画自体が成り立たなくなる。百五十年前の王太子廃位劇は、妾上がりの妃の生家がギルベイドであつたからこそ為せた暴挙であるのだ。

ゴースティン王の妻となり肩身の狭い思いをした妃は多いが、それはあくまで国家間の軋轢によるものであり、家格の低さゆえに冷遇された妃などいない。もしアイリーンを妃にと望むのであれば、ダラス公を始めとしたギルベイド家の者たちに賭けるしかないということだ。ハーシェリオン家の流れを組む王など誕生させないという彼らの執念に……。

だが、はたして彼らが動いてくれるだろうか。

（私の真意を明かした上で、協力を仰ぐというのもひとつの手だ。いや、それでは不審感を煽るだけであろうか……）

そこまで思つて、キイルは馬鹿らしいとばかりに笑みを浮かべる。この十八年間、妾との間に男子が生まれたことはない。三十を超える私生児がいながら、ただの一度としてないのだ。

奇跡としか言いようのないものに縋ろうとしている自分が滑稽でしかなかった。

（いつそ、私が王であればよかったのだ……）

先王であるキイルの父ヴィクトルは、ケーニヒス王女を妃にと望む周囲の反対を押し切り、ギルベイド家の娘オヴェリアを妃に据えた。

キイルが王となった暁に、父と同じように、アズノエルを妃に据えることもできない。しかし、兄王は壮健そのものであり、キイルが王位に就くなど何十年先になるかわからない。それまで独身を貫き通すなど許されないだろう。今でさえ、これほどせつつかれているのだ。

加えて、アズノエル自身が妃になることを拒否している。教皇一族としての生まれた^{しがらみ}柵は、目に見えない形で彼女を縛りつけているのだろう。

せめて彼女がクラウドの妹であれば、ミシエルもあれば強く反対しなかっただろう。ドートリツシュ本家の者は教皇の直系でないこともあり、王家に従順で、忠実な臣下であると言っても過言ではない。

そんな甲斐のないことばかりを願うにつれて、キイルは自身を愚かしく、情けなく思いもした。

（もう、なにもかも遅すぎるのではないのだろうか……）

キイルは投げ放った報告書を手元に引き寄せる。口の中で兄王の

妾の名を呟き、ため息を吐きながら瞳を閉じた。

彼に残された道は、儚い希望に縋ることだけであった。
神が、弱き者に与えたもう奇跡を信じて……。

幼き愛の形

「オフアンへ？」

請願書に目を通していたキイルは、ミシエルの満面の笑顔を見上げた。

「はい、王太后陛下の別邸にて大規模な夜会が開かれることになっているのですが、ぜひ、殿下にもご出席していただきたいと思いまして」

ミシエルからの申し出は急なものであったが、これは毎年のことと言ってもよかった。しばし考え込んだものの、キイルは一つ返事で了承した。

アイリーン・オルストンの子が生まれるまで、協力者もないキイルにはろくに行動を起こせない。しばらくは政務に没頭するほかは時間を有効に潰す方法がなかったのだ。

キイルは羽ペンを取り、カレニーナ宛ての手紙を書いた。カレニーナのもとを訪れているであろうアズノエルに、急遽セヴァンスへ行くことになった旨を伝えるためである。数時間後に届いたアズノエルの返事は、近日中にアルティスへと向かうというものであった。

（一体、私たちはいつまでこのようなことを続けていくのだろうか）

今、アズノエルは王宮にいる。近くにいるというのに会い行くこともできない。逢瀬を約束した場所は、王都から一日以上かかるア

ルティスだ。

家柄の良い女性ほど、未婚のうちは恋人を持つべきではないという考えがこの国には根強い。キイルは自分たちの想いが後ろ暗いものであるような扱いをされることが気に入らず、アズノエルとの関係を正式に公表したいと考えている。しかし、今はまだそれは叶わない。

二つ折りの白いカードをじっと眺める。アズノエルが返信のために寄こしたカードには、簡潔な文面が流麗な文字で書かれていた。せめてささやかな愛の言葉が添えてあれば、キイルの心持ちも多少は変わったことだろう。しかしアズノエルは誰かの目に触れることを恐れてか、必要最低限の言葉しか文面に表さなかった。

キイルは今、一日が過ぎるのを遅く感じながらも、一日が過ぎていくのを強く恐れている。アズノエルに会いたいとだけ願い、手にしたカードへそつと口づけた。

十

セヴァンスは避暑地としてよく知られているが、中でもこのオフアンは王太后が居住しているために、多くの宮廷貴族たちが集う社交場となっており、保養シーズンともなれば、毎晩のように夜会が開かれている。それゆえ、王太后の暮らすこのオフアンの別邸は、諸外国でも密かに有名であった。

夜会の始まる前、引き会わせたい者がいるとのことで、ミシエルはキイルを控えの間へと連れていった。その部屋の中央には、四十

代の中ほどに見える黒髪の男がいた。堂々とした体躯に青灰色の礼装をまとい、余裕のある笑みを湛えてキャサリーゼと言葉を交わしている。

「ファルス伯爵、よくいらっしやった」

「デデュー公爵、お会いするのは一年ぶりだな。お変わりなくて安心いたしました」

ミシエルが親しげに話す男は、外国の伯爵のようだった。ミシエルはキイルのほうへ手を指し示し、にこやかに紹介する。

「先王の第二王子、キイル」ヴィジエ殿下にございます」

「おお、王太子殿下にお会いできるとは……。あなた様の肖像を幾度か拝見したことがございますが、父君のヴィクトル陛下の若かりしお姿に生き映しであると思っておりました」

「伯爵は、父と面識がありますか？」

「ええ、先王陛下とはもう三十年も前になりますが、エクシユール宮殿にてお目にかかったことがございます」

オフアンを訪れる貴族は国内外問わず名のある者たちばかりだが、キイルはファルスという名を耳にしたことはない。おそらくは偽名だろう。オフアンでは高貴な者が身分を隠すために偽名を用いたり、^{かつら}髪で変装したりする例が珍しくないのだ。

その意味ではキイルも素性を隠してよかったのだが、ここに集まる者たちは国内外の要人ばかりである。親交を築いておくためにわざわざ出向いたのだから、王族としての地位は最大限利用するに限

るだろう。

そう思っていた矢先、キイルのほうへ歩み寄ってきたミシエルがファルス伯爵の素姓を告げる。

「あの方の本当のお名前は、カールⅡフィオラ・デイル・ザードとおっしゃるのです」

「あれが、ファジールのカール大公……！」

「お忍びで外遊しておられるのですよ」

ミシエルはキイルの耳元でそう囁いた。

「叔父上……」

思わず、呆れ声がキイルから漏れた。妃候補に上がっていたルイーズ大公女の件が真っ先につながったためである。

カール大公は先代ファジール大公とケーニヒス王女との間に生まれた。ケーニヒスはゴースティンと違い、女系男子の王位継承権を認めているため、カールは第二位のケーニヒス王位継承権を有している。

近年、ケーニヒス国内の不協和音は頻繁に耳にする。元々ファジール地方は独立した国家であり、ケーニヒスと同君連合が形成されて百数十年が経つ今でも、ファジールはケーニヒスからの独立を図っているというのが外交筋の見解である。この状況においてゴースティンと堅密な関係を築こうとするのは当然であろう。

キャサリーゼと談笑しているカール大公に視線を戻すと、それに気づいたカールはキイルに軽く目礼した。

一見、低頭に思えるものの野心に燃える男の瞳だった。それはミシエルとも通じるものがある。きつと彼らは、単に利害だけでなく互いに通ずるものがあるからこそ親交が深いのだろう。

王となるうとなるまいと、キイルは国政を担う者として祖国の益について考えねばならない立場である。ミシエルはそれをわからせるために、キイルをここへ連れてきたのだろうか。

ここしばらくのキイルの振舞いは子供が自棄を起こしているようにも見え、それをミシエルは懸念していたのかもしれない。キイルは冷静さ失いつつあった自分を恥じ、今夜は自らに与えられた責務を果たそうと思った。

ハーシェリオン別邸での夜会は午後六時から始まった。

キイルは事前に主要な招待客についてミシエルから聞き及んでいたが、ミシエルの口から、キイルが会いたくないと思っている人物の名は出てこなかった。キイルはそれにより安心し切っており、顔なじみの招待客らに声をかけ、愛想を振りまいていた。

そんな中、流麗な所作でお辞儀する女性にキイルは瞠目する。初めて会う人物であったが、それが誰なのかキイルは一目で気づくことができた。

その女性の身につけているドレスは、ケーニヒス流のものである。ゴースティン宮廷で見られるものとはほぼ同じ作りであるものの、赤や黒、金といった重厚な色が多く使われており、フリルも少なく、堅苦しい印象を与える意匠である。ファジールはケーニヒスの影響が強いため、ほぼすべての文化がケーニヒスのもので揃えられているのだ。

「カール大公の娘、ルイーザにございます。以後、お見知りおきを」
ちらと見ただけの肖像画の中の少女が、鮮明によみがえってきた
かのであった。

キイルは落胆から込み上げてくる乾いた笑いをなんとか呑み込む。

「……あなたは、偽名を使われぬのか？」

ルイーザは面食らったように黒い瞳を瞬かせたが、すぐに艶然と
笑む。

「ええ、偽名だなんてすぐにボロが出てしまいそうですもの。父の
ように上手く使い分けるだなんて、私には無理ですわ」

普通はそうだろう、とキイルは苦笑する。

ルイーザが来ていることをキイルが知れば、この夜会から逃げる
とでもミシエルは思ったのだろうか。そのようなことができるはず
もないのだから、事前に知らせておいてくれればよいのにと、叔父
を恨めしく思った。

二人の会話が途切れたころ、楽団が新たな曲を奏で始める。王宮
の夜会では必ずと言っていいほど演奏される定番のワルツだった。

「王太子様、一曲お相手いただけませんかしら？」

「ええ、もちろん」

誘いには素直に受けた。というよりも、通常、キイルから誘わな
ければならないものであった。ルイーザ大公女がこの夜会に出席し
ているのは、キイルと引き合わせるためのものだったのだから。

差し出されたルイーザの手を厳かに取り、キイルは中央へと進み

出た。

変に期待をされても困るが、かといって無下にあしらうことなど
ではしない。相手はファジールの大公女である。

キイルは微笑を浮かべ、穏やかな口調で問う。

「ルイーザ殿、ゴースティンにお来しになるのは初めてでいらっし
やるのか？」

「ええ。父はあの通りですけれど、私はファジールの領土内から出
ることさえ今までごさいませんでした。オファンは美しいところで
すのね。貴族たちがお忍びで集うというのもわかりますわ」

「たしかにオファンも美しいが、アルティスには叶わぬ」

「存じておりますわ。ここに来る途中に立ち寄りましたの。特に、
崖の上にそびえ立つあの白亜のお城の素晴らしいこと……。殿下は
アルティスにはよく行かれますの？」

「そうだな。あそこは幼いころの思い出の地だ」

二人の婚約話が進んでいることを知っている招待客たちは、好奇
に満ちた視線を向けてくる。曲が終わると同時に、キイルは周囲の
目から逃れるようにルイーザを伴ってテラスへと出た。

手すりにもたれるキイルの背に、ルイーゼのおもねるような声が
届く。

「王太子様はいつまでこちらにいらっしゃるの？」

「今週中には王都へ戻るつもりだ」

「政務がお忙しくてらっしゃるのね。父が言っておりましたわ。キイル殿下は政務のすべてを取り仕切っておられると」

「すべて、というわけではないが、私にしかこなせぬ政務もある。それゆえに忙しいのだ。たとえば、私にとってはこの夜会も政務の一部に過ぎぬ」

あなたもそうだろう、とキイルが笑いかけると、ルイーザは顔色を変えた。

「……ずいぶんと、冷たいことをおっしゃるのね」

傷ついた、という風ではなく、どこか安堵したようにルイーザは呟いた。

泣かれでもすれば、言葉を取り繕いもしただろうが、そんなものは不要の気遣いだったようだ。あの父に、この娘あり、と言ったところだろう。ルイーザの立ち位置を知ったキイルは、清々しさを覚えた。

ルイーザは少し顎を上げてキイルを見る。

「私がオフアンまで出向いてきたのはあなたにお会いするためですわ。けれど、あなたは私になど興味がありませんよね」

「どうやら、叔父があなたの父君になにか余計なことを言ったようだな」

ミシエルはこの夜会のために、お忍びの外遊を好むカール大公だけでなく、箱入りの大公女までを巻き込んだ。ここまでやるからに

は、ミシエルも相当焦っているということなのだ。それほどアズノエルのことが気に入らないのかと思うと、キイルの胸の奥にじわじわと苛立ちが沸き起こってくる。

「ルイーザ殿、あなたはゴースティンの王妃になりたいのか？ それとも私の妻に？」

「その二つに違いなどございますの？ まさか、恋愛感情の有無だなんておっしゃるのかしら？」

「そうだと言えば？」

「あなたには王族である資格などないと思うだけですわ」

キイルは手すりから身を乗り出すようにして笑った。先ほど感じた苛立ちもどこかに吹き飛んでいた。深い敬意と多くの称賛に包まれて育ったキイルには、姪の王女たちにでさえ、ここまで辛辣な物言いをされたことはなかったのだ。

いつまでも笑い続けるキイルの様子に気を悪くしたのか、ルイーザは細い眉を吊り上げ、声をとがらせる。

「私は、今夜初めてあなたにお会いして、あなたのことは好きでも嫌いでもありません。ただ、結婚相手としては他の誰よりも魅力的だということです。……我がファジル大公国にとってあなたほどの有益なお相手などおりませんから」

その反応に、キイルはますますルイーザを好ましく思った。国家のための結婚に対し、ここまで割り切ることができる彼女が羨ましかった。同時に、ルイーザの言うように自分には王族たる資格も覚悟もないのだろうという気にもなっていた。

「殿下には恋人がいらっしゃると伺っておりますわ。それが少々厄介なお相手であることも」

「ああ。私は彼女以外を妃に据えるつもりがないのだが、周囲の反対に遭い、困り果てている。ここ最近、いつそ臣籍に下ることができればと願うばかりの日々なのだ」

「あなたは間違っておられますわ。王族というものは、その生き死にすら個人のものではなく、ただ、国の繁栄のためだけに血肉を捧げるべき存在よ。それにもかかわらず、愛だの恋だのにかまけて、義務を投げ出されるというの？　もし王族同士の結婚にも恋愛感情を抱く必要があるというのなら、それは国益につながる相手との間に抱くべきものだ」と私は考えますわ」

「……残念だな」

怒りに燃えるルイーザの瞳を見つめ、キイルは苦笑を漏らす。

「私がつと早くにあなたと出会っていれば、あなたを愛することができたかもしれぬ。あなたは、そのような感情など必要ないと考えているかもしれぬが……」

身体を反転させ、手すりに背を預ける。

「さっきの質問だが、私の真意はこうだ。……私は王になるつもりはない。あなたがゴースティン王妃の地位をお望みなら、私との結婚は回避されたほうがよい」

「あの、おっしゃっている意味が……」

「私はまだ王太子ではない。あなたはそれをご存じか？」

ルイーザは弾かれたように目を見開く。

「ゴースティンには少々変わった王室法がある。それにより、王弟である私はまだ立太子されていない。私は宮廷において、“王太子”ではなく“筆頭王位継承権者”という持って回った呼び方をされている」

「ですけど、それでもあなたが王位を継がれるのは確実ではないの？　だって、先王陛下には他に王子がいらっしゃらないし、アルトⅡヴィジエ陛下にだって王女しかいらっしゃらないわ」

「ああ、もう少しで私が王太子となるのは確実になるだろう。……何事もなければな」

「な、なにをなさるおつもりなの？」

「まだなにもする気はない。今しばらくは信じてみるだけだ」

キイルは夏の星座が輝く夜空を見つめ、祈るように呟く。

「……奇跡を」

賭け

細い指に操られた炎が淡い輝きを放ち、夜空へと吸い込まれていく。

それは、柔らかな夢の心地に似ている。

「美しいな」

「えっ……？」

「お前の操る炎だ。私が火などを賛美する気になるのは、お前が生み出すものだからだろう」

アズノエルは螺旋状に浮かび上がる炎を消し、はにかんだ笑みを見せて俯いた。その様子を、キイルは微笑ましげに見つめる。

「魔道の力は、神と人をつなぐ精霊の力をお借りしているもの……。ですから、あまり不用意に使ってはいけないのです。もし、このようなところをクラウドお兄様に見られたら叱られてしまいますわ」

二年前にドートリツシュ本家の当主の座に就いたクラウドは、現在ルドリア教会最高位の主教となっている。彼は国王の信任厚く、若くして宮廷司祭長の地位にもある。

キイルはエクシール宮でクラウドと昔からよく顔を合わせるが、実直という言葉があれほど似合う者はいないだろうと思っている。

少々堅苦しさを覚える男ではあるが、そういった生真面目さはアズノエルを思わせるもので、好意的に思っていた。

キイルは立ち上がろうとするアズノエルの手を掴み、いきおいよく引き寄せた。顎に指をかけ、素早く唇を合わせる。

「魔道の力を使っているところよりも、こうしているところを見られるほうが叱られるのではないのか？」

アズノエルの手がわずかにキイルの肩を押したが、彼女の形ばかりの抵抗にはもう慣れていた。儚い抵抗を、花弁を摘み取るように崩していく。

夜のアルティス城はあまりに静かだ。

アズノエルが王都へと移り住んでから、この城には必要最低限の使用人しか置かれていない。二人がいるテラスはアズノエルの私室につながっており、ここには許可なく誰も入ることはできない。

そのせいで、二人の逢瀬は日毎に大胆になっていく。それに伴い、彼らの間に漂う退廃の匂いは日々濃くなっていったが、墮落への道を留めているのはアズノエルの憤み深さのせいであつた。

アズノエルは六年前にエクシユールの本邸で暮らすようになり、クラウスに付いて宮廷を出入りしているものの、なにも夜会や観劇にばかり興じているわけでもない。カレニーナの誘いでサロンに入りするほかは宮廷に出向くこともほとんどなく、余暇はドートリツシユの寄付により立てられた救貧院や病院を訪れ、病人の世話をしたり、子らに本を読み聞かせたりしている。頻繁にアルティスに來ている理由も同様であつた。

「知っているか？ 兄上の妾がもうすぐ子を産むらしい」

ふいにキイルはそう切り出した。既にその話を聞き及んでいたためか、アズノエルは特に驚きはしなかった。

「どうせまた女だろうがな。妾との間に何十人もの子が生まれはしたが、そのすべてが女ばかり……。王位継承権を持たぬ男子が生まれたところで私にはなんの関係もないのだが、あまりに女ばかりが生まれるせいで、次々に捨てられていく妾の呪いだなどと言われている。実際、兄上の放蕩ぶりに神がお怒りなのやもしれぬ。……私も、あの方には少々怒りを感じている」

ろくに神に敬意を払っていないくせにこのようなことを口にする自分が可笑しくて、キイルからは自然と笑いが込み上げていった。それをアズノエルが咎める。

「陛下は慈悲深く優しい方です。そのようなことを申されてはいけませんわ」

「ああ、私にとっても良い兄だ。王でさえなければ、私はあの方に悪意を抱くことはなかったであろうな。王には向かぬとご自分で言っておられたが、いっそ、楽師にでもならればよいのだ。兄上もそのほうが本望だろう」

「よくベルージャを奏でていらっしやいますね。私もいくつか楽器を嗜んでおりますが、あのような音は出せませんわ」

「なにを言う。お前のハープは見事なものだ。多くの者が、あの音色に聴き惚れている」

キイルはアズノエルを腕の中に納めたまま、ぼんやりと夜空を見上げる。

彼の胸には不安ばかりが募っていた。もしかしたら、今こうして彼女を抱いていることさえも夢幻ではないのかという正体の知れぬ恐れに……。

「ここでお前と暮らせればどれほどよいかとも思う」

腕に力を込め、アズノエルの耳元でささやく。

「私が王となれば、この城に似せた新しい離宮を造ろう。庭園も、お前が気に入るように造り変えよう。そうだな、エルド湖畔のシュ―ゼランを庭に移植させようか」

腕の中のアズノエルはなにも言葉を返さない。身体を離し、キイルはアズノエルの顔をのぞき込んでみたが、瞳は固く閉じられていた。あのような戯言を口にしてみても、アズノエルを困らせるだけのことで、また、キイル自身も虚しさが募るばかりであった。

懇願するように問う。

「もし兄上に王子がおられれば、つまり、私が臣籍に下ることが容易であれば、私の妻になることを望んでくれたか？」

「……叶わぬ願いとわかっていても、そう望んでしまったと思います」

そう呟いたアズノエルは、キイルの服の袖をきゅっと握った。その仕草があまりに愛おしく、華奢な肩を掴む手に力がこもった。薄闇の中、キイルは密かに口角を上げる。

「ならば、私と賭けをしないか？」

キイルはアズノエルの手を取り、その滑らかな甲に唇を這わせる。

「もし、もうすぐ生まれる妾の子が男子なら、私はその子に王籍を与え、王太子とすべく尽力しよう。そうすれば私は臣籍に下り、お前を娶ることが――」

キイルが言い終わるのを待たず、アズノエルは彼の手を強く払った。

「そのようなお戯れを！ あなたはご自分の立場をわかっていらっしやるのですか！」

キイルは低く笑いながら彼女の手を引き戻す。

「もし生まれたのが女なら、私には他に取りうる手がなくなるのだ。私は別に王になどなりたいわけではない。ましてや、お前を失ってまで得たい地位ではない。近ごろ周囲の者が妃を娶れと煩く責め立ててくる。私はお前以外を伴侶とする気はないというのに……」

現王の実弟と国内屈指の名家の娘……。その二つの肩書は決して不釣り合いなものでないはずなのだ。三百年近くも昔の禍根を引きずり、その子孫である者たちが引き裂かれねばならないなど馬鹿げている。

それゆえ、王妃でなければよいのだろうと、キイルはアズノエルに問いかけたが、彼女の返事は色好いものではなかった。

「そのようなもの、賭けでもなんでもありませんわ」

「私が次期王の地位にある限り、お前は私の妻にはなってくれないのだろう？　だが、私はお前を妾などにする気はない。もしお前が

望むのならば、私は王族としての地位すら捨てる覚悟がある」

「なんという馬鹿げたことを」

「馬鹿げているが不可能ではない。前例があるのだ。今から百五十年も前のことだが……」

キイルはアズノエルに奇妙な王室法が制定された経緯を話し、不敵に笑いかける。

「その妾が子を産むのは、ちょうど私が十八となる前なのだそうだなにやら運命めいたものを感じはせぬか？」

「キイル殿下……。私は、あなたに約束された輝かしい未来が失われることを望んでなどおりません」

「これはお前のためではなく、私自身のためなのだ。もし、妾の子が女であつたならば神に見放されたと思い、私は己の運命を受け入れよう。しかし、私の願いが聞き入れられたなら、神の与えられた奇跡と思い、私はお前を娶るために全力を尽くそう」

怒りからか、恐れからか、アズノエルはわずかに震えていた。キイルはその細い肩を抱き、込み上がるやるせなさを逃すように小さく息を吐いた。

（どれほど愛の言葉を口にしようと、アズノエルにとっては愛の証明にならないのだろうか……）

キイルはアズノエルの耳の後ろに手を差し入れ、長い髪を後ろに梳き上げた。柔らかな長い髪を口元にやり、軽く口づけを落とす。

「少しは喜んでくれないか？　それほどまでに、私はお前を愛しているということなのだから」

「私も殿下を愛しておりますわ。だからこそ、身を引かねばならぬのだと」

なにも言つなとばかりに、キイルはアズノエルの唇を塞ぐ。唇を開かせ、舌先で歯列をなぞり、柔らかな舌を絡め取る。甘い吐息が漏れると、キイルは細い腰に腕を回し、強く引き寄せた。もつと求めてくれればいいと思いつつも、アズノエルにそれを期待するのは無駄なことであつたと気づく。

深く絡み合つていた唇を離し、キイルは少し息の乱れた声でアズノエルに語りかける。

「レイリア妃が亡くなってから一か月あまり経って私が生まれた。兄上は、自分の責務を放棄する言い訳を私の存在に求めたのだ」

「殿下もまた、その責務を投げ出し、別の者に背負わせるおつもりなのですか？」

「別にかまわぬだろう？　オルストン家は貴族と言えど平民と変わらないような家柄だ。そんな家に生まれた者が、ゴースティンにおける最大の榮譽を手に入れることができる。そののなが」

「誰もが榮譽をほしがるわけではございません。殿下のなさろうとしていることは、かつてアルトゥィージェ陛下がなされたことと同じではありませんか。ご自分の責務を、生まれたばかりの御子に……。その御子が、いずれ殿下に同じことを思われるようになれば、どうなさるのです」

「そうだな、お前の言うことももっともだ。ならば私は、その子の補佐に心血を注ぐ。臣籍に下るうとも、兄上のように政を棄てるようなことはせぬ。だから私を信じてくれ」

もつとも愛する者へ誠実であろうとするために、キイルは不実な言葉を口にする。

「お前を娶ることが叶わずとも、私は決して自分の隣に他の女を並ばせはせぬ。……なにがあらうと、私にはお前だけだ」

キイルはアズノエルを妾になどする気はない。それは嘘偽りのない彼の本音であつたが、もし正式に立太子されれば、必ず妃を娶らねばならなくなる。その相手は、もうほぼ決まつたも同然だつた。

他の誰かを妃に迎えたキイルは、アズノエルを妾として手元に留め置くことになるのだらう。兄と同じような道を歩もうとしつつある自分に失望しつつも、もはや綺麗事だけで生きていくつもりもなく、不実な言葉を口にしても良心の呵責など感じはしなかつた。

熱を分け合うように指を絡め、己の中の真実に忠実であらうと誓い、ひたすら彼女の愛を乞うた。

十

かくして、獅子宮の月、二十三日。

キイルの願望の一つは叶つた。

アイリーン・オルストンは男児を出産した。

賭け（後書き）

【補足説明】

獅子宮の月〃八月

手駒

処女宮の月、二日。

キイルの成人の儀とともに、十八の生誕日を祝う夜会が開かれた。

ゴースティンにおいて貴族の成人年齢は男が十七、女が十五であるが、王族は男女ともに十八で、成人の儀の際に称号とともに王領の一部を王より賜る。王女も王子と同様であるが、成人前に嫁ぐ者が多いため称号と王領を賜ることは少なく、また、他家へ嫁ぐ際は王籍とともに一切を返上する必要がある、終生その称号が維持される例はほとんどない。

キイルに授けられた称号は“クラヴィーエ公”で、これまで王弟の中でもっとも年長者に授けられることが多いものであった。クラヴィーエ公を名乗った王族で王太子となった者は幾人かいるが、あの王室法が制定されて後は一度もない。

「クラヴィーエ公殿下、本日は真におめでとうございます」

ハーシェリオン一門の者たちがキイルの周りに群がり、次々に祝いの口上を述べた。

既に多くの公務や政務に携わってきたキイルは、今になって成人扱いされようとなにかが変わるわけでもない。また、今日から呼ばれることになる称号にも特に関心は持てなかった。

もしキイルがあゝの王室法に則って立太子されるとすれば、その儀式はまた別のものであり、王太子となればクラヴィーエ公という称号で呼ばれなくなるのだ。

現状からすれば、年内にキイルはアルト・ヴィジェ王の後継として“王太子”となることが宣言されることになる。その際の式典や夜会には外国の要人も多く招待され、その規模も今回の比ではないだろう。

（問題は、いかにその日を先延ばしにできるかな……）

キイルは控えめに広間を見渡し、目当ての人物を探した。

アズノエルが夜会に出てくことは滅多にないが、今夜はクラウドとともにこの宴に参加している。

ドートリツシュの司祭は半分俗人のようなものであるため、クラウドはいつもの司祭服ではなく、ジーストコール ウエスト キヨロット長上着に中衣、脚衣といった宮廷服に身を包んでいる。

淡い色が良く似合うアズノエルは、ウイステリア サテン藤色の絹繻子地のドレスをまとい、招待客の貴婦人らと微笑を交わしていた。

その近くの一際華やかな集団にはカレニーナがいる。彼女は鮮やかな赤い髪が良く映える緑色のドレスを身につけ、夫であるエイルバードとともに取り巻きたちと談笑している。

半月前、カレニーナとエイルバードの挙式がガルバンヌ大聖堂にて執り行われた。国内で王族の挙式が行われたのは先王と王太后キヤサリーゼ以来のことで、第二王女と伯爵の挙式としては非常に盛大なものとなった。加えて、その祝賀パーティーが挙式から七日間にわたり王宮で開催されたが、それは親馬鹿と揶揄される王の計らいであった。

キイルの生誕祭であるこの夜会は、その祝賀パーティーの数日後に開催されたものである。上等な装いをした宮廷貴族たちの中には、連日の徹夜で疲れ切った顔を、無理やり化粧で隠している者も珍しくなかった。

突然、甲高い歓声が上がり、キイルはその方向に目を馳せる。

兄王が楽団に混じり、得意のベルージャを披露しようとしているところだった。王のこのような振舞いは今夜に限ったことではない。王がまだ王太子であった少年のころから、夜会において奔放な振舞いをするのが常であったという。

楽団の周囲には取り巻きの貴婦人たちが群がり、おもねるような視線を王に投げかけていた。一体、あの中の何人が王の妾であったのだろうか、キイルは苦笑気味に見つめていた。

王が加わって新たな曲が演奏され始めたころ、キイルの傍に控えていたミシエルがその場を離れた。キイルが侍従から勧められたワイングラスを受け取り、それを口にしようとしたとき、ダラス公アンジェが恭しく姿を見せた。アンジェは柔らかさなど微塵も感じられない峻険な顔立ちをしており、王とよく似た色合いの青い瞳は、常に酷薄さを湛えている。

「ダラス公、そなたも私に祝いの言葉を述べに来たのか？」

「はい、本日は真におめでとうございます。……クラヴィーエ公殿下」

アンジェの威圧的な声で新たな称号を呼ばれても、キイルは不快感を覚えるばかりであった。まるで、終生その名で呼ばればよいと言いたげに思えた。

アンジェは先王の最初の妃オヴェリアの甥で、王とは従弟に当たる。年齢は王と三つほどしか違わず、幼いころから王と親しくしていたと聞くと、彼らが主従を越えた友人関係にあるなど誰も思っていない。アンジェにとって王はもっとも有用な手駒にすぎないのだ。そんな心裡が彼の言動の端々からにじみ出ている。

「近ごろ、デデュー公は殿下のお妃選びに奔走されているようございますね。なんでも、ファジールのルイーザ大公女で決まりそうだから……」

「正式に決まったわけではない。ファジル大公女は単なる妃候補の一人だ。あちらはゴースティン王太子としての私に、娘を嫁がせたいとお考えのようだからな」

琥珀色の発泡ワインの入ったグラスを口に運びながら、キイルはそつけなく答えた。

キイルとアンジェは図らずも目的を同じくしているが、互いにその手を取り合うことはありえない。キイルにとってアンジェとは、有能すぎるがゆえに動かすことのできない駒である。それを苦々しく思う気持ちはキイルの中にあっただが、考えるだけ無駄なことで早々に頭の中から追い出した。

広間の右手を見やった後、キイルはアンジェに意味ありげな笑みを向ける。

「幼いころ、私はよく思ったものだ。あの、はねつかえりの姪が女王にでもなれば、さぞや面白いことになったであろうとな」

他国においては、王女や女系王族にも王位継承権を与えている例はある。ゴースティンも王室法を変更して女王を認めてしまえば、カレニーナが王位を継ぐことができた。

ハーシェリオーン門が閣僚や高官の座を独占しつつある昨今においても、アンジェは法務大臣の座に就いており、その役職に留まらない権勢を国政において誇っている。そんなアンジェの権力を最大限に活用すれば、キイルにとっての面白い事態は容易に達成されたことだろう。

エイルバードと腕を組むカレニーナに目をやったアンジエは、探るような視線をキイルに返す。

「そういえば、殿下のお耳に入っておりますか？ アルト＝ヴィジエ王の妾が男子をお産みになられたとか」

「ああ、もちろん聞き及んでいる。これで妾の呪いなどないと証明されたわけだな。……さぞ、そなたにとっては無念であったことだろう。もしアイリーン殿が妃であれば、ギルベイド家の流れを汲む王太子誕生となったのだからな」

キイルが予想通り、アイリーン・オルストンの産んだ王の子について、宮廷において表立って話題に上ることはなかった。

カレニーナの婚儀と祝賀パーティーの最中の出来事であったため、華やかな話題のほうへ多くの者の目が向くのが当然である。そもそも、妾が王の子を産むなど王家にとって醜聞でしかなく、王女の結婚という慶事の真っ只中にあえて出す話ではないのだ。

たとえ産まれたのが男子であろうとも、現段階ではただの私生児であり、オルストンのような下級貴族の者が王家に対し野心を抱くことも考えられない。実際のところ、王は妾との子を認知することではなく、子らは一定の年齢に達すれば修道院に遣われている。先日生まれた子もいずれ同じ運命を辿ると思われる。だからミシエルもこの件に関しては歯牙にもかけていない。

「そうそう、かつてレイリア妃の死産なさった御子は男子であったとか。この度お産まれになった御子には、兄上もなんらかの愛情をお示しになるやもしれぬな」

キイルが薄く笑むと、アンジエはわずかに眉を寄せた。それを見

咎めたキイルはさらに笑みを深く刻み、アンジエに背を向けた。

キイルの弁を、アンジエは嫌みだとも思っていることだろう。所詮、この男に自分の胸の内などわかるはずがないとキイルは思った。同時に、この世の誰にも理解できるはずがないのだと自嘲した。正嫡の王弟自ら、妾の子に王位を譲り渡そうと画策しているなど正気の沙汰ではない。しかし、キイルにはそれ以外に有用な手が思いつかなかったのだ。

胸をかきむしるような焦燥は、狂奔する恋情によるものか、それとも喪失への恐怖によるものなのかわからない。ただ、一刻も早くこのような煩わしい感情から解放されたいと願っていた。

十

連日の夜会の幕は夜明けとともに下ろされ、その翌々日にはキイルの生活は依然と変わらぬものに戻った。

午前十一時から数時間わたり外国の使臣らと引見を行い、午後三時から定例の閣議に出席した。そして閣議終了後、キイルは王の私室へと向かっている。閣議の内容を兄王に伝えるのは、五年前よりキイルの務めとなっている。

王の私室のある回廊を曲がると、高く響く弦楽器の音色が聞こえた。兄王がいつものようにベルージャを奏でているのだろう。

政治に無関心である王は、楽器の演奏や観劇、茶会などに興じることで一日を過ごす。その甲斐あつてか、王のベルージャの腕前は卓越しており、一流の楽師と比べてもなんら遜色を取らないものと

なっていた。

それまで滑らかに奏でられていた弦の音が、時折途絶え始める。キイルは不審に思いながらも侍従の案内で奥の間にまで進んだ。

長椅子に腰かけた兄王は、ベルージャを脇に抱え、羽ペンを手に取った。円卓には五線譜が数枚散らばっており、今は練習をしていたわけではなく作曲をしていたのだと知る。

かまわず、キイルは兄王に呼びかける。

「兄上、午後の閣議決定の報告でございますが……」

「ああ、そんなものはよい」

五線譜の上に滑らかに音符を描いていく。羽ペンを持つ手を止めることもなく、柔らかな声で答える。

「そのようなものを報告されても、余には理解できぬのでな」

キイルは啞然としたが、そんな呆れも次第に怒りへと変貌していく。

「それはつまり、今後も報告は不要であるということでしょうか？」

明らかに非難の色を漂わせる声色であったにもかかわらず、王はまるで気にかけることはなく、もう一度ベルージャを抱え直した。

ベルージャはファジールの西に位置するルザリーという国から二百年ほど前にゴースティンに持ち込まれた。六つの弦を持つこの楽器は、元はもつと低い音色であったが、ゴースティンに渡ってから何度も改良され、荘厳で高い音色を奏でるものとなった。夜会だけでなく、教会堂における礼拝の際にも用いられる代表的な楽器である。

る。

ゆったりとした旋律が室内に響き渡る。当然だが、キイルには聴いたことのない曲であった。演奏だけでなく作曲の才能もあるのだと思えるほど、心を癒してくれそんな繊細な旋律を王の指が弾き出している。

しかし、今このような音色を聴いても、キイルの心はささくれ立つばかりである。そんなキイルの傷にさらに爪を立てるのは、兄王の無神経な言葉であった。

「余もそなたのように政治の才に恵まれておればな」

キイルは、手にしていた報告書の束を深い皺が寄るほど強く握りしめ、努めて冷静な声を返す。

「失礼ながら兄上、このようなことは才能などというものではないかと存じます」

「そういうことを言っておるのではない」

兄王が軽薄な言葉を紡ぐことに、弾き出される音色が一層高く鳴る。

「人の上に立つ者の器量と言おうか……。ともかく余は、昔から王には向かぬと多くの者たちから言われてきたのだ。余のあまりの不甲斐なさに父上も困っておられてな、母上が亡くなられて十五年も経ってお前の母を後添いとしたのも、先を憂えるお気持ちがあったからであろう。お前が生まれたとき、父上はたいそう喜びであった」

「でしたら、兄上も新たな妃を娶られてはいかがです？」

思わず、キイルから冷やかな声が放たれた。王はそれに驚いたのか、ベルージャを奏でる指を不自然に止めた。

兄に対して、ましてや王に対してならば、あまりに失礼な態度であった。だというのに、王はキイルに向けてゆつたりと微笑んだ。そんな兄王のなやかで優雅な眼差しは、キイルの苛立ちすら呑み込み、その心を酷く揺さぶった。

悲しみと困惑を含んだ、慈愛に溢れてさえ見える青い瞳……。兄の秀麗な顔があまりにも優しい色合いを浮かべるとき、キイルはいたたまれなくなる。王であり、親ほど年の離れた兄でもある人物と対峙しているというのに、なぜ、無抵抗の人間を前にしているかのような気分にさせられるのか、と。

「余は、早くお前が王になればよいと思っている。ケーニヒス王のように、讓位ができればよいのだがな」

「国王の讓位が可能となるよう王室法を変えるように言ったところで、あの法務大臣は聞き入れそうにもありませんがね」

「仕方あるまい。アンジェは王家にとって忠実な家臣ではないのだから。あれが余に仕えておるのも、ギルベイドの流れを汲む王であるからというだけのこと。裏を返せば、お前に辛く当たるのも」

「王太后を宮廷から追い出したのも、ハーシェリオン家出身の妃であつたからでしたね」

キイルはすげなくそう言い放った。

父を論^{あげつら}うことに抵抗はあつたが、ギルベイドとハーシェリオンから妃を娶ることに同意したのは王として失策もいいところだと思っ

ていた。あの二つの権門は、王女の降嫁先にならばまだしも、妃を娶る家柄ではない。己の存在を否定することになるが、母キャサリーゼとは子をなすべきではなかった。既に結婚した王太子がいた以上、余計な火種を持ち込みかねなかったのだから。

そして、もし自分がいなければ兄は王としての責務を放り出さなかったのではないか、ともキイルは考えていた。

「王としての責務を果たされたいというのであれば、せめて兄上にしかなぬことに目を向けられてはどうでしょう？　いくら才能に恵まれていようと、芸術にばかり打ち込むなど、ゴースティン王のされることではありませんので」

兄王はその一言には堪えたようで、思案の末、重いため息を吐いた。

「新たな妃、か……。正直なところ、これまでまったく再婚を考えなかったわけではないのだ。お前の立場を危うくするのではないかなと思えば、二の足を踏んでしまっただけ。そうだな、お前が正式に余の後継となったら後ならば、妃を娶ると約束しよう」

「まさか、兄上には誰かお心に決めた方がおられたのですか？」

弟への気遣いを放蕩生活の言い訳にされた気がして、キイルは少々気を悪くした。しかし、あれほど頑なに再婚を拒み、貴婦人たちを使い捨ててきた王に誰か想う人がいるということには驚きを隠せなかった。

キイルの立太子後に、という条件は気に入らないものの、これはキイルにとって光明が差したかに思える流れであった。しかるべき身分の女性ならば、下級貴族の妾を妃に据え、私生児を王太子にするよりもよほど正攻法である。廷臣らの余計な批判に晒されること

もないだろう。

「兄上、なぜそのことを言ってくださらなかったのですか。そもそも、私にはそのような気遣いは無用です。私は、なにも王になりたかったわけではないのですから……」

キイルがそう告げたとき、兄王は薄く笑った。それは今までキイルが目にしたことのない、どこか冷やかさを孕んでいるものだった。

手駒（後書き）

【補足説明】

処女宮の月Ⅱ 九月

散花

キイルの生誕祝賀の宴より一週間、久々にエクシユール宮殿に伺候したアズノエルは、本宮の礼拝堂で静かに祈りを捧げていた。

彼女にとっての祈りとは、なんらかの願いを捧げるといふ類のものではなく、ただ、気を落ち着かせるためのものにすぎない。それは子供のときから変わらない習慣のようなものである。

ここ最近、アズノエルの頭を支配していたのは、キイルにより持ちかけられた“賭け”のことであった。

王の子が誕生して以来、つまり、あの一方的な賭けに負けてからというもの、アズノエルはキイルと二人きりで会っていない。カレニーナの援護が期待できなくなった以上、政務に忙しいキイルと会う機会などなかなか持てないが、今日こそ彼と話し合わねばならないと思い、王宮に出向いたのだ。もしキイルが本気ならば、アズノエルは彼の軽拳を止めねばならない。迷っているのは手遅れになってしまう。

それにもかかわらず、アズノエルはキイルと会う気になれなかった。心にもない別れの言葉をキイルの前で口にしなければならいと思うと、心が倦み果てていくようだった。

後ろから近づく足音に、アズノエルははっと双眸を開く。

「なにをしているのだ？」

艶のある甘い声だった。ゆっくりと身を翻したアズノエルの目に映るのは、長い波状毛をなびかせる壮年の男だった。

「礼拝堂にいる者にかけ言葉ではなかったな。……実は、先ほどからずっとそなたの後ろ姿を眺めていた。ずいぶんと熱心に祈っていたようだが、なにか心の疼きを抱えているのか？」

「いえ。なんでもございません、陛下」

「そのように沈んだ顔を余の前で見せたことなどないだろう。その憂いを秘めた美しい顔……なにかに似ていると思えば、宗教画の天使のようではないか」

「そのようなこと……」

アズノエルが口ごもったのは、同じ言葉をキイルからも言われたためである。

目を閉じて聞く王の声は、少しキイルを思わせるものがある。目を開けて見る王の風貌は、キイルの面影を偲ばせている。オトウール王家が五百年以上続く古い血筋であるがゆえに、髪や目の色だけでなく細く高い鼻梁や下唇の形など、直系の人間は男女ともによく似ている。

王の中にキイルの姿を見出すかのように、アズノエルは呆けた目で一点を見つめていた。徐々に、その輪郭がぼやけていき、愛しい人の顔が浮かび上がる。それにより、アズノエルの中の疼痛は増していった。

アズノエルはその場に立ち尽くしていたが、王は二人の間の距離をつめていった。アズノエルの腰まで伸びた亜麻色の髪を指に絡めながら、耳元で囁く。

「アズノエルよ……。そなたの憂色を、余が取り除くことはできぬのだろうか？」

髪を絡めたままの王の指はアズノエルの肩に触れた。その手が次第に滑り落とされ、胸の膨らみをなぞり始める。アズノエルはとつさに身を引こうとしたが、わずかに眉を寄せること以外なにもできなかった。王の囁いた声は、真綿で作られたこだわ束具のようだった。柔らかで、滑らかで、それでいてわずかな動きすら戒めるかのように強く絡みついていく。

「余の妃レイリアは、物静かで控え目で、いつまでも向かい合い、語らっていたいと思える娘であった。レイリアを亡くしてから十八年……その代わりをずっと求めてきたが、余の周りに群がっている者はいずれもその代わりにはならなかった。あの者たちでは一時の慰めにはなるが、すぐに冴え冴えとした虚しさに襲われてしまう。余は虚無が恐ろしいのだ……」

手は既に腰へと回り、強引に抱きすくめようとする。

「余は、そなたを愛してもよいだろうか？」

アズノエルは呆然としていたが、唇を噛みしめ、王に非難の目を向けた。それは彼女にとって精一杯の抗議を込めたものだったが、なぜか王は微笑んだ。

柔和さに彩られた青い瞳は、多くの愛妾たちに向けられているものとどれほども変わらないだろう。それに気づいた途端、アズノエルは王に対し激しい嫌悪を抱いた。その顔つきを、ほんの一瞬でもキイルになぞらえてしまった自身に対しても同様だった。

「……お放しください」

無駄だとわかっていながらも、そう言わずにはいられなかった。

予想に違わず、王はアズノエルの拒絶を意に介してなどいなかった。必死に顔をそむけようとするアズノエルの後頭部を掴んだ王は、互いの鼻先が触れ合うまで顔を近づけた。

目の前にいるこの男は、見紛うことなく、愛しい恋人の姿ではない。なにもかもが違う別個の存在であり、触れられても恐怖と嫌悪しか感じない。

そんなアズノエルを嘲笑おうというのか、重ねられた唇は幼子をあやすかのように優しいものだった。

「これまで余は望むもののすべてを手に入れてきた。だが、ただひとつ、失ったものだけは還ってこなかった。ずっと、それを取り戻したいと考えていた。……もし、そなたが余の愛を受け入れてくれるのならば、失われたものがやっこの手に」

王はその先の言葉を継ぐことができなかった。
アズノエルが渾身の力を込めて王を突き飛ばしたのだ。彼女にとつて、それ以上は耐えられるものではなかった。

一歩身を引いた王は驚きで目を見開いていたが、それ以上にアズノエルは取り乱しており、早まりすぎた鼓動により目眩すら覚えていた。

「お許しを」

叫ぶように声を発すると、アズノエルは振り返ることなく礼拝堂を走り去った。

高く響く足音が自分のものだけだと気づいたとき、王が追いかけてこなかったことを知った。それでも彼女は走るのをやめられなかった。

柱廊を駆け抜け、離宮の庭園にある噴水まで辿り着く。踵の高い靴を履いている上に、普段走り慣れていないため、疲れた脚が絡み、

柔らかな草地の上へと身体が投げ出された。

深く息を吐き、呼吸を整えながら、身体をゆっくりと起こす。がくがくと震える脚に力を込めて立ち上がり、噴水の縁に腰を下ろした。眩いほどに煌めく陽の光を浴びながら空を見つめっていると、自身の惨めさが増していくようだった。頭上から降りかかる水飛沫は、薄らとにじみ始めた涙をほんの少しかき消してくれた。

陽が徐々に雲の中へと隠れていき、毒々しい煌めきは消えていく。アズノエルの心は徐々に平静を取り戻しつつあったが、それを裏切るかのように黒い影が忍び寄る。

はっと強張らせた顔を上げると、全身を白装束で包んだ国王の侍従数人が立ち並んでいた。先頭に立つ侍従は、まったく色を浮かべない表情のまま、静かに告げる。

「国王陛下がお待ちでございます」

アズノエルは胸の前で組んだ指に、強い祈りを込めた。今の彼女には、ほんの少し先の未来を想像することさえできなかった。ただ、真つ暗な闇の中に足を踏み入れていく以外、自分には道が残されていないのだと知った。

十

無表情の侍従たちが、隙のない所作で長い回廊を突き進んでいく。彼らはアズノエルが再び逃げ出すことを案じているのか、前後左右

を取り囲んでいる。それは一見して異様な光景であったが、幸か不幸か、この回廊には滅多に人が通らない。

侍従たちの白一色の仕着せは聖職者を思わせるが、これほどまでに人間らしさを感じさせない姿は、まるで覆面を被った処刑人のようでもあった。

アズノエルを部屋の奥まで通すと、白い侍従たちは恭しく礼をして退室していった。

おそらく彼らはいつものように扉の前に立ったままにいるのだろう。礼拝堂でのときのように王を振り切って逃げることはできない。なにより、ゴースティン王からの呼び出しに応じながら、許可なく退室するなどできるはずもない。

アズノエルは扉のほうを恨めしくうかがっていたが、全身にまとわりつくような甘い声が耳に届く。

「先ほどは驚かせてすまなかったな。少し、二人で話をしたいと思っただけなのだ」

「私とお話し、ですか……？」

どれほど声を震わせないように努めても、アズノエルは自分の歯の根が合っていないかのように思えた。恐る恐る見上げた先には、とてつもないほどに優しい笑みを湛える男がいる。

「愛してもよいかと、お前に訊いただろう？」

王の酷薄な問いに、アズノエルの肩がびくりと揺れる。

「余は、もう誰かを愛することはないだろうと思っていた。それは

頑なな誓いであつたと言つたほうがよいだろうか……。新たな妃を求める周囲の言葉に耳を傾けてこなかったのも、余がその者たちを愛す気がなかったからだ。愛せもせぬ者を妃に据えたところで、不要な空虚が満ちていくに違いないのでな」

「なぜ、そのようなお話を私にされるのですか？」

アズノエルは、やっとの思いで言葉を返した。それは意味のない問いかけであつたが、その先に続く王の言葉を聞きたくなかったのだ。

「お前にだけは、他の妾のような扱いをしたくはないからだ」

王の青く澄んだ瞳が細められ、アズノエルの前に奇妙な暗さが降り落ちる。

「余は、お前が傍にいてくれて、他愛ない言葉を交わしていられるだけでよいと思つていたのだ。しかし、それは己の願望を必死に押し留めていただけだったのだろう……」

王はおもむろにアズノエルの頬に手を伸ばし、横髪を滑らせるように触れた。

「お前の、髪や肌に触れたいと思うことさえ罪深いと感じていた」

王の腕がアズノエルの腰に回り、もう片方の手は耳や頬を緩く撫でる。

「よくよく思い起こしてみれば、余には望んで手に入らぬものなどないのだ。そのことに気づいたとき、ずっと心に落ちていた暗い影

が取り払われていくような心地がした。今はどこか晴れやかな気分だ」

アズノエルはなにも言えず、ただ、身体を強張らせることしかできなかった、王はその華奢な体軀を腕の中に抱え込む。

「わかってているのだ。お前の心が余にあるうはずはない。それでも愛することを止めることはできぬ。許してくれ……」

悲痛な謝罪を告げた王の唇がアズノエルに重なる。アズノエルは顔をそむけようとしたが、王の手がアズノエルの後頭部を強く掴み、彼女をぐいと手前へ引き寄せた。その衝撃で開いた唇の隙間へと柔らかな舌が差し込まれ、逃げる舌を執拗に絡み取った。

鼓動が激しく打ちつけ、恐怖が全身を駆け巡る。

力が抜けていくアズノエルの身体は、長椅子の上に倒された。そのときやつと唇が離され、胸を安堵がかすめたのも束の間、すぐさま王の舌先がアズノエルの首筋を這い始めた。知らずのうちに捲れ上がっていたドレスの裾へ、王の手が忍び込んでくる。アズノエルは抗おうと王の腕に手をかけたが、その手首は容易く掴み取られ、長椅子の背に押しつけられた。

「つつ……」

それほど痛みがあつたわけではないが、強い衝撃に思わず声が漏れた。

王の瞳が悲しげに瞬く。手首を掴んでいた手をすぐに離し、すまぬと耳元で囁くとともに、アズノエルの膝の裏に腕を回して一気に抱き上げた。

視界が急に高くなり、身体が不安定に浮かんため、アズノエル

は王の腕にしがみついてしまった。裸足の爪先が王の歩調に合わせて揺れている。履いていた華奢な靴はどこかに脱げ落ちてしまっていた。

「降ろしてくださいませっ！　どうか、陛下　」

すぐにそこから逃れようと、アズノエルは身をよじらせた。王がどこに向かおうとしているのか、考えるまでもないことだった。

寝台の天蓋は、大国の王者に相応しく絢爛とした金の装飾が施され、そこから垂らされた絹の帳とばりは、濃い朱色にオトウール王家の鷲の紋章が金糸で刺繍されている。それを目にしたアズノエルはひゅつと息を呑んだ。高まりすぎた鼓動のせいで、呼吸が喉元で絡まったのだ。

王は朱色の帳を強く払いのけ、アズノエルを抱えたまま寝台の中へと押し入った。

寝台の上に横たえられたアズノエルは、反射的に身体を起こそうとしたが、王がその肩を掴んで敷布の上に柔らかく押し倒した。再び、口腔内を激しく弄まさぐられていく。

広い寝台の中には薔薇の香りが漂っていたが、アズノエルはその匂いをほとんど吸い込むことができなかった。次第に、小さな唇の端からどちらのものとも知れない唾液が伝っていったが、王はそれを舌で舐め取り、啄ばむような口づけを落とし、唇を軽く吸い上げた。その感触が、アズノエルの肌をざわりと粟立たせ、さらに震えを強くした。

それでも王は気に留めることはない。アズノエルの胸元のリボンボタンを一気に解き、細かく留められている釦を次々に外して、ドレスを脱がせていった。

王の手つきは決して乱暴なものではない。むしろアズノエルのほ

うが、相手が王であることを失念するほど混乱しており、力加減などしていない。だというのに王の腕の中から逃れることは叶わなかった。

王の手が背に回るのがわかり、アズノエルは辛うじて自由になっている片手で王の肩を強く押し上げた。どうかお放しください、と何度も叫んだ。その声には涙も混じっていた。

王はその小さな手を引き剥がし、指を絡めながら骨ばった手の中に握り込む。

「すまぬが、止めるつもりはない」

突然、身体がふつと軽くなる。

アズノエルが驚きから目を開けると、コルセットの紐がゆるやかに解かれていた。紐の緩んだコルセットの釦は容易に外れ、アズノエルの胸からするりと剥がされていく。

露わになった乳房に王の手が伸び、整えられた爪先が乳房の先端に触れ、間断なく刺激が与えられる。アズノエルは強く目を閉じてそれに耐えていたが、再び唇を吸われる感覚に、さらに身を固くした。愛撫に長けた手が胸や腰、内腿を這い回り回るように動いていても、強張った身体がそれに応えることはなかった。

アズノエルは王の腕の中でなすがままにされたくはなかったが、なりふり構わず抗い続けることもできなかった。抵抗など、するだけ無駄だと彼女にはわかっていて。出口は塞がれ、どこにも逃げ場はない。王はアズノエルが望んでいないことをわかっていて行為に及んでいる。王にはアズノエルの心を考慮する余地はなく、またその必要もないのだ。

厚い帳に囲まれた寝台の中は薄闇に包まれている。

下肢にしどけなく絡みついていた薄いレースの下着がずり下ろさ

れていくと、柔らかな敷布の上に投げ出された、一糸まとわぬ白い肌が淡く浮かび上がった。

アズノエルは羞恥から手で必死に身体を隠そうとしたが、そんな初心な反応すら楽しむかのように、王は目を細めた。王の瞳は、一見いつもの穏やかさを宿していたが、獲物を捕食する猛禽類を思わせる鋭さが見え隠れしていた。彼もまた、黒鷲を紋章に戴くオトウール王家の人間であるのだと、貫かれるような視線に晒されながらアズノエルは思い知っていた。

柔い胸をなぞっていた手が徐々に内股へと伸び、その中心に触れる。アズノエルはとつさに膝を閉じようとしたが、王の身体がその間に押し入り、儚い抵抗を封じた。

両膝の裏を掴まれ、脚を大きく広げさせられる。

王はアズノエルの耳朵を舐め上げ、熱い吐息とともに甘い声を注ぐ。

「愛している……」

自身の姿を目に映したくなくて、アズノエルは固く瞳を閉じた。貫かれ、揺さぶられるたびに、悲鳴とも呻きともつかない声が喉から漏れたが、唇を噛みしめ、必死にそれを耐えた。

涙が目尻から耳へと流れていく。不規則に乱れる息が帳の内側に広がる。苦痛に喘ぐ肉体を捨て去りたいと願ううちに、アズノエルの意識は薄闇の中に溶けていった。

暗転（１）

アイリーン・オルストンが男子を産んでから半月が過ぎた。カレ
二ーナの婚儀や、キイルの生誕祭もつつがなく行われたことにより、
宮廷は少々静かになっていた。これまでキイルはろくに身動きが取
れなかったが、手駒を動かし始めるにはちょうど良い頃合いである
と考えていた。

「陛下、今なんと……」

キイルが王の私室へと足を踏み入れようとしたとき、クラウスの
狼狽した声が届いた。クラウスはまだ二十代半ばながら非常に沈着
で、権威に臆することもない人物である。そんな男がうるたえる姿
など、なかなか見かけることはできない。

どうせまた兄が無理を言っているのだらうと、キイルは特に気に
留めることもなく奥へと進んでいった。

「陛下、そればかりは私は同意しかねます。どうぞ、お考え直しを
！」

クラウスの声はますます乱れた。

これまでクラウスは王の妾遊びについて節度と誠実さを持つよう
何度も諫言してきた。王の周囲の人間にはそのようなことを口にす
る者はおらず、散々王の好きにさせている。だが、クラウスはその
立場上、そしてその性格上、王の軽挙妄動を見過ごすことができな
いでいたのだ。

キイルはくすりと笑いながら、二人の会話に割り込む。

「また新たな妾を抱えようとしてもいいのですか、兄上。つい先日カレーナが結婚したばかりなのですから、少しお控えになられたほうがよろしいのでは？」

「そう意地の悪いことを言ってくれるな、キイルよ」

“病的な女狂い”とも揶揄されるアルト・ヴィジェ王であるが、実際のところ、王自身が望んで女たちを囲っていたことは少ない。大半の妾たちは出世を企む者たちにより送り込まれており、王は単なる礼儀のつもりで擦り寄ってくる女たちを手当たり次第抱いていたという側面もあった。しかし王は妾たちに無心されるがままに官位を与えることはせず、むしろそのようなことがあればすぐにその妾を打ち捨てていた。

だからこそ、これまでキイルは王の色事に一切口を出してこなかったのだ。

「まあ、兄上のお好きになされればよろしいでしょう。クラウド殿もそう目くじらを立てずともよいのでは？　このようなこと、今に始まったことではありませんまいに。……それよりも兄上、少々お話がございます」

クラウドは王に一礼し、退室しようとしたが、キイルはそれを呼びとめる。

「この件は、ぜひクラウド殿にも聞いていただきたい」

「一体どうしたというのだ？」

王は憮然としたまま、頭を抱えるような仕草で頼杖をついた。キイルはそんな王の近くへと微笑を湛えて歩み寄る。

「先日お生まれになった兄上の御子のことでございます。あの者に王籍を与えてはどうかと私は考えているのです」

「また、その話が」

「また、とは？」

「アンジエだ。アイリーンの子を正式に王家に迎え入れよと申し出てきおった。……キイルよ、まさかお前までそのようなことを申すとはな」

既にアンジエの働きかけがあつたこと知り、キイルは無表情を装いながらも、あまりの抜け目のなさに感服していた。

王が新たに妃に迎えようとしていることをアンジエはまだ知らない。もしあの男がそれを知れば、キイルには思いもつかないような手段で強硬に事を推し進めてくれるに違いない。キイルの立太子時期についても、大幅な猶予を求めてくるだろう。目的が一致している以上、キイルはこれまで毛嫌いしてきたあの男の執念を利用してやろうと考えていた。

「キイルよ、先日も申ししたが、余はお前がゴースティン王となればよいと考えている。ようやくお前も成人したことであるし、一刻も早くお前を正式に余の後継としたい」

「私も先日、兄上にこう申し上げました。早く妃を娶られてはいいがか、と。そして、一刻も早く世継ぎを儲けていただきたい。これ以上、妾遊びなどなさるべきではございません。あれではレイリア様に対する冒瀆ではありませんか」

亡き妻を引き合いに出され、王は眉間の皺を深く刻む。

「しかし、お前が王位に就くことを望んでいる者は多い。お前も、これまで私の跡を継ぐべく心血を注いできたではないか」

「兄上の跡を継ぐためではございません。王族として、当然の役目を果たしてきただけのことにございます。それに、私が王位を継ぐことを望んでおらぬ者も、望む者と同程度にいるのですよ。兄上もご存知でしょう？」

キイルが事前に用意していた返答をすると、王はうんざりしたように深く息を吐いた。

キイルが王位に就くことにより、ギルベイド家とハーシェリオン家の対立が激化するのは避けられない。既に王家はハーシェリオン相手にろくに手を出せないでいる。特にキイルが実権を握るようになってからは、ハーシェリオン出身の閣僚や軍幹部の数が数倍に膨れ上がっている状態なのだ。

もちろんキイルは、外戚の便宜を図ろうなど考えておらず、デュー公を始めとした優秀な閣僚たちを優遇しているだけのことである。縁故による高官の登用がまかり通っているのは事実だが、無能な者に不相応な地位を与えることに同意した覚えもない。

ただし、これ以上ハーシェリオンの力が強くなることは、オトゥール王家にとって弊害でしかないのも一つの側面としてある。ギルベイドもハーシェリオンも、オトゥール王家にとって忠実な家臣ではあり得ない。キイルが王族としての立場を優先するのなら、王位を辞退することでギルベイド家に恩を売っておき、自らが王の摂政として立つほうが全方面に対し納まりがつかうと考えていた。

「外戚の駒となり、背後の力に突き動かされるなど、ゴースティンの王族としてあるべき姿ではございません。私はオトウル王家の一員として最良の道を熟慮した結果、私は兄上の御子を王太子とすべきであると考えているのです。もちろん、私はこれまで通り政務に携わり、兄上の摂政を務めるとしましょう。そのほうがギルベイド家、ハーシェリオン家双方ともにおとなしくなるのではないかと」

「……すまぬ、余が政治の才に恵まれなかったばかりにお前には苦勞ばかりをかける。だが、その話とはまた別だ。余には別に妃に迎えたい者があるのだ。クラウスよ、先ほどの話、やはり承服してはもらえぬか？」

そこでやっと、キイルは自らの思い違いに気づくに至った。クラウスがあれば反対するからには、兄王がまた妾をはべらそうとしているのだと早合点していたのだ。

王がクラウスの許可を求めているのは、婚姻にあたって宮廷司祭長であり主教でもあるクラウスの執り成しが必要であると考えてのことなのだろう。しかし、これほどクラウスが反対するとなれば、また著しく家格の低い者であるのだろうか。もしそうならば、家柄に難があるうとも既に男子を産んだアイリーンを据えるほうがキイルにとっては好都合である。

無碍に反対すれば王が固執すると思われたため、キイルは一旦譲歩することに決めた。

「兄上が先日おっしゃっていた方のことでしょうか？ 身分の釣り合う者ならば、アイリーン殿を差し置いて王妃となられてもかまわないと思いますが」

キイルの言葉に、クラウスの顔が強張る。キイルがその意味を知

るのは、王とクラウドの言葉を待った後のことであつた。

「もちろん身分は申し分ない。ドートリツシュの娘なのだから。のう、クラウド」

キイルから、すうつと血の気が引いていった。

恐る恐る王のほうを見やると、王は先ほどまでの不満顔から一転して、朗らかな顔をキイルへ向ける。

「クラウドの従妹のアズノエルだ。カレニーナと親しくしておつたゆえ、お前もよく知っておろう？　まるで天使のように慈愛に満ちた娘だ」

曖昧に言葉を濁したまま、キイルは俯いた。

なんとか平静であろうとしたが、身体はその意思に反した動きばかりを見せた。目線は波のように揺らめき、指先は小刻みに震えていた。

クラウドは焦りの色を強めながら、王へと必死に告げる。

「アズノエルはあまりに世間知らずで、王妃となるような器ではないかもしれません。どうかお考え直してください！」

その訴えを平然と黙殺し、王はキイルに問う。

「キイルよ、どう思う？　お前はレイリアのことを知らぬだろうが、アズノエルはレイリアに少し似ておるのだ。顔立ちというよりも顔つきといったほうがよいか……。とにかく、言葉を交わすだけで心の空白を埋めてくれるような心地がいたす。もう一年も前からずっと気にかけていたのだ。そうだな、もしアズノエルが妃となるなら

ば、余は今後一切の妾を持たぬとそなたらに誓ってもよい」

クラウドもキイルも絶句した。移り気の激しい王の言葉とは思えぬものだった。

キイルは、兄が妾たちにレイリア妃の面影を求めていたことは知っていたが、まさかその矛先がアズノエルに向くとは思っていなかった。キイルは亡き妃の肖像を何枚も目にしてきたが、あの黒髪碧眼の艶然とした美女とアズノエルが似ているなどと一度も思ったことはない。

クラウドは引きつった表情のまま、恐る恐る王に問いかける。

「あの、アズノエル本人は、なんと言っておるのでしょうか？」

「まだ妃に望んでいることは告げていない。あれの性格では、そう簡単に応じてはくれぬだろうと思ってな……」

王は目を細め、クラウドに酷薄な視線を向ける。

「命令だ。アズノエルを説得してくれ。そして近いうちに余のもとへ連れて来るよう……。あれと言葉を交わしているときが、もっとも心が落ち着くのだ」

暗転 (2)

王の説得に敗北したキイルとクラウドスは、揃って王の部屋を退室した。二人はしばらく無言のまま回廊を歩いていたが、やがてクラウドスが重い口を開く。

「陛下があれほど執着されるなどお珍しいことです。アズノエルがレイリア様に似ているとおっしゃっておられました、それほど似ておるのでしょうか……？」

少なくとも、あの二人の顔はまったく似ていない。これまでアンジェが王の前に連れてきた女たちの中には、はっとするほど似ている者もいたのだ。それに目もくれず、なぜアズノエルだというのだろうか。

たしかに王が語ったように、アズノエルは言葉を交わすだけで心が満たされていくような柔らかい空気を持っている。あれほど深い慈愛を見せる者をキイルは知らない。華美に過ぎる容貌とは不釣り合いなほど、兄王は柔弱な気質である。それを思えば、アズノエルに惹かれたとしても不自然ではなかった。

「クラウドス殿、まさか兄の申す通りにアズノエルを差し出されるおつもりなのか？ あのような横暴を甘受すると？」

「もちろん、多方面への影響を考えれば当家の娘と王族との婚姻など認めるべきではないでしょう。ですが、もはや我らは一貴族に過ぎませぬ。王命なれば、無碍にはねつけるわけにはいかぬというのが現状です……」

王に理解を示すようなクラウスの言葉は、キイルにもどかしさを与えた。

クラウスはアズノエルのことをとても大事にしており、本来であれば、なんとか王の軽拳を止めようとするはずである。しかし王は一年以上もアズノエルのことを想い続けており、今後一切妾を持たないとまで言い放ったのだ。王があそこまで本気だと知った以上、クラウスの固い心が揺らぐのも無理はないのだろう。

自分自身への気休めのように、キイルは言葉を吐き捨てた。

「兄上はもう妾は持たぬと言っておられたが、そのようなもの、信じるだけの価値はない。どうせ、またすぐに目移りされるに決まっている」

それを聞いたクラウスは、険しい顔を崩さぬまま、肩を落とす。

「キイル殿下にこのようなことを申し上げるのは心苦しいのですが、我がドートリツシュ家は永く続く司祭の家系ゆえ、今さら王家の縁戚となりその命脈を保とうなどという考えはございません。逆に、我が家が王家と関わることで、昨今の教会内の勢力争いに影響を及ぼすことを懸念しておる次第です。そもそも、アズノエルはとても宮廷で渡り合っているような気性は持ち合わせておりませんし、私はあの子を王家に嫁がせるべきではないと考えております。殿下、どうか陛下をご説得していただけないでしょうか……」

王家に嫁がせるべきではないというクラウスの言葉は、キイルの胸にずっしりと圧しかかった。しかし、同時に、アズノエルがあれほど妃となることを拒んだ理由も理解できた。

クラウスはゴースティンの貴族としてではなく、ルドリア教会の

権力者としての立場を重視した結果、王家との密接な関わりを避けようと考えているのだろう。

教会の高位司祭らが王族や有力貴族と結びつきを持つことは、司祭の合議により運営されている教会の規律を乱しかねない。既に教会内には俗権力の介入による腐敗が起こっており、クラウスはそれを必死に糾さんとしている。そんな彼の事情をアズノエルもまた共有しているのだ。

「殿下も、この件には反対なのでございましょう？　なんら国益につながらぬ妃など、ゴースティン王に相応しくないとと思われるのは当然でございます。家格に問題があろうとも、王の子をお産みになったアイリーン殿のほうが良いと思われるのは当然のこと……。なにより、王家が教皇一族とつながりを持つことを不快に思われるのは当然ですし」

「別にそのようなことが不快なわけではない。ドートリツシュの間こそ、オトゥール王家を憎んでいるのではないのか？」

「たしかに、分家の者の中には、王家を快く思っておらぬ者もございます。ただ、“狂王”と揶揄された教皇エルジェ三世については国王軍が討たずとも、別の誰かが討つたであろうとも言われております。晩年精神を害し、悪魔的儀式に手を染め、一部の司教らと麻薬に溺れてすらいたと伝え聞くほど……。ですから、王家を恨むようなことはいたしておりません」

「クラウス殿の考えはよくわかった。いずれにせよ、これ以上兄上の勝手を許せば、廷臣はおろか民の不満も募る一方であろう。アイリーン殿を妃にするほうが王家にとって好都合なのだ。私に力になれることならばなんでもいたそう」

「そのようにお心を砕いていただき、感謝の言葉もございません」

「感謝など必要ない。貴公はいつも兄に親身に接しておられるというのに、このようなことになってしまつてすまないと思つてゐる」

キイルは自分の発する言葉のひとつひとつがあまりに空々しいと感じていた。

これは兄王のためでも、クラウスのためでも、アズノエルのためでもない。ただ、ひたすら自身のためであつた。

「ところで、アズノエルは今どうしているのだ？　ここ最近、王宮で姿を見かけぬが」

カレニーナは、降嫁した後も夫とともに宮廷への出入りはしている。その際にアズノエルを伴つてきてほしいとキイルはカレニーナにそれとなく伝えていた。しかし、それが果たされたことは一度もない。

「ずっと屋敷に引きこもつておるのです。少々体調を崩しておるせいか、沈みがちで……。どことなく王宮に出向くことを避けているようにも見えましたが、まさかこんなことになつていようとは……」

「兄上が妃に望んでいると、アズノエルは知つてゐるのか？」

「陛下の話を聞く限りにおいては、まだ知らぬということでしたが、陛下のお気持ちは知つておるのでしょう。説得を、と陛下が言われる以上、真に失礼ながら嫌がつておるということでしょうし」

つまり、アズノエルは兄王の想いを知つており、王からの寵愛を受けることを避けるべく、王宮に出てきていないのだ。

一体、あの二人の間にどのような接点があったというのだろうか。先ほどの兄の様子を思い出すたび、キイルの心は激しくざわついていく。

「まあ、それは当然の反応だな。百を超える妾を持つと言われる王に求婚されて喜べるのは、財と権力にしか興味のない者であろう。まともな娘なら王命であろうと拒むに違いない」

「陛下は、今後一切の妾は持たぬと言われておりましたが……」

「あのような戯言を信じられるなど、宮廷にはあなたほど人の良い御仁はおらぬだろうな」

キイルは表面こそ余裕を保っていたが、募る焦りを抑えられないでいた。

キイルにはクラウドしか頼りになる者はいないというのに、クラウドがこのように及び腰になっていては王の説得が難しくなる。ギルベイド家にしても、下級貴族の妾の子を王太子に据える労力を考えれば、ドートリツシュの娘を王妃に据え、王子誕生を待つほうを選ぶだろう。

いくら考えてみても、キイルには良策が浮かばなかった。

その翌日、王がアズノエル・ドートリツシュを妃に望んでいるという噂が王宮を駆け巡っていた。

静かな激情

十八年もの間、妃を娶ろうとしなかった王がドートリツシュの娘を妃に望んでいる……。宮廷はこの話題で持ちきりとなっていた。

ほんの数日前まで、廷臣たちはアルトヴィージェ王になんの期待もかけていなかった。キイルが成人を迎え、正式に立太子されようとしている今、これまでの曖昧な立場に白黒をつけようとする者が増えていた。すなわち、日和見的な貴族の多数が、ギルベイド家よりもハーシェリオン家につこうとしていたところだったのだ。

王の再婚問題は、それを一変させるには充分であった。

「あの者たちは私の心情をどのように理解しておるのだろうか？
決して、わがろうはずがないだろう。叔父上、あなたはどう理解している？」

キイルはなんとか怒りを抑えていたが、あたりには張りつめた空気が漂う。

「国益につながらぬ相手ではなかったのか？」

執務机の正面に立つデデュー公ミシエルは、ためらいがちに口を開く。

「しかし、王が望まれているとなれば」

「私がどれほど望んでも叶えられぬものであっても、王でありさえすれば、さしたる問題ではないらしいな」

「殿下、どうかお静まりを……」

「私は極めて冷静だが？」

キイルの半ば自棄を起こしたような返答に、ミシエルは嘆息しつつも、嫌みなほど冷静な声で言い募る。

「それでは、このようなときに失礼かと存じますが、ルイーザ大公主とのご結婚、真剣に考えただけませんか？」

「本当に、このようなときにだな」

キイルは荒々しく椅子の背にもたれかかり、肘掛けを強く握りしめた。

「……不愉快だ」

部屋の外が騒がしくなり、なにか言い争うような声が聞こえたと思ったら、突然扉がいきおいよく開いた。

鮮やかな青緑色のドレスを翻すカレニーナが、キイルの執務室に飛び込んできた。白い頬は興奮から紅潮し、息も乱れている。父親とよく似た端麗な顔を硬く強張らせ、キイルをきつと睨んだ。

「どうした、カレニーナ」

「あなた、よくも落ち着いていられるものね。これは一体どういうことなの！ どうしてお父様がアズノエルを妃にだなんて……」

「そんなに理由を知りたければ、直接、父君のところへ行ってお訊ねしてきたらどうだ？ 私にも、なにがどうなっているのかわから

ない」

キイルは冷たく言い捨てた。怒るカレニーナを前にしていると、キイルの昂ぶった感情は急速に萎えていった。

顔色一つ変えないキイルの態度に、カレニーナはますます苛立ち、細い眉をさらに吊り上げる。

「あなたはこれまでお父様の妾遊びについて一切口を出されませんでしたけど、今度のことに口を出すつもりはないとおっしゃるの？」

「今度のことは妾遊びではないのな。ゆえに私には口が出せない。それぐらいわかれ」

「ですけど、ほら……。教皇一族の娘を王妃にするのは好ましくないとか、説得を……」

「そして、私の妻とするにも不都合になるというわけだな。そのようなことを言ったところで、自分自身の首を絞めるだけのことだ」

悄然とするカレニーナを前にして、キイルの萎えた怒りは自己嫌悪となつて自身の前に降り積もっていった。両手の指を組み合わせ、その間に額を押しつける。

「……すまない。今、ずいぶんと気が立っている」

「ええ、そのようね」

カレニーナは呆れと安堵の入りまじった声で応えた。彼女はいつもの平静さを取り戻しつつあったが、キイルの心は荒れたままで、

風呂気配もなかった。

「とりあえず、私、お父様とお話ししてくるわ」

「なにを話す気だ？」

「アズノエルのことを諦めてくださるよう、お願い申し上げてくるのよ」

「やめろ、そんなことしても無駄だ」

「そうでございます、カレニーナ様。そもそも、アズノエル嬢と殿下が特別な関係にあることが知られでもすれば、大変なことになります」

控えていたミシエルが、やっと口を挟んだ。その言葉を受けて、キイルは強い後悔を噛みしめることとなった。

昨日、なぜ兄王の目の前でアズノエルは長年の恋人で、彼女を愛し、その生涯とともに生きるのは自分なのだと、宣言できなかったのだろうか。王がアズノエルを妃に望んでいることがこれほど広まってしまう後では、名乗りを上げることはできない。互いの立場を考慮し、懸命に秘匿し続けてきたツケが、今、最悪の形で回ってきていた。

「殿下、そろそろ閣議の時刻でございますので……」

机上の一点を睨みつけていたキイルは、ミシエルに促されて席を立った。物言いたげに見上げるカレニーナに、顔をそむけながらため息まじりに告げる。

「……兄上に余計なことは言っな」

十

本宮二階に設けられた閣議室は、全体として焦げ茶を基調とした、落ち着いた小部屋である。中央の会議机には、青灰色の絹地に金糸の織り込まれたクロスが掛けられており、それが室内に唯一の華を添えている。王の趣味により年々華美になりゆく本宮であるが、この閣議室が依然として清貧さを保っていられるのは、王の興味がこの部屋に向けられることがないためであった。

本日の議題はいくつもあるが、採決に緊急を要するものではない。そのため、キイルが予測していた通り、王の再婚話が最重要案件として扱われている。それと並行して議論されているのがキイルの立太子問題だが、この場の主導権を握るのは、法務大臣で王の従弟でもあるダラス公アンジエであった。

「王室法二十五条一項の“現王に長らく王子が誕生しないこと”という文言についてだが、その期間について明記がされているわけではない。キイル殿下が王族としての成人年齢である十八におなりであつても、ただちに立太子せねばならないということではない」

「ダラス公、そなたは恥を恥とも思わぬのか……！あの王室法を制定したのはそなたの先祖ではないか！」

アンジエのあまりに身勝手な弁に呆氣に取られていたミシエルであつたが、氣を取り直したように声を荒げた。ミシエルが激昂する

と、アンジエはゆつたりと含み笑いを漏らす。

「そもそも、アルト・ヴィジェ陛下には王位に就かれて以後、妃がおられなかったのだ。王子が長らく誕生しなかったのは当然ではないか？ 現状をあの法に当てはめるのは、いささか無理があると私は考えていたのが……。どうやら、デュー公は一刻も早いキイル殿下の立太子を期待されておったゆえ、少々先走り過ぎておられたようだ」

ミシエルは珍しく顔を朱に染めていた。アンジエは愉悅の視線をミシエルに向け、自らの正当性を殊更に主張し始める。

「ゴースティン王国において、女子及び女系王族に王位継承権を与えておらぬのは、他国の王族による王位継承を主張されることを防ぐためのものである。また、王の終身制を設けているのは、王位の篡奪を防ぎ、王権を安定させるためのものに他ならない。アルト・ヴィジェ陛下がご壮健であられる今、原則を捻じ曲げてまで嫡子以外の者を後継に指定せねばならぬ必然性はないと私は考えている」

キイルは口を挟むことはなく、じつと成り行きを見つめていた。アンジエのあまりの面の皮の厚さに、怒りも呆れも通り越し、尊敬すら覚えていた。

強かで逞しい。じつと機会をうかがうことができる辛抱強さ。その機会を逃さない眼力。正攻法を用いるほうが間違っているのではないかという気にさせる。さすがは、かつてのゴースティン王家の流れを汲むだけのことはある。

キイルはハーシェリオンの権勢がこれ以上強まることは王家のためにならないと考えていたが、ギルベイド家に介入させる危険はハーシェリオンの非ではなかったことに、今さらながら気づくに至った。

アルト＝ヴィジェ王がこのギルベイド一族の血を濃く引く者であることを、キイルはしょっちゅう忘れてしまふ。キイルの記憶の中に、アンジエを思わせるような兄の姿はない。ただ快樂に興じるしか能のない、王と呼ぶに値しない存在であると思つてきた。

しかし、兄もまたギルベイドの血族であり、それ以上にゴーステインの王でもあつたのだ。

クラウスに命を下したときに見せた瞳の奥にのぞかせた冷たい光……。

今までの柔弱で軽薄な姿は、周囲を欺くための擬態だつたのではないのかとさえキイルには思えた。それと同じものをクラウスも感じたのだろう。だからクラウスはあれほどに弱腰になつたのだ。

閣議は、一時間もしないうちに閉幕した。議題への決着がついたわけではない。アンジエは閣僚たちの反対を覆すことはできず、膠着状態に陥つたというだけのことである。それにもかかわらず、アンジエにはいささかの焦りも見られなかった。

アンジエは悠然と立ち上がり、退室しようとしたところ、扉の前にはカレニーナの姿があつた。

降嫁したとはいえ、ほんの少し前まで王女であつたカレニーナへの敬意が失われることはない。アンジエは恭しく頭を下げ、カレニーナが言葉をかけるのを待った。

「アンジエ、ずいぶんと嬉しそうですね」

「これはカレニーナ様。グレンヴィル伯爵とはお幸せそうだなによりでございます。そのせいでしょうか、陛下譲りの美貌はますます輝かんばかり……。美の女神もかくやというお美しさでございます

ね」

「お世辞は結構よ」

カレニーナはぴしゃりと言い放ち、顎をそびやかせてアンジェを斜めに見やる。

「“外交の役にも立たなかった王女”の幸せなど、あなたにとってはどうでもよろしいのではなくて？」

「まさか、そのようなことは……。それどころか私はカレニーナ様に感謝しているのです」

「感謝ですって？」

「ええ。陛下が再婚をお考えいただけたのも、すべて、カレニーナ様がアズノエル嬢を宮廷に召していただいたおかげでございます。私がいかにレイリア様の面影を宿された令嬢をお勧めしましても、首を縦に振っていただけなかったというのに……。さすがはカレニーナ様、陛下のお好みをよくご存じであられる」

「あなたはなんてことを……。私はそんなつもりであの子と親しくしていたのではないわ！ 第一、アズノエルには」

「カレニーナ、よせ」

キイルは見かねてカレニーナを制した。いつものカレニーナならば、このように声を荒げることはしない。アンジェの言葉によほど腹に据えかねてのことなのだろうが、冷静さを失った彼女が余計なことを口走るのをキイルは恐れた。

キイルが立ち上がると、アンジェは先ほどの閣議で見せていたものと同じ笑みをキイルに向け、当てこするような物言いをする。

「陛下がおっしゃるには、カレニーナ様のサロンでよくお会いになつていて、音楽のお話をされていくうちに、アズノエル嬢にお惹かれになったようでございますよ。殿下もお会いする機会は多かったのではと思いますが、陛下のお気持ちにお気づきになれませんでしたか？」

「……まったく、気づかなかつたな」

平静を装おうとしたキイルだったが、その声が引きつっていることに気づいた。アズノエルとの関係をアンジェが知っているのではないかと彼は焦りを覚えた。今の自分の姿がアンジェにとつてどのように映っているのかと考えることが、キイルにわずかな落着きを与えていた。

「アズノエル嬢は教皇一族の出であるために、王妃になどすれば教会権力を増長させることにつながるのでは、という懸念をデデュー公はお持ちのようです。しかし、私はむしろ教会権力を抱き込むことができるのではないかと考えております。かつてとは違い、いまヤルドリア教会は王家の従属組織なのですから」

キイルは惘然として黙り込んだが、アンジェが意味ありげに笑む。

「……もしや殿下は“教皇の呪い”などというものを信じておられるのですか？」

「まさか。呪いなど馬鹿馬鹿しいものだ」

二人の様子をうかがっていたミシエルが、遠慮がちにキイルに近づく。アンジェはキイルに形だけは礼を尽くすと言わんばかりに一礼し、身を翻した。

キイルはこめかみのあたりに強い疼きを覚えた。苛立ちを押し留めようとすればするほどその痛みは強さを増していった。隣に立つミシエルに小声で問う。

「デデュー公、今日の予定は？」

キイルの意図をはかりかねたのか、ミシエルは即答しなかった。キイルは語気を強めて再度問う。

「……私の身は自由になるのかと聞いている」

「殿下、なにを……」

「少し出かけたい。だから、あなたに手引きを頼みたい」

この身は、己の意思で自由にならないものである。ならば心はどうかとキイルは考えるが、自嘲が即座に思考を遮った。肉体と精神を切り離して考えるなどあまりに滑稽なことだった。

キイルはアズノエルと会い、その存在に触れ合うことができなかった、心が満たされることはないと思っていた。離れることが耐えられないと思ったからこそ、彼は愚かな策に手を染めようとしたのだ。

その策が失われた今、キイルにできることはたった一つ。自身の想いが何者にも踏み荒らされることのない聖域でありたいと願うことだけであった。

届かぬ想い

キイルはミシエルとともにドートリツシュ本邸へと向かった。

キイルの容貌は目立つが、王家の象徴とも言える赤い髪を隠せば大抵のことはなんとかなる。なるべく目立たぬよう、この国ではもつともありふれた栗毛の鬘かつらを選んだ。長上着と中衣も色合いの落ち着いた、装飾の少ないものを用意させた。華美さはなくとも生地は上質の絹で織られており、見る者が見れば一流の仕立てであるところだが、要は、遠目に目立たなければよいのである。

ドートリツシュ本邸は、三百年前までは教皇宮と呼ばれていた。

王都に数多くある貴族の邸宅とはまるで趣が違い、アルティス城とよく似た壮麗な白亜の外観で、天に伸びる何百本の小塔と何千体もの彫像で飾られた外壁は圧巻である。

広大な敷地の一角には聖堂があり、それは一般にも開放されている。一般、といっても平民が訪れることは稀で、ほとんどが大貴族ばかりである。特に信心深いハーシェリオン家の者はこの聖堂をよく訪れている。ハーシェリオン家の馬車で乗り入れれば、不審がられることもない。

聖堂を訪問する礼拝客のために設けられた門を馬車がくぐる。石畳の上を歩いていた十五、六に見える少年が馬車のほうへと目を向けた。数年ぶりに目にするベルチェであった。

馬車がベルチェの近くにまで寄ると、キイルは、車の窓を開け放った。鬘のせいで印象が違って見えたのか、キイルと気づいていないベルチェは不思議そうに目を瞬かせていた。

「……久しいな、ベルチェ」

「キイル殿下……！」

声でやつとキイルに気づいたベルチェは慌てふためいていた。キイルはベルチェを馬車に近寄せ、アズノエルの居場所を問いただす。

「姫様は聖堂にいらっしゃいます」

「今、聖堂に他の者は？」

「誰もおりません」

ベルチェの返事を聞くと同時に立ち上がったキイルの耳元に、殿下、とミシエルの気遣わしげな声が届く。

「どうか、慎重にお動きになってください」

ミシエルがそう諫言する。

今、宮廷中が王とアズノエルの話題で持ち切りとなっているのだ。その最中、キイルがアズノエルと二人で会いなどすればどうなるか、キイルにも考えつかないわけではなかった。

キイルはミシエルを無視するように馬車から降り立ち、ベルチェの耳元で告げる。

「見張っている。決して誰も入れるな」

その返事を待つこともなく、キイルは足早に聖堂の中へと踏み入った。

キイルが重厚な櫺の扉を乱暴に開け放つと、祭壇の前に跪く小柄な女性が背後を見やった。

栗毛の髪をおもむろに外すと、鮮やかな赤い髪が現れる。乱れた前髪を掻き上げると、アズノエルはふらりと立ち上がり、ぼんやりとキイルを見つめた。

キイルはそびえ立つ石柱に囲まれた身廊を進み、アズノエルの近くまで歩み寄ると、彼女の肩をいきおいよく掴んだ。

「兄上とはよく会うのか？」

アズノエルは翡翠の瞳を見開いた。そんな彼女の反応は、キイルの感情を荒立たせた。

棘のある声で、忙しく問いかける。

「王宮にいれば顔を合わせることもあるだろう。だが、長い時間語り合うことなどあるのか？　なんのためだ？」

抑えようとしても治まらない怒りがキイルを苛み、アズノエルの肩を掴む手には自然と力がこもっていった。

アズノエルは怯えたような、それでいて強い意志を持った瞳をキイルに向ける。

「陛下とは、お会いすれば言葉を交わすこともございました。ですが、ただそれだけのことで……」

「たったそれだけのことで、なぜ、あそこまで兄上がお前に執着す

るというのだ！」

「そのようなこと、私のほうがお訊きしたいぐらいです！」

彼女のものとは思えない金切り声に、キイルは気圧されるとともに、少し冷静さを取り戻し始めていた。すまない、と呟きながらキイルは手の力を緩める。

「兄上は、お前を妾ではなく、妃にと所望されている。それは知っているのか？」

「陛下は、私を……妾のような扱いはしないとおっしゃっていましたが、どうしてそんな……」

アズノエルは信じられないというように首を振り、か細い声で途切れがちに言葉を紡いだ。

おそらく、彼女は王の前でもこのような顔を見せたのだろう。

兄王は、四十を過ぎたとはいえ、かつて絶世の美と謳われた容色を持つ。貴族の娘たちは親子ほど年が離れていようと、妾にと望まれれば、たちまちに頬を上気させ、うっとりとした視線を向ける。自分が拒まれるなど、あの兄王は知らないのだ。これほどまでの執着を見せるのは、決してアズノエルがレイリア妃を思わせるからだけではないのだろう。

手に入らぬと思えばこそ、強く欲するようになるのはキイルも同じなのだ。

「兄上にとって女というのは、使い捨ての駒にすぎない。義姉上の虚像をいつまでも崇拜し続け、過去の幻影に囚われ続けている。まるで病気だ」

「それは、存じております」

アズノエルの、どこか諦めたような声は痛々しかった。キイルは彼女の背に回した手を自分のほうに引き寄せ、壊れものを扱うようにそっと包み込んだ。

「この件、クラウドス殿は反対のご様子だ。兄上にもはっきりそう申し上げていた。そして私にもなんとか王を説得してくれと懇願された」

「クラウドスお兄様が……」

「お前は私にどうしてほしい？ 私は、お前を兄上に渡す気はない」

あの賭けを持ちかけたとき、キイルは王座を捨てる強い覚悟があったわけではなかった。本当に男子が生まれるなど思っておらず、仮に生まれたとしても万事が自分の思い通りになるわけではないと諦めを覚えていたのだ。

それでもキイルには自身の気持ちに折り合いをつけることができなかった。もつとも大事にしたいと思っていたアズノエルを、これまで散々蔑み続けた妾という存在に落とし込むことが耐えられなかったのだ。

しかし今、キイルはあの戯言のような賭けの代償をなんとかしてでも払うつもりだった。自らに約束された未来を本気で捨てようという気にさえなっていた。激情に駆られ、我を通そうとするなどキイルの立場では許されないが、幼いころからの想いが叶わぬかもしれないという焦りが、平静さを奪い去っていた。

アズノエルの心を知りたかったのだ。言葉でも、態度でも、どんな形でもかまわなかった。ただ、慰めが欲しかった。それが、自ら

を奮い立たせる勇氣になると思っていた。

「私が望むことは、キイル様が王位に就かれることでございます」

アズノエルが澄んだ声で告げた答えは、キイルの望んでいるものとはまるで違った。

キイルは唇を歪め、冷淡に問う。

「それで、お前は どうするのだ？」

アズノエルは固く目を閉じ、なにも答えなかった。キイルは言葉を待ちながら、じっと彼女の閉じられた瞳を見つめていた。次第に、睫毛の隙間から涙がにじんでいく。

悔しさに震える声で、キイルは問う。

「……兄上の妃ならばよくて、私の妃は嫌か？」

指で涙を拭い、その濡れた指先で、アズノエルの唇をなぞった。そして、朝露に濡れた花弁のような唇に、自身の乾いた唇を押し当てようとしたが、アズノエルは顔をそむけ、キイルの腕の中で暴れた。

「このようなところでおやめください！」

「では、私にどうしろというのだ！」

キイルの声は聖堂内に鋭く響き渡った。その咆哮は、声を放ったキイル自身をいたたまれなくさせた。アズノエルに深く執着するがゆえに浅ましくなる自身を、まざまざと見せつけられたような気がしたのだ。

俯いたまま、弱々しく告げる。

「兄上にお前とのお話しようと思っ」

「それはなりません」

アズノエルのためらいのない返事は、キイルの中にある秘めた迷いを強く刺激した。

親子ほど歳が離れているためか、キイルにとっては甘い兄だった。少々失礼な振舞いをして咎められはしない。望むものは与えられる。キイルの苛立ちにまったく気づいていない無神経さを恨めしく思いつつも、無償で愛を傾けてくるあの憐れな兄を、憎むことなどできなかった。

この件は、初めて兄の怒りに触れるかもしれないと思えば、強い抵抗を覚えた。その正体は、まぎれもなく恐怖であるのだろう。

「兄上の隣に立つお前を、もっとも王座に近い場所から眺めていると言うのか？ お前は私に王になれと言うが、いずれお前が王子でも産もうものなら、私は……なに一つとして手に入れることが叶わなくなるな……」

喉元に込み上げる熱いものを押し殺そうと、奥歯を強く噛みしめ、キイルは歪な笑みをアズノエルに向けた。

「共に逃げてくれるか？」

キイルが言い終わらないうちに、アズノエルは首を横に振った。キイルは唇に薄い笑みを象ったまま、苦々しく呟く。

「お前は残酷だな。いや、一番残酷なのは兄上だな。あの方は、私

たちを苦しめている自覚すらないのだから」

細い腰を抱き、耳へ、頬へ、そして唇に口づけを落とした。今度は拒まれなかったことに安堵したが、どんどん胸の空虚が広がっていく心地がした。

アズノエルがどのように思っているとも、彼女が心のままにそれを口に出すことは許されない。キイルにしても、今の自分の拳動がどれほど良識を欠くものなのか頭の中では理解していた。王が見初めた娘をこうして腕の中に抱いていること自体、表沙汰になればただではすまないものだ。その身分いかんによつては投獄されても文句は言えない。王弟という立場を持つてしてでもなんらかの処罰が与えられることだろう。

「あの賭けは殿下の勝ちでしたわ。ですが、それは奇跡でもなんでもございません。あなたの身を破滅に導くようなものを、どうして奇跡と呼ぶことができるでしょうか」

「そうだな。これが神の与えられた奇跡だというのなら、なぜ私がここまで苦しめられなければならぬのかわからぬ」

互いの意思だけでなんとかなるものではない。移り気な王がいつものように心変わりをしない限り、二人の運命は変わらない。

病的な女狂いと罵られる兄王に対し、キイルは憐れみすら抱いていた。亡き妃の代わりとなる者が兄を癒してくればよいと思っていた。しかし今回ばかりは、その病が悪化してくればよいと思っていた。愛するのはレイリアだけであるのだと、別の者を愛そうとするなどどうかしていたのだと、兄王がいつもの軽薄さを見せることをただひたすら祈っていた。

（はたして、このような願いを神は聞き届けてくださるのだろうか

……)

キイルは祭壇に目をやりながら、儚い嘲笑を零した。

十

強い西日がキイルの青褪めた頬を照らす。

心は燃えるようだった。この赤い感情は怒りであり、嫉妬でもあったが、激しく燃え上がるたびに冷たい灰が胸の奥に降り積もっていった。

規則正しく石段を叩く足音が聞こえる。聖堂を後にしようとしたキイルの前に、黒い祭服をまとったクラウスが現れた。彼の表情は硬く、暗い。訝しんだキイルがふらりと石段の下に目をやると、佇立しているベルチェの姿が目に入った。キイルと目が合うと、ベルチェは決まりが悪そうに顔を伏せた。

クラウスは、静かな声でキイルに問う。

「デデュー公とともにいらしたのですね？」

キイルは栗毛の鬘を手にしたままであることに気づいたが、誰かに自分の姿を見られようとも構わないというような気分になっていた。

黙り込んだまま、クラウスに視線だけを返す。

「殿下、あなたは別の者を王太子に据えようとされているようです

が、恐れながら私は反対にございます」

「そなたもアズノエルと同じことを言うのだな。いや、アズノエルだけでなく、私の周囲の者は皆、そう言うに違いない」

「それは皆が、あなたに期待を抱いているということにございます」

「勝手な期待だ」

キイルは語気を強めてクラウドを睨みつけたが、クラウドは穏やかでありながら強い意思のこもった視線をキイルへ向けた。

「やはり、王位を放棄されようとしていらっしゃったのですね。急にあのようなことを言い出されたので奇妙に思っていたのですが、一体なぜそのようなことを？」

キイルに訊ねつつも、クラウドはおおよそのことに感じているようであった。少なくとも、先ほどキイルがアズノエルと会ったことは知っている。足止めをしていたベルチェが黙秘していたとしても、クラウドは愚鈍な男ではない。彼はキイルの事情を察した上で、諭そうとしているのだ。キイルの行いはまったく愚かなもので、決して許されることではないのだと。

「クラウドス殿……。通常、司祭には婚姻が認められていないだろう？ 我が国に限らず、他国のルドリア教会も同様であるそうだが」

「はい。ドートリツシュとサルファは血統の維持のために特別に婚姻が認められております。もちろん、それでも婚姻せぬ者も珍しくありませんが」

「それではもし、他の司祭たちが誰かを愛したときはどうするのだ？　愛する者を諦めるのか、それとも、司祭であることを諦めるのか？」

キイルは俯いたまま問いを重ねたが、クラウドはキイルにその先を促すかのように、なにも言わない。

「もし、司祭であることを諦めた者を目にしたとき、そなたはどう思うのだ？　愚かだと嘆くのか、哀れだと心を痛めるのか……」

あまりの悔しさからキイルは言葉をつまらせ、感情のままに熱くなる瞳をクラウドに向けた。

「クラウド……。私を、助けてくれないか？」

頼む、とかすれた声で、継るように告げる。

クラウドはすべてを悟ったのだろう。怒るでもなく、哀れむでもなく、ただ静かな眼差しをキイルへ向けていた。

すれ違う願い (1)

ルドリア教会の最高位に位置づけられている聖堂は、ゴースティン王都エクシール中部にあるフェルダ大聖堂である。建設が開始されたのが今から一千年も前のことであり、かつて教皇座が置かれていたという権威ゆえに、国内外から多数の巡礼者が訪れている。

聖堂には修道院が隣接しており、アズノエルはその中の女子修道院をしばしば訪れていた。アズノエルは聖職者ではないが敬虔な信徒であり、修道院長とは親交が深かった。院長は古代語と教会史の研究者であるが、アズノエルはアルティス城に保管されている貴重な文献を自ら写本して図書館に寄贈したり、文献の解釈について論じ合うこともあった。

修道院長との恒例の会見の後、アズノエルはフェルダ大聖堂において長い祈りを捧げていた。夏は既に去ったが、夕刻までは陽が燦々(さんさん)と薔薇窓から降り注いでおり、沈みゆく陽であつても、いまだ強い光を放っていた。

アズノエルは赤い西日を横顔に受けながら、西の尖塔の螺旋階段を上っていた。自分の足音が不気味に木霊するのを感じながら、最上階にまで辿り着いた。登り切るころには、あたりは薄らと闇に包まれ始めていた。

地上よりも強く吹きつける風が、アズノエルの身体中に巻きつく。乱れる長い髪を気にかけることもなく、薄い目蓋を通して流れゆく時間を感じていた。徐々に闇が深まっていく。

アズノエルは意を決したように石壁の手すりから身を乗り出し、

眼下を見下ろす。その先は一面の真つ暗闇で、見つめているだけでその中へと吸い込まれていくようだった。ただ、アズノエルが今いる場所も先の見えない暗闇の中であるため、どこに行こうと大差はなかった。

暗闇の中から、この数日の記憶が浮き上がっていく。

王により与えられた苦痛でしかない愛は、ことごとくアズノエルを打ちひしがせていた。

もともとアズノエルは、王に対し悪感情を抱いているわけではなかった。政治を棄て、快楽に耽溺する一面については、どうあつても敬うことなどではしない。

ただ、あらゆることに恵まれているはずの王が時折見せる寂しげな表情……。それは誰かに救いを求めているようにも見えるものだった。また、傲慢な振舞いが許される立場でありながら、王は決して人を疑わず、悪く思わず、愛情だけを傾けようとしていた。だからこそ、荒廃しているように見える王の精神の中に、秘められた美しいものを見出したいと思っていた。

許してくれ……。

その悲痛な声を思い出すたびに涙が零れた。

抑えつけられた四肢は、真綿で包まれた拘束具をつけられているようだった。耳に直接注がれる甘い声は悲哀に彩られていた。身体を強張らせ、すべてを拒否しようとしても、心からずたずたに引き千切られていった。

不自然に開かれた身体は悲鳴を上げていたが、抱きしめる手が、肌の上を這う指が、あまりにも優しく過ぎた。それは、決して彼女の望むものではなかった。

嗚咽が漏れる。

震える唇を噛みしめながら、キイルとクラウドのことを想った。幼くして父母を亡くしたアズノエルをずっと支えてくれたのがクラウドだった。愛し愛される喜びを与え続けてくれたのがキイルだった。いつまでもこのままの関係が続くはずがないと思っていたが、それでもいつか見た夢のような未来を切望せずにはいられなかった。どうあっても、断ち切られる以外の道しか残されていない今、それを願うことすら罪であるように思えた。

アズノエルは深く息を吐き、目を閉じた。そのまま手すりから身を乗り出し、運命の赴くままに身を任せようとしていた。

「聖堂を血で汚す気ですか？」

胸を射抜く鋭利な声だった。

石壁に触れる手が大きく揺れ、アズノエルは振り返る。角灯ラングの明かりに浮かびあがるのは、黒い祭服を着た若い男の姿だった。

「ロジエ様……」

「どうしました？ そのような軽率な振舞い、あなたらしくありませんね」

アズノエルはその場に座り込み、ロジエを見上げた。ロジエは壁に取り付けられた台座に角灯を置き、アズノエルの近くまで進んだ。突然震え出した口元を、アズノエルは両手で覆った。

「も、申し訳ありません……」

「ここ最近、あなたの様子がおかしいので気になっていたのですよ。それにしても、なぜこのようなことを……。なにがあったのか、話してごらんなさい。あなたの力になれることがあるかもしれません」

から」

そう告げてロジエは腰を落とした。

ふわりと包み込むような声と、なにかもを見透かすような視線に、張りつめていた硬質な空気が氷解していく。誰にも言えない闇色に渦巻いた想いは、四方に拡散していくように、アズノエルの唇から溢れ出した。

これまで、アズノエルとロジエの間には深い親交があったわけではない。むしろクラウスとロジエが教会内の方針について意見を対立させることが多く、そのせいでアズノエルはロジエとはあまり関わらぬようにしていたほどだった。

とはいえ、ロジエ自身の人格に非難されるところがあるとアズノエルは思っていない。教会内においてクラウスと匹敵する強い権力を有しているにもかかわらず、彼はいつも穏やかな笑みを浮かべ、静かに佇んでいた。今、アズノエルに見せる顔もそれと同じものだ。

ロジエは、時折嗚咽を漏らすアズノエルの背を撫でる以外は、相槌を打つこともなく、なにも言葉を発しなかった。平静さを欠いたアズノエルの言葉は、あちらこちらに彷徨い、また、聞き取れなくなるほどにか細くなることもあったが、それでもロジエは根気よく話を聞いていた。

アズノエルが話し終えたとき、ロジエはゆっくりと口を開く。

「そのようなことが……。ここしばらくキイル殿下もなにかに思い悩まれているご様子でしたが、あなたとのことだったのですね」

王宮でのキイルの様子はアズノエルにはわからないが、見る者が見れば、キイルにはなんらかの奇矯な振舞いが見られたということなのだろう。昨日、いきなりドートリツシュ本邸の聖堂へとやって

きたことにしても、冷静な彼の振舞いと思えないものであった。

「しかし、いつまでも隠しておけることではないでしょう。せめてクラウス卿にお話ししてみては？」

アズノエルは何度も強く首を振った。この件に関して、アズノエルは決してクラウスに頼ってはいけないうと思っていた。

クラウスは宮廷にはこびる面従腹背の貴族たちとは違い、オトウル王家に敬意は払いながらも、不必要に関わろうとはせず、おもねることは一切してこなかった。それは、王権に対し、教会が常に中立であらねばならないという彼の信念によるものだった。かつて強い魔力を秘めた司祭たちが俗権力に介入し、政を思いのままに操っていたという歴史があるからこそ、その中核にあったドートリツシュの人間は決して王家と深く関わってはならないのだとクラウスはよく語っていた。アズノエルはそんなクラウスの清廉さを尊敬していたからこそ、ドートリツシュの娘である自分がキイルと恋仲にあることさえ告げることができないでいた。

「ロジエ様のおっしゃっていることはわかります。ですが、クラウスお兄様にこれ以上ご迷惑はかけられません……。あの方を、失望させたくないのです」

「それならば少し冷静におなりなさい。あなたが妃となることを厭い、死を選んだとなれば、クラウス卿は王への反逆に問われかねませんよ。実際にはあの王がクラウス卿を罰するなど考えられませんが、遺された卿は批判の矢面に立たされることになるのですから」

「……ロジエ様、私はどうすればよいのでしょうか？」

「あなたはとうされたいのです？」

ロジェから即座に問い返され、アズノエルは言葉につまった。

「なぜ、キイル殿下とお逃げにならないのです？ 王族として、王太子としての地位を失ったあの方に価値はありませんか？」

アズノエルは涙に濡れた顔を振り上げ、必死に言い募る。

「そんなことはありません！ 殿下が共に逃げようとおっしゃってくださったとき、私、とても嬉しかったのです。ですが、あの方はこの国に必要な方なのです。決して、失われてはいけないのです。…人が生まれながらになんらかの使命を有しているというのなら、あの方は王となるべき方です」

「そうですね……。私もそう思います」

「ですから、私のためにあの方がなにかを捨てられることがあってはならないのです。あの方が生まれながらに与えられているものは、なにひとつ、私情でお捨てになつてはいけません」

次期王として、これまでキイルがどれだけ多くのことを求められ、それに応えるべくどれほど腐心してきたのかアズノエルは知っている。そして、実際にはアズノエルが知っている以上にキイルは骨を折ってきたに違いないのだ。

兄上の隣に立つお前を、もっとも王座に近い場所から眺めていると言っのか？

お前は私に王になれと言うが、いずれお前が王子でも産もうものなら、私は……なに一つとして手に入れることが叶わなくなる

な……。

胸を抉られるような声がよみがえり、アズノエルは身を固くする。キイルをあれほど苦しめているものが、自身であることは疑いようがなかった。少しでも長く彼の傍にすることができればと願い、別れを先延ばしにしたことが、“今”を招いてしまったのだ。

だからもう、アズノエルは甘い夢など見てはいなかった。今からでも手に入れることのできる幸福があるとすれば、キイルの名誉を守り通すということだけだと思った。そのためにも、決して王の妃になどなるわけにはいかない。これ以上、キイルを裏切ることだけはできないのだ。

「ロジエ様。私は、司祭の叙階を受けることは可能でしょうか」

ゴースティン＝ルドリア教会において、強い魔力を有する司祭たちは権威の象徴とされている。誰もが手にすることのできない力だからこそ、司祭たちは珍重され、その聖域に踏み込むことは王権をもつてしても許されないとされている。

アズノエルの意図を察したのだらう。ロジエはうなだれたままのアズノエルの肩に手を置き、顔を覗き込む。

「王は、あなたを無理やり還俗なさっても妃にと望まれるかもしれませんよ」

「私を妃とすることを、すべての方が賛同されているわけではないでしょうし、還俗させてまで妃にするとなれば、周囲の方々が陛下をお止めになるはずです。陛下が私を妃に望まれる以前に、私が司祭の叙階を受けることが教会内で決まっていたとすれば、王命であるうと拒むことができるものではありませんか？」

「たしかに、それはもつとも有用な手でしょう。ですが、クラウド卿がなんとおっしゃるか……」

「以前、司祭になることを認めてほしいと話したことがあるですが、お兄様には反対されてしまいました。ただ、あのときと今では事情が違いますし、聞き入れてくださるかもしれません。ですからどうかご助力をお願いします、ロジエ様……」

これさえ叶えば、すべてが終わるとアズノエルは思っていた。

後はただ、キイルへの想いを忘れることができればいい。元々結ばれるはずのない相手だったのだから、永劫の別れであろうと受け入れなければならぬのだと自分に言い聞かせていた。

すれ違う願い (2)

ゴースティン＝ルドリア教会は、三か月に一度、国内の司祭をフエルダ大聖堂に集めて定例会議が行われる。教義や運営方針について話し合われた今日の会議は滞りなく閉幕したかに見えたが、会議を取りしきる＞総議長＜の地位にあるロジェ・サルファにより、別の議案が提起され、急遽、上級聖職者である＞高位司祭＜のみがその場に残された。

「私は、アズノエル＝リネージェ殿に高位司祭の資格を与えるべきと考えているのです」

ロジェがそう告げた途端、ざわりと会議場に波が立った。総議長席の隣に腰かけているクラウスは、いきなりなにを言い出すのかと、ロジェの横顔を睨むように見やった。

高位司祭の一人がためらいがちに口を開く。

「たしかにアズノエル殿の有されている魔力は類まれなものと聞き及んでいます。しかし、このようなことをされてよろしいのですか？」

司祭たちの困惑したような視線がクラウスとロジェに注がれる。

アズノエルは正式に王の婚約者と決まっではないが、王がアズノエルを妃に望んでいるという話は王都に住まう貴族の間に広がってしまっている。この状況でアズノエルを司祭にしようとするなど、彼らが訝しく感じるのは当然だった。

数か月前、司祭になるために取り計らってほしいとアズノエルが申し出てきたが、クラウドはそれに同意しなかった。ルドリア教会の内部は宮廷以上に権謀術数うごめく悪の巢で、司祭たちは稀有な力を有するがゆえに傲慢な考えを持つ者が多い。アズノエルが敬虔な信徒であるからこそ、教会権力の中核に関わらせるべきではないとクラウドは考えていた。

ざわめく議場を見渡し、クラウドはため息を呑み込む。

主教はこの場においてもっとも強い発言力を有しているが、クラウドがどのような発言をしようとも私情を挟んでいるようにしか見えないだろう。

迷った挙げ句、あえて王のことには触れずに意見を述べる。

「たしかに、アズノエルの有している力は高位司祭の叙階を受けるに相応しいものであるかもしれない。ただ、俗人であった者をいきなり上級聖職者に叙するというのには抵抗がある。一旦は修道女として一定期間の修業を積むべきではないかと私は考える」

クラウドが言い終わるやいなや、ロジエが淡々と反駁する。

「クラウド主教の言われる通り、大抵、修道士や修道女であった者が司祭の叙階を受けるのが通例です。私や主教ですらそうだったのですから。ですが、まったく前例のないことはありませんし、国内外から強い魔力を有する者を集め、彼らを同士とすることは私たちの責務です。なにぶん、他国に比べ司祭の数がまるで足りないのですから」

ゴースティン＝ルドリア教会は三百年前より王家の支配下に置かれたが、それに伴い、他国のルドリア教会とは異なる組織系統を有するようになった。その最大の原因は、魔道の力を操れることが司

祭叙階の条件に課されているためである。

現在、上級聖職者とされる>高位司祭<の叙階を受けている者は二十名ほどであり、その中には最高位とされる>主教<も含まれる。その他の>下位司祭<は約二百名であるが、四千万に達せんとするゴースティンの人口から考えれば、二百数十名しか聖職者がいないというのはあまりに過小である。

当然、すべての教区に司祭が行き渡ってはいない。日々の礼典を取りしきるために、修道士と修道女の一部に対し礼典執行の資格を特別に付与することで、聖職者の不足を補う形となっている。ゴースティン国内だけでなく周辺諸国からかき集めても、約二十名しか高位司祭がいない現状を踏まえれば、一人でも多く聖職に就く資格のある者を獲得したいと考えるのは当然であつた。

一旦、アズノエルの叙階を認めるという方針で話が進められることとなつたが、合議の終了後、クラウスはロジエだけを会議場に残留して人払いをした。

隣り合つた席に着くロジエに背を向けるようにクラウスは立ち上がり、窓の外を見つめながら口を開く。その言葉の端々にはロジエを非難する響きが見え隠れしていた。

「サルファ司祭、あなたは以前からあの子を司祭にさせたがつていたようだが、なぜいきなりあのような提案を合議にかけたりなどされたのだ？」

「先ほども申しましたが、教会組織を盤石なものとするため、最高部を統括する聖職者の数を維持していかねばならないからです。私からすれば、なぜあなたが反対されるのか理解できません」

ロジエは棘の含んだ言葉をさらにクラウドスへと向ける。

「そもそも、強い魔力を有する継嗣を儲けることが私たちの義務ではありませんか。我々に特例が認められているのも、高位司祭の半数がドートリツシユとサルファの縁者で占められているがゆえのこと……。それにもかかわらず、ドートリツシユはあえて婚姻せぬ者が多いですが。そういえば、ユリウス卿はあなたとアズノエルとの婚姻を望んでいたと聞きましたか？」

「父はそのつもりでアズノエルを本邸に引き取ったようだが、私にそのつもりはない。そして、あの子を教会になど関わらせるつもりもない」

「だとしても、本人が望んでいるとなれば、それを却下する理由などないではありませんか。実を申しますと、先日アズノエルから頼まれたのですよ。司祭になることを認めてもらえるよう、クラウドス卿に説得をお願いしたいと」

クラウドスは振り返り、微笑を顔に貼りつけたロジエをねめつけた。

「王が妃にと望んでいること、そして、キイル殿下とのことに悩み、酷く思いつめていたのです。……あの西塔から飛び降りようとするほどに」

ロジエの長い指が、窓から見える尖塔を指し示す。その方向に目をやったクラウドスからは、たちまち血の気が引いていった。

そんなクラウドスを追い立てるように、ロジエはゆったりとした口調で酷薄な言葉を紡ぐ。

「王の妃となることを厭って命を断つなどすれば、クラウドス卿が王

に罰せられかねない、そう諭すと、アズノエルは踏み止まりました。だからこそ、私はアズノエルの願いは叶えてやりたいと思うのです」

「アズノエルの望み？」

「キイル殿下が次期王になられることだそうです。殿下は、王にアズノエルを渡すぐらいならば、王位を棄てて共に逃げるとまでおっしゃったそうです。そんな殿下の軽挙を止めなければならぬとアズノエルは考えているようです」

「そのために、司祭になろうとしていると……？」

クラウスは額に手をやり、壁によるめく身体をあずけた。

こんなことになるならば、数か月前の時点でアズノエルを叙階させておけばよかったとクラウスは自分を責めた。>高位司祭<の総員で構成される合議での決定事項は、ゴースティンの国内法に優位し、慣例上、王命であっても覆すことの許されないとされている。つまり、アズノエルを司祭にしてしまえば、彼女を妃に望む王の申し出を断るための強固な盾となったかもしれないのだ。

「二か月ほど前だったでしょうか。キイル殿下が、自分は王にならねばならないのか、と私に訊いてくれました。悩んでおられるのはご結婚のことだと容易に想像が付きまします。その相手がアズノエルだとは思いませんでしたかね」

「キイル殿下は、陛下のご落胤を王太子に据えようとまでされていた。そして、自らは摂政となるつもりであると……。しかし、アズノエルと共に出奔するなどと、本当にあの殿下が言われたのか？」

「キイル殿下は非常に優秀な方でいらっしやいますが、やはりまだ

お若い……。あの方がゴースティン王族であろうとするのなら、確実に選ばねばならない道があったはずなのですが、それを完全に見失っておられます。手遅れにならなければよいのですが」

クラウドの中に、助けてほしいと懇願するキールの姿が過ぎった。キールはその身に抱えているものを、その意思によって棄てることなどできない。それは彼自身が一番わかっているはずだというのに、アズノエルのために誠実であろうとするあまり、自ら身を破滅させる方向へと突き進んでいる。

「あなたに王命をはねつけるだけの権力があれば、このような事態にはならなかったでしょうに」

ロジェが冷笑まじりに告げ、クラウドを見上げる。

「かつてドートリツシュは国王ですら平伏した権門であったというのに、ゴースティンの一貴族の地位に貶めてしまったのはあなた方歴代の当主たちでしょう。今の本家の家系は五百年以上も前に教皇筋より分かれた家の子孫……。かつて神の代理とも呼ばれた一族の誇りをお持ちでなくとも無理はありませんがね」

血統の維持に執着していないクラウドであっても、今の本家が馬の骨だと言わんばかりの弁には、いささか気が立った。その苛立ちを抑え、再びロジェに背を向ける。

「アズノエルの司祭叙階の件は保留する。今しばらくは、陛下の説得を試みたい」

「あの王になにを言おうと無駄なことでは？ 王が翻意なさるのなら、とつくにされているでしょう？」

クラウドスはロジエの言葉を黙殺した。まだ、王の説得を諦めることができなかったのだ。

アズノエルが聖職に就くことを望んだ理由が、単に王妃となることを厭ったためであるならば、クラウドスは王の不興を買ってでも教会の合議決定を盾にアズノエルを司祭としたことだろう。しかし、キイルのためだと知った今、アズノエルの望みを叶えるわけにはいかないと思った。

クラウドスは、アズノエルが一生キイルに会わないつもりでいることを悟った。両親を早くに亡くした薄幸の少女の幸せを願えば、このような悲しい選択をさせたくなかった。王がアズノエルを妃とすることを諦めさえすれば、たとえキイルの妃となることは叶わずとも、二人の想いが無残に散らされる必要はない。彼らが幸せになる道はまだ残されているはずだと思うからこそ、クラウドスは今一度王に翻意を促したかった。

盲目

夕刻の公式礼拝が行われた後、クラウスは王の侍従とともに王の私室へと向かった。クラウスが謁見を申し出るまでもなく、王がクラウスに話があるとのことで、白い侍従たちがクラウスの前へと現れた。

侍従たちが案内したのは、謁見の間ではなく王の私室であった。天井まで伸びた窓の前に王は立っており、クラウスが入室するともに王が口を開いた。

「アズノエルはどうしておるのだ？ 余のもとへ連れてくるよう申しつけておったであろう」

王はクラウスに背を向けており、その表情を読み取ることはできない。しかしその声はどこか愉悦を含んだものであった。

王の出方を探るために、クラウスはあえて合議の件を持ち出す。

「本日行われた高位司祭の合議により、アズノエルは高位司祭の叙階を受けることとなりました」

王が振り返り、咎めるような視線をクラウスに向けた。クラウスは王に毅然とした態度を保ったまま、さらに言葉を続ける。

「司祭となるのは修道女としての誓願を立てて後のことになりますが、これは本人の強い希望でもあります。ですから陛下、婚姻の件はどうか辞退させていただきたく……」

「ドートリツシュの司祭は特別に婚姻が認められていただろう？
司祭のまま妻に娶ってもかまわぬのではないのか？」

王があまりにも淡々と言葉を紡いだため、クラウドは呆氣にとられた。

聖職者を俗界の最高権力者の妻に据えることに問題がないと、この王は本気で考えているのだろうか。この王に常識など通用しないとクラウドは改めて思い直し、決然と問いかける。

「なぜ、陛下はそれほどまでアズノエルにこだわられるのですか？」

「愛しているからだ」

王の即答に、クラウドは吐き出しかけたため息を呑み込む。それならば、十八年間も独身を通そうとしたのは一体なんだったというのか。なぜ妾でなくあえて妃にと望むのか。

クラウドは王に翻意を促そうと出向いてきたわけだが、呆れや怒りのほか、諦念までが沸き起こり、クラウドから言葉を奪っていた。

「クラウド、そなたも近々結婚するのだったな。ドートリツシュ分家の者とだったか？」

いきなり自身の話題を振られ、王の意図が読めないクラウドは曖昧にうなづく。

「そなたは、妻となるその娘を愛しているのか？」

「……それはもちろん、大事にせねばならないと思っています。彼女は私の従妹に当たる者で、かねてより婚約を交わしております」

たから」

王の哄笑が室内に響き渡り、クラウドの声を遮った。王は肩を震わせ、束ねていない長い髪をゆるやかに揺らしていた。濃い睫毛に彩られた豪華な瞳がクラウドへと向けられる。

「まったく、そなたは本当に面白い男だ。それを冗談ではなく本気で申しているのだから。……余は、そのようなことを訊きたかったのではない。そなたは、狂おしいほどの恋情を胸に抱えたことはないのか？　それがわからぬのであれば、このような話をそなたにしても意味のないことだ」

クラウドはドートリツシュ本家の嫡子として、生まれたときからその行く末は定められていた。本家の人間は血統の維持が義務であるため、当主でありながら自分の意思のみで婚姻相手を定めることはできない。これまでクラウドは、その身に課せられた責務を当然のように受け入れ、また、抗うこともしてこなかった。己のすべてを棄ててでも、なにかを手に入れたいという衝動に駆られたことなど一度もなく、愛や恋を選択の価値判断に加えることの意味もわからなかった。王がその胸の内を語ったとしても、クラウドにそれを理解するのは難しいことであっただろう。

クラウドは途方にくれながらも、さらに説得を続けようとする。

「陛下、アズノエルには他に想う方がいたようでございます。……私は、詳しいことは存じませんが」

王の澄んだ青い瞳に暗い影が過ぎる。クラウドは漂い始めた不穏な空気に、思わず視線をそらした。

王は含み笑いをしながら、クラウドをぞっとさせるような冷たい

声で言い放つ。

「誰を想っていてもよい。余は、アズノエルに愛されようなどと思つてはおらぬ。……ただ、この腕の中にあればよいのだ」

王の私室を後にしたクラウドは、侍従の目も気にせず大きく肩を落とし、何度目になるかわからないため息を吐いた。

ロジェの言うように、教会が王権と真つ向から対立できるだけの力を失くし、それを何百年も甘受してきたことが今へとつながっているように思えた。

「クラウドス殿」

背後から呼びかけられたクラウドスが慌てて振り返ると、そこにはキイルの姿があった。

「兄上のお心は変わらぬか？」

絞り出すような声で問いかけるキイルの顔は、ほんの一月ほど前、生誕祭の折に見かけた面影はなかった。才気あふれるキイルが、日に日に憔悴の色を強めているのは痛ましい限りである。

「いつそ、あれを連れて逃げようと思うが……そなた、どう思う？」

聡明なキイルの言葉とは思えなかった。

いつものキイルは、華やかでありながらも、どこか冷やかさを忍ばせた空気をまとっており、まさに彼の伶俐な気質を現していたも

のだが、それがすっかり削げ落ちてしまっているかに見えた。

「殿下、どうか早まった真似はなさいませぬよう……」

クラウドがたしなめるような声をかけたが、キイルは一笑しながら顔をそむけた。

「私の縁談が決まりそうだ。そこに私の意思はないが、叔父上が強硬に進めている……。遅くとも今年中に正式な婚約が交わされるだろう」

デデュー公ミシエルは、キイルの気持ちを知っているのだろう。キイルの後見人であるミシエルとしては、なにか取り返しのことなことが起こる前に、キイルの身边を固めたいと思うのは当然である。

「そのほうが殿下のためにはよろしいかと存じます」

クラウドは苦渋の思いでそう告げた。ミシエルの強硬策は却ってキイルを追いつめているかに思えたが、実際のところ、クラウドには取りうる手がないのだ。

キイルは、忠告など聞く耳持たずという素振りでクラウドに微笑みかける。

「今からでも暗愚である振りをしてみるというのも手か？ 利用価値のない王弟になど、誰も見向きもしくなくなるであろう？」

抑え切れぬ自嘲を吐き出したキイルは、片手で顔を覆い、くつくつと喉を鳴らす。

「いや、それでは駄目だな。ますます兄上に妃を娶り、王子を儲けよとの声が大きくなるだけのこと……」

あらゆるものに恵まれ、周囲の者から多大な期待をかけられてきた先王の第二王子……。

クラウスはアルト・ヴィジェ王とキイルはまるで似たところがないとクラウスは思っていたが、ある一つの局面に立たされた今、正反対であったはずの兄と弟が奇妙に思えるほどに重なり合っていた。クラウスは少年期の王についてまったく知らないが、レイリア妃の死があればどこまで彼を変えたのだろうか。このままではキイルまでもが同じ道を辿りはしないかと、その行く先を憂える気持ちが募った。

「近いうちに、彼女と会う機会を作ってはくれないだろうか」

キイルの懇願に、クラウスは即答することはできなかった。どうすることがアズノエルとキイルにとって幸せであり、最善の策であるのか、クラウスにはわからない。キイルをアズノエルに合わせることは困難ではあるものの、まったく策がないわけではない。

しかし、一度や二度会ったところで彼らの中でなにが変わるといふのか。

二人は想い合ってはいても、その願いは、既にすれ違ってしまっているのだ。

「あの子に会って、どうなさるおつもりなのです」

一つの恋を諦めさせること、課せられた責務を認識させること。それが今、クラウスの為すべきことだろう。決して、アズノエルに合わせることなどではない。キイルを真の意味で助けようと思うのであれば、彼の軽拳に加担などしてはならないのだ。

キイルは、アルト・ヴィジェ王の負債を背負わされてきた犠牲者であるとも言える。だからこそ、彼はこれほどまで頑なになっているのだろ。快樂に耽溺する王が、最愛の娘を奪う……。今まで王に対して降り積もっていた不満が爆発したとしても不思議はなかった。なんとか自棄を起こさずにいるのはキイルの誇り高さゆえだと思われるが、それがいつまで続くかわからない。

「別になにも……。ただ、会いたただけだ」

そう呟いたキイルは陶然としているかに見え、クラウドは底の知れぬ恐怖を覚えた。

倒錯する過去

「クラウド卿は、いまだ難色を示されているようですね」

クラウドがうなだれたまま退室していくのと入れ替えに、ダラス公アンジェが王のもとへ姿を見せた。アンジェは下卑た笑みを口端に浮かべ、肘掛け椅子に腰かけた王に近づく。

「これまで散々、陛下に妃を娶るよう陛下に申し上げておきながら、いざ、自身の従妹殿がお相手となると反対なさるのですね」

アンジェの皮肉に、王は口元を吊り上げた。不快さに耐えるために笑みを作るのは、彼の幼いころからの癖である。

「クラウドはアズノエルを実の妹のようにずっと大事にしてきたのだ。……色狂いと罵られている余に嫁がせることに渋るのも無理はないだろう」

王にとってクラウドは、もつとも信頼のおける忠臣であつた。十八で宮廷に上がってからこの六年、王の戯言にも真摯に耳を貸し、小気味良い小言を王に浴びせる。生真面目で、何事にも懸命に尽くす人物だからこそ、王はクラウドを傍に置き、重用してきた。

それにもかかわらず、王はクラウドがあれほど大事にしていた従妹^{いと}に無体を働いた。必死に抵抗するか細い身体を組み伏せ、欲望のままに蹂躪した。

王は、アズノエルに許せと口にしつつも、許されようなどと思っていない。かといって憎まれたいわけではなく、やはり愛されたいと願っていたが、アズノエルが自分を愛することはないだろうと諦めてもいた。心が手に入らないのなら、せめて自分の手元に留め置きたいと考えるようになっていた。

あれから一か月が経つが、アズノエルは一度も王宮に顔を出さない。彼女が自らの意思で王のもとに出向いて来るはずがない。それがわかっていているからこそ、王はクラウドにそれを強要させようとしている。

ふいに、クラウドの重苦しい声がよみがえる。王は直視するのを避けたが、クラウドは明らかにやつれてしまっていた。

「アンジェよ、そなたはこれで満足か？」

王は頬杖をついたまま、上目でアンジェを見やる。

「ずっとそなたが望んでおったことが叶うのだ。これまで何度レイリアと似た面差しの女を余の前に連れてきただろう？ 覚えておらぬのか」

「もちろん喜ばしいことですが、これには少々私も驚きました。ずいぶんとお若い方でしたのでね。じきに十八とられるようですし、若すぎるということもございませんが、できればカレーナ様よりは年長の方を、と私は考えていたのです。しかしそれは陛下のお好みではなかったのでしょうか？」

「余は、そなたに宛がわれた女など娶る気がなかったただけだ」

王はアンジェに向けて冷やかに言い放ったが、アンジェは意に介すこともなく、さらに軽やかな口調で応える。

「伴侶となる方をご自身の手でお選びになりたいという陛下のお気持ちちはわかります。かくいう私も、父に定められた婚約を破棄し、自身が望む相手を妻としましたゆえ、これまで陛下に無理強いはいできなかつたのです」

「そなたが余の意思を尊重しようとしていたと？ 冗談だとしても笑えぬな」

王の声はなんの色も浮かべない平坦なもので、終始、語気が乱れることもない。

「余の後継はキイルであると、何度にそなたに告げたであろうか。そなたの耳は、都合の悪いことは一切聞こえぬようだ」

王は微笑を象ったまま、主君に一片の敬意すら払おうとしないアンジェを見つめていた。王がアンジェとこのようなやりとりを交わすのは久々のことであつたが、その向かう結末に変化はなかつた。

「陛下がアズノエル嬢を後添いに選んでいただいて、私は満足でございます。下賤の女の産んだ私生児を王太子とするなど、あまりにおぞましいことです」

アンジェはそう言い捨てて身を翻した。

扉の閉まる音がやけに耳に残り、王は柳眉をわずかに寄せた。椅子に背を深く預け、長いため息を吐きながら、片手で顔を覆う。暗い目蓋の裏に、光に満ちた春の日の情景がぼんやりと浮かんでくる。

『太陽や月が手に入ろうとも、余の心が満たされることはないだろう』

ベルージャを奏でていた手を止め、王は独り言のように呟いた。薄く開いた王の瞳に映るものは、微風になびく亜麻色の髪と、天使のような慈愛に満ちた微笑であつた。

『太陽や月など、手に入れてどうなさるのですか？』

『そういうことを申しているのではない』

王が苦笑まじりに告げると、鈴の鳴るような声が唄うように言葉を紡ぐ。

『人というものは、どうして手に入れがたいものばかり望んでしまうのでしょうか。叶わぬ願いを抱き続けても辛いだけですのに』

薄い雲の隙間から降り落ちる陽光が、繊細な曲線ばかりで描かれた清楚な顔に淡い影を落としている。

王は再びベルージャを抱え、よく手になじんだ旋律を奏で始めた。

『これは余が作つた曲なのだ』

『まあ、陛下が？』

『余が、自らの誇ることができるのはこれを奏でる腕だけだ。このようなものは王たる者にはいらぬ才であるがな。時折、ふと考えることがある。もし余が王族などに生まれなければ、このような空虚に悩まされることはなかったであろう、と……』

王は虚空に目を馳せた。青々と茂った木がさわさわと音を立てる。

『これは、元は異大陸の楽器なのだ。ルザーリから渡ったとされているが、厳密には南方の大陸の、ゴースティンが属領としている国のものだ。幼いころ、余はベルージャのような楽器をもっと手に入れたいと口にした。すると、教師たちは余が南方の属領を拡大したがっているとは解した。覇気のない気質といつも嘆いていた教育係の者たちが、そのときばかりは満足気であつたな。余は、いくつもの大国を支配する帝王になりたいなどと思わぬが、まったく未知の世界を自由に見聞するのは、興味深いものだと思わぬか？』

『はい、それは楽しそうでございますね』

会話が途切れるとともに、凜いだ風が吹く。

鎖骨に垂らされた一房の髪は艶やかな黒で、弓型に細められた瞳は、王とは色合いの異なる深みのある青色である。

王の脳裏に浮かんでいたのは、アズノエルとの会話でありながら、レイリアのものでもあつた。長い時間を経て、徐々に浸食されつつあつたものが、上塗りされ、別の鮮やかな記憶としてよみがえっていく。

王は目元を覆っていた手を外し、薄らと目を開けて呟く。

「そなたが、一番愛おしい……」

それが誰に向けた言葉であつたのか王にもわからなかった。ただ、王としてはそれが誰であろうとかまわなかったのだ。人を愛する喜びを思い出すことだけが、彼の空虚をゆるやかに満たしていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4114s/>

いつかあの場所で

2011年11月26日19時52分発行